



寒桜の投入

主材 寒桜（薔薇科）

副材 水仙（彼岸花科）

洋菊（アナスタシア・菊科）

いけばなで初冬に「寒桜」の名前でいけているのは「十月桜」もしくは「子福桜」で花は八重。ほかに「冬桜」や「四季桜」などの一重咲きの冬に咲く桜があり、これらは山の斜面を埋め尽くすように咲く名所があるので、一度訪れてみてはいかがだろうか。

冬桜の名所では群馬県藤岡市おにし鬼石が有名で七千本が育つ。（テキスト581号でも紹介した。）

四季桜の名所としては愛知県豊田市小原で一万本の四季桜がいつせいに咲き、紅葉とのコントラストが絶妙だそうだ。

作例の寒桜は「子福桜」だと思おう。枝を広げすぎると寂しくなるので、主になる枝をとめたら、その枝の後に別の枝を重ねる。

季節の花として水仙をとり合わせ、濃赤色の洋菊で水際の茂みと温かな色彩を加えた。

この投入では菊の選択がポイントになっている。アナスタシアという洋菊は秋以外に使っても花がモダンなので違和感がない。また濃い赤色を選ぶことで寒桜の冬枯れた風情にあたたかみを加えることができる。



松と寒牡丹

^1頁の花^ 仙溪

手も凍える寒さの中で、菰に覆われて健気に花色をのぞかせる寒牡丹の赤い花。敢えて厳しい環境に挑むように顔を紅潮させて開こうとする花の気品に触れたくて、貴重な花を切つて松といけた。

自分はこの寒牡丹のように敢えて困難に向かつていつているだろうか。この貴い命をいけるに値する人になつてゐるだろうか。父だったらこの寒牡丹をどんなふうにいけるだろうか。

花材 寒牡丹 松

花器 陶コンポット(宇野仁松作)



南天と白菊

〔2頁の花〕 仙溪

いけるまでは平凡なとり合わせすぎて、「テキスト」の作例になるだろうかと心配していたが、この平凡さがかえって新鮮な一作となった。ただし菊の品種、花器の選択といったものが別のものだったら、平凡なだけのいけばなになっていたかもしれない。もし別の花器にしていたら、などと想像しながらご覧いただくのも、感覚を磨く一つの方法だと思ふ。

花材 南天 菊
花器 魚耳陶花瓶



マユハケオモト 仙溪

眉刷毛万年青は南アフリカ原産で、彼岸花科ハエマンサス属の常緑多年草。花の姿を眉刷毛に見立ててこの名前がついた。

鉢植えから根っこごと抜いて土を洗い落とすと、球根状の鱗茎と太い根が残るので、そのまま器にいけることで長い間いけて鑑賞することができる。そのままだと転んでしまうので、剣山に棒を立てておき、針金で倒れないように固定している。

陶器の大きな片口に水を少なめに入れ、眉刷毛万年青を二株とめてから干両を短く挿し加えた。

幅の広い肉厚の葉はおおらかな美しさがあり、不思議な花をつけた太い花茎とともに見えて見飽きない。これほど茎の立派なものも珍しいので、横へ出た花を生かす横長の花型にして、横長の塗りのお盆に片側に寄せて飾ってみた。

漆器には上質の品格が備わっている。漆が何度も塗り重ねられた器には、時間と手間を惜しまない物作りの魂が宿っているように思う。少しずつの積み重ねを大切に、心をこめてやり続けてこそ得られるもの。そんな心のもった物を、物も心も大切にしながら使うことが豊かさではないかと最近思うようになった。

物に宿る心を感じ取れる、豊かな心が持てるように、精進したい。



花曜会

△3頁の花▽ 仙溪

毎月一回の花曜会は、いけたい花をいける自由花の研究会。八年前に母が亡くなった翌月から、父は指導側ではなく、自分も一作花をいけてくれていた。何をどんなふうにいけていたか、手元に残す残してある。昨年一月には濃紺の深鉢に青文字をかため、薄紫のスカビオサと黄色のスパレーの糸菊をのぞかせている。「ちよつと色がぼけたかな」と云っていたが、その時の青文字の扱いは鮮明に覚えている。追憶の花。

花材 青文字（楠科）

チューリップ（百合科）

花器 緑釉深鉢



球根のままで

主材 雲龍梅（薔薇科）

副材 喇叭水仙（彼岸花科）

椿（椿科）

花屋で小型の喇叭水仙の鉢植えを見つけたので一鉢買って帰り、球根ごと鉢から抜いて土を洗い落とし、そのまま剣山にさしとめていけてみた。

切り花ではここまで小さな喇叭水仙は売られていない。鉢植えの花には切り花にはない自然味があるので、ときどき買っていけているが、この喇叭水仙のように、鉢から花を切っていけると短すぎていけにくい場合などに、根ごと、球根ごといけるという選択もあっていい。

こういう使い方を「根洗い」と呼んでいる。

このいけばなのもともとの発想は、中国の正月に飾られる球根水仙を思い出して、球根ごと景色花として使ってみたくなった。

ところが、いざいけてみると、球根の部分はまともに見えない方が良さそうなので、椿の葉で隠すことにした。

とり合わせた雲龍梅は喇叭水仙に合わせて短めに切り、竜のような枝姿がはっきりと見えるような場所に出している。雲龍梅はとても香りがいいので、咲くのが楽しみである。



ヒヤシンス

〈11頁の花〉

仙溪

ヒヤシンスを球根のまま置いておく。ヒヤシンスは地中海東部の原産だが、地中海沿岸は夏に雨が少なく冬に雨が多い冬雨型の気候なので、夏の間は球根で休眠し、秋から春の間に生育、開花する植物が多い。例えば水仙、チューリップ、シクラメンなども同じく地中海沿岸に分布している。

ヒヤシンスは丈が短いので、デンファレとの二種いけにして、花を目立たせた。

花材 ヒヤシンス(百合科)

デンファレ(蘭科)

花器 濃紺ガラス花器

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2013年
3月号
No. 597

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



枝を前へ

△表紙の花▽ 仙溪

早春、まだ雪の降る寒い時期に満作は咲く。黄色の細い花弁がクシャクシャと丸く集まったような花。不思議な花である。花満作の名前で花屋で売られるものは、花が大きくて香りの強い支那満作の仲間だそうだ。表紙でいけた満作は、よく見ると花の色と大きさが違う二種類を混ぜていけている。

満作の花を目立たせたかったので、右前方に長い枝を三本集めている。2月号の青文字の盛花と同じような前方へ枝を出す花型である。

満作で水際をつくり、その後ろにアマリスの花と葉を覗かせた。アマリスは葉で花の茎をある程度隠すようにするといいい。

花材 花満作（満作科）

アマリス（彼岸花科）

花器 白色釉陶深鉢

盛花と投入 仙溪

剣山にさしていける盛花と、花器にもたせかけていける投入は、いけている時の感触が微妙に違う。

いけなを習い始めのころは花器に留めにくい投入よりも、角度や向きを思いのままいけられる盛花のほうがいけやすい。投入で枝や花を形良くいけるのには、経験を積まないと身につかない「勘」が必要になるが、この勘が身につき始めると投入の楽しさに気付くことになる。

枝をある程度自由にとめられるようになってきて、今は「手を離す」ことを楽しんでる。枝に必要な仕掛けをして花器に入れてみる。その時に器と枝が偶然にどんな空間をつくってくれるか。主導権を枝にあずけるような気持ちで「手を離す」のである。その時にいい表情を見せてくれるかどうかは、こちらの技量次第ともいえる。仕掛けがなかなかうまくできずにもたもたと枝をいじつていたり、枝もくたびれてしまう。是非とも数多くいけて経験を積み、「手を離す」楽しさを味わってほしい。



自然体で

△10頁の花▽

仙溪

今月のテキストにはシンビジウムを二種使っている。二頁の直立型・臙脂色・小型と、この頁のキヤスケード型（下垂型）・淡緑白色・大型。二頁のは切り花で、この頁のは鉢植から切ってつけている。

キヤスケード型のシンビジウムは立ち上がった茎が途中で曲がり、その先に花が沢山ついているので背の高い器に投入するのが自然なわけ方だろう。作例に使ったのは一本だが、花器に入れただけでもかなり存在感がある。あとはシンビジウムと原産地の近いグロリオサを二本添えて、自然体の投入にした。

花材 シンビジウム（蘭科）

グロリオサ（百合科）

花器 青色釉陶花瓶

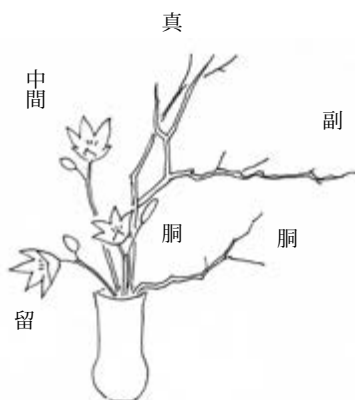


上り広がる枝・添って出る花

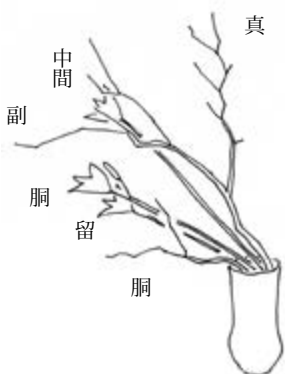
主材 土佐水木（満作科）
副材 透かし百合（百合科）

稽古を積んでいけばなは技術が身についてきたら、枝の姿に合わせて自然体でいけてみるといい。枝が前へ出れば花はうしろへ。枝が横へ広がれば花は中央に、というように、花型を自在に工夫することで、さらに一歩前へ進むことが出来る。

投入斜体副主型（逆勝手・控省略）



右横から見たところ





洋花と青麦

△9頁上の花▽

仙溪

大麦の若い花穂はいかにも春の
どかな感じがする。青麦の名前で早
春からよくいけるが、いけたあとだ
んだんと花穂が上にのびてゆく。と
り合わせには明るい色彩の洋花がよ
く似合う。無季節な感じの花も、青
麦と一緒にいけると、春の表情にな
るのが面白い。

花材 青麦 (稲科)

エビデンドラム (蘭科)

花器 橙色釉陶花器



君子蘭

△9頁下の花▽ 仙溪

君子蘭は南アフリカ原産の彼岸花科クリビア属の多年草。明治時代に日本にやってきた。肉厚の長い葉が左右に広がり、中央に平たい花茎を伸ばして複数の花が咲く。王様のような威厳を感じての命名なのだろう。とり合わせにも気を遣う。君子蘭の個性を潰さないようなお相手を考える。作例では縞斑の入った玉羊歯と都忘れを選び、君子蘭が目立つように低く広げた。

花材 君子蘭（彼岸花科）

斑入り玉羊歯（玉羊歯科）

都忘れ（菊科）



外国の香り

△10頁の花▽

仙溪

この白い小さな花は白花金雀児えにしだで、近づくとき強い香りがある。どんな香りを表現したいのかが思い当たらない。自分の中では外国の香水の香りというところ。この金雀児をいけたあとで蜜柑を食べて「この蜜柑は新品種？」と勘違いするくらい手に香りが残っていた。剣山に立てると枝がふわりと広がってくれる。五色の大輪のガーベラを低く並べて白い小花を目立たせている。

実はこの金雀児えにしだ、ほんのり緑色がかっている。花屋によると色を吸わせて緑色にしているらしい。しかもイタリアからの輸入だそう。オシヤレにこだわるイタリア人ならわざわざ緑色を吸わせるのも理由があるのかもしれないが、白い花は白のままでもいいじゃないかと思ったりもする。でもそんな批判をしたところで、「楽しいければいいじゃないか」と返されそう。

花材 白花金雀児 (豆科)

ガーベラ (菊科)

ミリオクラダス (百日科)

花器 空色釉花器



掛け花 へ2頁の花▽ 仙溪

アスチルベの和名は升麻しやうま泡盛草。この仲間には東アジアと北アメリカに分布し、日本にも泡盛升麻あわもりしやうまが自生する。泡のような可愛らしい花である。玄関の掛け花は季節の花を小さくいけている。前へ低く出すのがポイント。写真はあえて横から写した。

花材 ベル鉄線まげぼうけ（金鳳花科）

アスチルベ（雪の下科）

花器 陶花器（清水美菜子作）



富士山 〆9頁の花〷 仙溪

この花器の銘は「タワー」で、私が勝手に富士山の花器と呼んでいる。この花をいけた数日後、富士山が世界文化遺産に登録されるといふニュースが流れたのは偶然である。冠雪も溶けゆく六月の小品。

花材 猿捕炭(百合科)

鉄線三種(金鳳花科)

花器 陶細口花器(竹内眞三郎作)



白の上

△10頁の花△ 仙溪

4頁と9頁は二階の稽古場の板床と縁側である。普段は稽古の見本を飾ったりしているが、神聖な稽古場なので少し緊張して見て頂いていることと思う。稽古場は花道の道場だ。稽古を終えて一階へ下りると少しほっとされるだろう。そんな時は家の花をゆっくり見て帰ってほしい。10頁のように玄關の白の上にも時々花をいけている。いつもは写真の左側が正面になるようにいけているが、ここにいける花は後ろ側にも気を遣う。まわりの空間に呼応するようにながけている。

花材 黄素馨きそけい (木犀科)

百合「スイートメモリー」
(百合科)

撫子 (撫子科)

花器 青白磁花器 (宮永東山作)



苔木こけぼく 晒木しゃれぼく

仙溪

父がいけばな展に出品してきた立花や生花には、苔がびっしりとついた古木を好んで使っていた。冬の苔梅は特に好きだったようだ。苔むした枝自体、なかなか手に入らない花材であるが、深い味わいというものを感ずることができた。一本筋の通った凛とした風格のようなもの。父の求めていたものもそういうものだったと思う。

苔梅などをいけたあとは、花が終わっても捨てずに残している。盛花に覗かせたり、組み直して立花に使ったり、蔓ものをいけるときの土台として使える。

また晒木も残してある。主に立花に使うためだが、盛花や投入に加えると、重厚な雰囲気や自然の妙味を表現できるので、見つけたら大事に持つておかれるといい。

盛花や投入に晒木を混ぜる場合、重量のバランスに気をつけること。そのまま器にいけるのではなく、しっかりとした支柱をつけていける。晒木をうまく使いこなせるかどうかは、重さに見合った仕掛けができるかどうかにかかっている。作例では短い晒木を水際に見せて、上に山苔をのせている。本来なら朽木を使いたいところだが、これでも深山の空気を感ずられる。苔には霧を吹いて飾る。

花材 夏櫛なつはせ(躑躅科)

京鹿の子きやうしかのこ(薔薇科)

蜚袋ひふく(竜胆科)

晒木・山苔

花器 かいらぎ釉水盤(木村盛伸作)



黄菖蒲きしようぶ

〈10頁の花〉 仙溪

初めて海外でいけばなを披露した時にいたのが黄菖蒲の生花だった。ドイツ・デュッセルドルフ郊外につくられた日本庭園の池で咲いていたのを切らせてもらったが、大きな長い葉でなんとか葉組もできて、ほっとしたのを覚えている。

西アジアからヨーロッパに分布する黄菖蒲が日本に来たのは明治頃だそうで、今では全国の水辺に野生している帰化植物である。

京都の深泥ヶ池でも見るようになったが、ここには貴重な在来植物が多いので駆逐されないか少し心配である。

ともあれ花菖蒲や杜若には無かった黄色の花は人目を引く。珍しく花屋で売られていたので同じ水辺の植物である半夏生をとり合わせ、薊で色を加えた。黄菖蒲の花には花菖蒲ほどの強さはないが、優しい印象をうける。

花材 黄菖蒲きしようぶ (菖蒲科)

半夏生はんげせい (蕺科)

薊あやめ (菊科)

花器 長方形陶水盤 (伊藤典哲作)



ギガンチウム
ホワイトスネーク

△12頁の花▽

仙溪

葱坊主を二種類使った。どちらも立派な球状に無数の花が伸び出てきている。

鮮やかな紫色はおなじみのアリウム・ギガンチウムで、茎の曲がった白っぽい方がアリウム・ホワイトスネークと呼ばれていた。

この二種の強さに負けない花に赤い大輪の百合を選んだ。品種名はビビアナで、二本でこれだけのボリュームがある。

この花器は口が広いので大きめの丸剣山を底に入れていけている。アリウムは剣山にさして、百合は投入式にいった。

花材 アリウム・ギガンチウム
(百合科)

アリウム・ホワイトスネーク
(百合科)

花器 広口陶花瓶(前田保則作)

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2013年
8月号
No.602

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



玉川杜鵑草

唐糸草

山荷葉

△表紙の花▽ 仙溪

夏向きのさらりとした盛花。それぞれに名前に特徴があつて面白い。

上中下と三層に分けていけることで、真ん中の唐糸草の花穂を印象的に見せている。

唐糸草は薔薇科・吾亦紅属の多年草で、紅紫色の繊細な糸に見えるのは雄しべで、まさに絹糸（唐糸）の束のようだ。日本の山野に生える。

その足元を隠すようにいけているのは実のなつた山荷葉である。目木科・山荷葉属の多年草で日本の中部以北の林床や沢に生える。荷葉とは蓮の葉のことで葉の形を蓮に見立てた名前。山荷葉の実は青紫色に熟すと甘酸っぱくて食べられる。

さて、それらの後ろに立つのは玉川杜鵑草である。普通、杜鵑草は秋に咲くが、玉川杜鵑草は夏の花。花は黄色で北海道から九州の冷温帯域に分布する。

「玉川」とは京都府井出町の川の名前に由来する。玉川は奈良時代すでに山吹で有名で、玉川杜鵑草の花色が黄色であることから、山吹を連想させるので玉川の名前がつけられた。

「玉川」「山吹」で調べると、万葉

集の撰者の一人、橘諸兄が玉川付

近に別荘を建て、庭に山吹を植えた
とある。花の名前には文化の香りが

残されている。

花材 玉川杜鵑草（百令科）

唐糸草（薔薇科）

山荷葉（目木科）

花器 陶花器



烏葉八角蓮

△2頁の花▽ 仙溪

八角蓮は目木科・ミヤオソウ属の多年草。中国中部から南東部と台湾に自生する。全草にポドフィラムというアルカロイドを含む有毒植物。中国では解毒剤として利用される。属は違うが表紙に使った山荷葉とは同じ目木科で、なんとなく姿も似ているが八角蓮の花は葉の下に咲くところが異なっている。

烏葉八角蓮は鉢で買ってきて根洗いし、最初に器にとめてから他の花をいけている。珍しい形の葉が隠れないように気をつけた。茎の曲がった丘虎の尾を左後ろに伸ばして変化をつけている。

花材 烏葉八角蓮（目木科）

小鬼百合（百合科）

竜胆（竜胆科）

丘虎の尾（桜草科）

花器 青白磁水盤



涼しげに

△10頁の花▽ 仙溪

「実の汁が服についたらとれない」雑草として子供の頃から知っていたが、近頃は実の青いうちに切り花で出回るようになった洋種山牛蒡。枝先には花から実になる過程も見ることができ、器にいけると野外で見るよりも涼しげに見えていい感じである。

ただし有毒植物なので、決して実を食べないように。特に幼児の手の届くところにはいけておかないほうがいい。

洋種山牛蒡はアメリカカヤマゴボウとも呼ばれるように、北アメリカ原産の多年草（山牛蒡科）。久留米鶏頭と桔梗をとり合わせて、スウェーデンのガラス花器にアクリルの仕掛けをして剣山でいけた。



お手まり
大手毬 △3頁の花▽ 仙溪

この花の撮影は8月9日で連日の猛暑が続いていた。その3日後には四万十市で41度を観測している。そんな厳しい暑さの中で9月号を撮影していたのだが、比叡山麓の谷間にある畑では大手毬の鉢が紅葉しだしたのとこのとで、花屋さんが鉢を山から下ろしておいてくれた。

そんな貴重な葉色に優しく寄り添ってくれる花として、橙色の鶏頭を選んだ。

花器には白と黒のモノトーンの花瓶を選んで繊細な秋色を引き立てている。酷暑の中でも花を飾ると元気になれる。

花材 大手毬(忍冬科)
鶏頭(莧科)

花器 白黒陶花瓶(近藤豊作)



石のような器 仙溪

作例の実のなつた枝は花屋ではカリンの名前で売られていたが、カリンの実は緑色で大きくてすべすべな印象があつたので調べてみたところ、マルメロではないかと思う。

マルメロは中央アジア原産の落葉高木で、果実は白い細かな毛でおおわれている。カリンと同様に果実には芳香があり、果実酒やジャムにされる。

ツルランは東南アジアから日本（九州南部、南西諸島）、中国、台湾、オーストラリア北部に分布する蘭の仲間。エビネの一種である。

多くのエビネが春に開花するのに対してツルランは夏に開花する。花姿が鶴に似ていることから、ツルランと名づけられ、一般的には白花が多い。広葉樹林下の林床に地生し、群生して咲く。

これら個性的な花材の組み合わせを受け止める器として、石のような青い陶花器を選んだ。文人花的な好みがいけいな。

花材 マルメロの実（薔薇科）

鶴蘭の赤花（蘭科）

花器 トルコブルー陶花器



メギ

仙溪

小さな葉が色づいている枝は目木である。葉の落ちた枝をよく見ていると、枝に細く鋭い棘がいつぱいつぱいあるのがわかると思う。この花をいけたあと、指に棘がささっていた。

目木の枝の動きにあわせて自然体で花瓶にとめ、枝の隙間に黄菊をのぞかせた。かなり前後の奥行きをつくっている。

花材 目木（目木科）

菊（菊科）

花器 トルコブルー陶花瓶

仙齋リリイ

仙溪

二年前の流展「花を詠む」で父が
つけたガイミアリリー。父はその前
の流展（2001年）でもこの花で
立花を立てている。
ガイミアリリーはオーストラリア

南東部の沿岸地域に自生する常緑多
年草で、竜舌蘭科。学名ではドリ
ア
ンテス・エクセルサと呼ばれ、槍の
花という意味がある。
1mほどの剣のような硬い葉が放
射状に出て、その中心から春と夏に
最高6mの花茎を真っ直ぐのばした

先に花をつける。
二度、流展で父のためにこの花を
集めてくれた花屋さんが、初盆のお
供えにと持って来てくれた。
とにかく背が高く、茎が太い。ま
るで魔法使いが持つ杖である。この
花の力で世の中の理不尽をすべて

解決できそうなくらいの存在感であ
る。天国の父もこの花を持って立ち
嬉しそうに笑っているだろう。
ピラミッドアジサイをとり合わせ
て、とっておきの花器にかけた。こ
の花器ならガイミアリリーの重量も
大丈夫。数日後に密をたっぷり溜め

た数輪の花が咲いた。

花材 ガイミアリリー

(竜舌蘭科)

ピラミッドアジサイ

(紫陽花科)

花器 細口陶花瓶

(宇野仁松作)





蒲^{がま} 鶏頭^{けいとう} 菊

△3頁の花▽ 仙溪

鶏頭の鮮やかな赤色。茎が太くて花も不定形で大きい。虫に食べられていない葉がたっぶりついているのは、とても大切に育てられたということ。こんな花をいけられることに感謝である。

蒲は日本全土の池や沼に生え、「古事記」に出てくるほど太古からの馴染みの植物だ。菊も鶏頭も古くから馴染みの花だが、もともと菊は中国、鶏頭はインドの植物。私たちがいけて楽しんでる花や木の来歴を知ると、世界の国々を身近に感じることができて楽しい。

もし鶏頭が日本に伝わっていなかったら、はたしてどんな花をここにいけていただろう。

花材 蒲（蒲科）

鶏頭（苋科）

菊（菊科）

花器 陶鉢



出合い花 (1)

仙溪

投稿お待ちしています

皆さんはいけばなの「出合い」を楽しんでいますか？。

先月号では二種のとり合わせでいけたが、花材の出合い、器の出合いをととも意識した。

いけばなの稽古では先生が花を用意する。できるだけ状態のいい、できれば季節の花材を、毎回違うとり合わせで用意するのはなかなか骨が折れる。でも自分が考えた組み合わせでいい感じのいけばなになったときは素直に嬉しい。花屋さんにも感謝である。

普段、家に花をいけていて感じるのは、花材の「出合い」が生み出す新鮮な美しさだ。なにげなくとり合わせた花が輝きを発することがある。もちろん「器」との出合いも大切な要素だ。飾る場との調和も大事。花と花、花と器と空間の出合いを楽しむ気持ちを持ちましょう。

この頁の作例では、ある花材一本に、別の花材一本をとり合わせていけることで、「出合い」が際立ついけばなにしてみようと試みた。たった二本のいけばなだが、異なる植物同士を「寄り添う」ようにいけることで、ささやかではあるが微笑ましい情景が生まれた。

花同士が寄り添う姿の清々しさ。私たち人間も、拒絶や対立や見ぬ振りではなく、もっと寄り添う気持ちを大切にしたいですね。

そんなわけで、流派のホームページで「二本で寄り添う『出合い花』(仮称)」を投稿してもらえようしようと検討中。その節には皆さんの気持ちがこめられた、ほのぼのとしたいけばなの投稿を楽しみにしています。

花材 屋久島木萩(豆科)

二輪菊(菊科)

花器 陶湯呑(清水卯一作)

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2013年
11月号
No.605

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



出合い花 (2)

△表紙の花▽ 仙溪

先月号で2本だけでいける「出合い花」をいけてみよう！と書いたが、是非みなさんもいけてみてもらいたい。

あまり考えすぎず、直感をたよりにして手にした花をいけてみる。

花材にもよるが、普段の稽古用の器ではなくて、いつもはそのまま棚に飾っているような小ぶりの器に、小さめにいけてみてほしい。はじめから小さくいけるのは勇気がいるけれど、小さくしてこそ生かせることもある。

黄金色の薄の穂に、鉢植から切った秋明菊を添えて、小さな口の丸い器にいけた。この器の胴はえくぼのようにへこんでいる。

お月様へのお供えのイメージ。

花材 薄の穂(稲科)

秋明菊(金鳳花科)

花器 陶扁壺





独楽こまのような器 仙溪

花器棚の奥から、巨大な独楽がくるくると回転しているような器がでてきた。棚からぼた餅ではなく、瓢箪から駒でもなく、棚の奥から独楽である。いや、独楽のような器だ。持とうとすると、腰が抜けそうに重い。底は小さいけれど、水をいっばいに入れると、かなり安定のいい器である。

ちようどこの器がでてきた時に、花屋でアダンの実を見つけた。アダンの実はめったに花屋で売られていない。たまたま売られていたので、独楽のような器にいかしてみた。

アダンの実も腕が折れそうなくらい重たい。腰が抜けそうな器だから、腕が折れそうなアダンの実も、すんなりとおさまってくれた。こんなに底が小さいのにだ。器と花の相性とはなかなか面白い。

黒に近いほど濃い緑色のアンズリウムの葉と、華やいだ色彩の赤紫色のバンダで、南国のとり合わせにした。

アダン（阿壇）は蝟の木科の常緑小高木で、亜熱帯から熱帯の海岸近くに群生する。葉にはすどい棘がある。

花材 アダン（蝟の木科）

バンダ（蘭科）

アンズリウムの葉

花器 陶扁壺



漆器の鉢にいける

△表紙の花▽ 櫻子

塗りの器に花をいけると、あらたまつた感じになる。作例の大鉢は果物を盛ったりして使っているが、水仙や椿との相性がいい。梅擬の赤い実もよく映る。

花材 梅擬(綱の木科)

水仙(彼岸花科)

寒菊(菊科)

花器 溜塗大鉢

赤い釉葉の花器

△2頁の花▽ 櫻子

焼き物の赤色は出しにくい色だそう
だ。金を使うこともあるそうで、そう
するととても高価なものになる。でも
どうしても赤い器にいけない時がある。
この器は無理を言ってみてもらっ
たものだ。

花材 月桃の実(生薑科)

薔薇二色(薔薇科)

花器 赤色釉陶花器

白と黒の器

△3頁の花▽ 仙溪

家には白と黒の花器がいくつかある
が、どれもモダンな感じのいけばなに
なる。作例の木瓜と椿を備前焼にいけ
たら素朴な印象になるが、この器だと
粋な感じがする。

花材 木瓜(薔薇科)

白椿(椿科)

花器 陶花器(竹内眞三郎作)



ワタノキ

仙溪

濃いワイン色のパフィオペディルムと綿の木を取り合わせてみた。意外な組み合わせだが、どちらも面白みがあり、質感もフワフワとツルツルで互いに補い合っている。ただ、緑がないので赤いスプレーバラを加えた。薔薇の赤色が、パフィオの赤みと相乗効果を発揮して暖かみのあるいけばなになっている。

数日後、パフィオが萎れたので湯上げて短くいけたところ、20日たった今も元気である。

花材 綿の木(オシロイ) (葵科)

パフィオペディルム(蘭科)
スプレー薔薇(バラ科)

花器 舟形陶水盤

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2014年
1月号
No.607

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





古い中国の器

△表紙の花▽ 仙溪

器の要素には色、質感、形があるが、なかでも「形」の不思議さというか、微妙な違いで感じ方が変わるのが面白いと思う。

表紙の器は古い中国の器だが、口の作り方から陶工の凄みのようなものを感じて、持つ手が震えた。これだけ完璧な姿であるにもかかわらず、口の作りは裂けた岩のような自然な仕上げで、いかにも花が挿されるのを待っている気配がする。

花をいけると隠れて見えないので、いけた花はなんともおおらかな豊かさを感じる花になる。けれども花を挿す最初の緊張感はこの器ならではのものだ。

緊張する器。なんでも映える器。器も様々である。

花材 仏手柑ぶつしゅかん（蜜柑科）

デンファアレぶんふあ一種（蘭科）

花器 龍耳付瑠璃釉壺



襲名記念の器

△ 3頁の花▽ 仙溪

テイカカズラは茎から気根を出して他のものに固着する、蔓性常緑低木。和名は、式子内親王を愛した藤原定家が、死後も彼女を忘れられず、ついに定家葛に生まれ変わって彼女の墓にからみついたという伝説に由来する。能の「定家」にもこの話がでてくる。

定家葛の花はジャスマミンに似ていて香りもいい。花のあとの実は写真のように2本の細長い袋状で、やがて裂けると白い綿毛のついた種子が風で飛んで行く。

花フジさんがこの定家葛をくださった。大切な一枝なので私の家元襲名記念の器にかけた。花と器の組み合わせも気に入っている。

花材 定家葛（夾竹桃科）

水仙（彼岸花科）

赤椿（椿科）

花器 朱塗盃「富春盃」



出合い花 (4)
 バンダと金豆

仙溪

花屋で可愛い黄色の実を見つけた。小さな鉢植で売られていたが、名前は「金豆(キンズ)」となっていた。

調べると和名はマメキンカンで、別名としてキンズ、又はヒメキンカンと呼ばれているようだ。

蜜柑科・金柑属の常緑低木で原産地は中国。食用にはならず、盆栽などの観賞用に栽培されている。やはり枝には棘がある。

今月号には表紙にも蜜柑科・蜜柑属の仏手柑をいけている。こちらも鉢植から切ったのだが、仏手柑の棘は強烈なので注意のこと。下手をすると手に穴が開く。

さて、出合い花。金豆一本に何を取り合わせようか。花屋を見てまわってこのバンダに決めた。直感である。いけてみてやはりよく合っていると思う。紫色のバンダは仏手柑との相性もいい。反対色の取り合わせが互いの色を引き立て合うのだろう。

バンダは東南アジアを中心として中国南部〜オーストラリアにおよそ60種が分布する蘭の仲間。樹木や岩肌に根を張り付かせて伸びる。名前はサンスクリット語で「着生する・まとわりつく」という意味の「バンダカ」に由来する。

まとわりついたり、からみついたり、植物たちも大変だが、人間も含めて自然はもともと複雑にからまりあっていると思えば、様々な出合いでこの世は成り立っているとも言える。次なる出合いは。

花材 バンダ(蘭科) 金豆(蜜柑科)
 花器 珠形陶花瓶(宇野仁松作)

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2014年
2月号
No.608

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





四君子

△表紙の花・3頁の花▽ 仙溪

この二作の小品投入はどちらも季節の花木に蘭を取り合わせている。東アジアの木と東南アジアの蘭の組み合わせだ。

梅と蘭といえは「四君子^{しよくんにし}」が思い当たる。四君子とは、蘭、竹、菊、梅の四種を、草木の中の君子として称えた言葉である。

君子は徳と学識、礼儀を備える。蘭、竹、菊、梅はその姿や性質から高い気品が感じられるため、中国宋代以降の絵の画題にされることも多い。また、この四種の草木を描くことで基本的な筆遣いすべてが身につくと言われている。

四君子として描かれる蘭は春蘭で、清楚でよい香りのする小輪の蘭である。しかし、作例の胡蝶蘭もバンダも、それぞれに美しい品格を備えている。孤高な凛とした強さが感じられる。それゆえに、梅や蠟梅のように香り高い気品ある花木との相性がよいのだと思う。

厳しい寒さの中で咲く梅や蠟梅に蘭をあわせると文人趣味を感じるいけばなになり、同じ蘭と春の桜の組み合わせでは、優しい華やきを感じられる。

二作とも撮影のあと、富春軒初春の会で座敷に飾った。新年の言祝ぎの場によく合っていた。

△表紙の花▽ 花材 蠟梅(蠟梅科) ミニ胡蝶蘭(蘭科) ミリオクラダス(百合科) 花器 陶花瓶(竹内眞三郎作)
 △3頁の花▽ 花材 紅梅(薔薇科) バンダ(蘭科) ミリオクラダス(百合科) 花器 陶花瓶(竹内眞三郎作)



いけばなのドラマ 仙溪

8頁の最後にいけばなのドラマと書いて思い出したことがある。以前、金沢で若手華道家が企画したいけばなの祭典で、子供作文コンクールの授賞式を行った。作文のテーマは「花」で、たくさんの花にまつわる体験談が寄せられていた。入賞者の作文を読むと、そこには様々なドラマがあり、どれも花が大切な役割をもっていた。読むうちに涙がこみあげてくるものばかり。子供の感受性は大人達よりも繊細で豊かだ。花に対して新鮮な気持ち忘れずにいたいと思う。

出会い花 (5)

仙溪

クリスマスローズ

藪柑子

小さな鉢植で売られている草花で、いつもとひと味違ったいけばなを、という狙いでいけてみた。

クリスマスローズは金鳳花科・ヘレボルス属の多年草。多くは東ヨーロッパ、バルカン半島、トルコ、シリアに自生する。ある種がクリスマス頃に咲くのでこの名があるが、殆どは春に咲く。花に見えるのは萼なので、散らずに長く楽しめる。

藪柑子は藪柑子科・藪柑子属の常緑低木。東アジア一帯に分布する。万葉集では「山橘」の名で読まれている。

今回は湯呑に直立させてみた。こうするとクリスマスローズも姿をはっきり見せられる。湯呑みの作者は右が清水卯一氏、左が清水保孝氏。お二人は親子でいらっしやる。湯呑みの中心から立つようにしたので、水際が美しい。丸盆で一つに。



早春の投入

△3頁の花▽

仙溪

李すももの苔枝こけえだに赤と薄紅色の椿を取り
合わせた投入。

李の枝には小さな白い花がところ
どころに咲きはじめている。

枝自体には華やかさや瑞々しさは
ないけれど、独特の自然味を感じる。
味わいのある枝だ。

取り合わせを悩んだが、葉の照り
が美しい二色の椿だけを選んだ。赤
色濃淡の花色は艶やかに春の訪れを
告げてくれる。椿の厚い葉は白い苔
と対照的な生命力を見せて、互いに
個性を強め合っている。いい取り合
わせだと思う。

花器には濃い茶色の釉薬がかかっ
た下無型の花瓶を選んだ。

花器の選び方によって、同じ花で
も華やかになったり、がび雅趣を感じる
花になったりする。父や母の器選
びを思い出しながら、最近少しずつ納
得のいく選択ができるようになった
が、それでも時々後悔することもある。
他人の意見を聞くのも大切で、
櫻子はよく的確にアドバイスをしてく
れる。

花をいけた後で、ゆっくりながめ
ていると、いろんな思いがわいてく
る。春の訪れを告げる木のまわりで、
小鳥たちが遊んでいるようだ。

花材 李すもも (薔薇科)

椿二種 (椿科)

花器 焦茶色下無花瓶



出会い花（6） 仙溪

啓翁桜 菜の花

「いけばなのルーツは？」と問われたら何と答えますか。中国から伝わった仏花。神の依り代。室町時代の立て花。江戸時代に生まれた生花。など、どれも現在のいけばなに繋がる大切なルーツであるけれど、いけばなが「器に花をいけて楽しむ」ことであるなら、そのルーツは平安時代の宮中に見つけることができる。

清少納言の「枕草子」には、次のような描写がある。

おもしろく咲きたる桜を長く折りて、大きな瓶にさしたるこそそをかしけれ。桜の直衣に出袿して、まらうどもあれ、御兄の君たちにて、そこ近くみて物などうち言ひたる、いとをかし。（第4段より）

高欄（勾欄）のもとに青き瓶の大きなすゑて、桜のいみじうおもしろき枝の五尺ばかりなるを、いと多くさしたれば、高欄の外まで咲きこぼれたる（第23段より）

花をいけて心豊かに暮らすことのルーツは、平安時代の貴族の間で、ごく自然におこなわれていたと思われる。様式や型の伝承はもちろん大切だけれど、器に挿した花のいきい



桃 〆9頁の花〆 仙溪

花型 草型 副流し

花器 煤竹竹筒

三月三日は桃の節句。清少納言の「枕草子」には次のように書かれている。

三月三日は、うらうらとのどかに照りたる。桃の花の今咲きはじむる。

旧暦からおよそ一ヶ月ずれた現在の三月初旬では桃はまだ固い蕾だが、平安時代には温かな日射しの中で微笑むように咲き始めていたようだ。桃の花が開くことになんともいえない風情を感じる心は、きつと昔も今も変わらない。桃園はなくとも、いけばなで花を楽しむことができる。桃の花を愛でて、古の暮らしに思いを馳せるのも、いとをかし。



早春の定番

〆10頁の花〆

仙溪

花もの花材を三種類組み合わせた早春定番の盛花。チューリップと



スイートピーは色々な花色があるので、色の組み合わせ方を変えると雰囲気も変わる。チューリップと菜の花は伸びてくるので時々いけ直すといい。スイートピーは花持ちがずいぶん良くなった。

花材 チューリップ（百合科）

菜の花（油菜科）

スイートピー（豆科）

花器 トルコブルー陶花器

白花桃 薊

△11頁の花▽ 仙溪

花屋で満開になった白花の花桃を見つけたので、深紅の薊あきみを合わせて、大好きな手付花器にいけた。いい花材に巡り合ったら、とっておきの器にいけて楽しみたい。

花器の底にゴム敷きを敷いて砂利（小石）を深さの三分の一くらい入れて平らにし、その上に大きな剣山を置いていけている。器を考えたり、いけ方を工夫するなど、手間を惜しまないことが、花材の品格に対する礼儀だと思う。

薊は水揚げが難しいが、切り花にはよく持つ品種がある。桃は花の中に芋虫がいることがあるので、見つけてはピンセットで退治する。

花材 花桃（薔薇科）

薊（菊科）

花器 手付陶コンポート



桜 アイリス 椿

△3頁の花▽ 仙溪

父が「燦陽さんやう会」と名づけた研究会がある。月一回、岡山の先生方が研鑽のため家元へ来られて二作稽古して帰られる。毎回、花フジが特別に花材を任入れてくれる。

作例の桜とアイリスの投入は2月下旬の燦陽会の見本にかけた花で、伸びやかな桜の枝を前方へ張り出して、その後ろに2色のアイリスをのぞかせ、椿で口元を引き締めている。椿は深紅小輪の出雲大社数椿で、父が好きだった椿だ。白花のアイリスが満開前の桜の花色を助けてくれている。

アイリス(ダッチアイリス)はオランダで作られた花だが、日本の桜や中国原産の梅や桃とも相性がいい。薔薇科の花木と菖蒲科の花の組み合わせで色んなバリエーションが考えられる。

花材 桜(薔薇科) アイリス(菖蒲科)

出雲大社数椿(椿科)

花器 赤銅色陶花器



白と黒の器

△11頁の花▽ 仙溪

今月号には白と黒の器が3つ使われているが、3作とも赤い花をいけている。白い面の多い器と黒い面の多い器。無意識のうちに花に合う器をそれぞれに選んでいるようだ。

作例のシンピジウム(蘭科)はかなり重たいので安定のいい器でないといひっくりかえる。花の茎に丈夫な添え木を括り付け、器の底に剣山を置いていけている。アンズリウム(里芋科)の赤黒い花と茶色い葉を合わせた、花器の網目模様が花の重みを和らげてくれた。

花器 白黒花器(竹内眞三郎作)

横浜外交官の家の雛祭

会期 3月1日(土)～9日(日)

会場 横浜山手「外交官の家」
插花 佐藤慶由



出合い花（7） 仙溪

ガイミアリリー

アネモネ

去年9月号でいけたガイミアリリーが咲いたあと捨てずにいたのだが、乾燥してもなお強さが失われていないので、出合い花に使うことにした。朽ちた植物の横で新たな命を咲かせる花。そんなイメージでアネモネを一輪出合わせた。ガイミアリリーの枯れ花は花器に立てた支柱に固定している。アネモネは鉢植から花と葉を切っつけている。

花材 ガイミアリリー（竜舌蘭科）

アネモネ（金鳳花科）

花器 掻き落とし陶花瓶



オクロレウカ
エピデンドラム

△2頁の花▽ 仙溪

爽やかな色彩を感じる盛花。水際の繁みがない分、水面を広く見せられて気持ちがいい。ただし、剣山は小石で隠すこと。

花器の色や形にもよるが、器の口元まで水をいっぱいに入れると、それだけで清らかな谷川の空気を感じることがある。焼き物の元は土だからかもしれない。花器に水を満たした瞬間から、自然との接点がすでに生まれている。

オクロレウカの花は茎の先端と途中にも咲く。二度目の花も咲くので長い間楽しめる。頻繁にポンプで水換えをしよう。

花材 オクロレウカ (菖蒲科)
エピデンドラム (蘭科)
花器 灰色釉陶水盤



出会い花（8）

ヘリコニア 谷渡り

△9頁の花▽ 仙溪

変わった葉に出合った。

谷渡りの葉のふちがギザギザになっ
ている。いや、葉のふちから細



シュューベルティ 仙溪

アリウム・シュューベルティをいれた記憶は数えるほどで、昔からの花材なのだが、特別な花材という印象がある。同じ百合科・葱属（アリウム属）のアリウム・ギガンチウムは背が高く、いけばなでも様々ないけ方ができるのに対して、アリウム・シュューベルティの莖は20〜40cmくらいなので、低い位置にしかいけられない。

ゴムの木の葉の前にアリウム・シュューベルティを重ねると、淡い赤紫色の花火のような花が際立つ。色の濃淡。面と線の広がり。静と動の対比が花の個性を引き出してくれる。華やぎを増すためにゴムの木の葉の間から赤色のアマリリスを立てた。

花材 アマリリス（彼岸花科）

アリウム・シュューベルティ

（百合科）

インドゴムの木（桑科）

花器 ガラス花器



アリウム・シュューベルティ

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2014年
6月号
No.612

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



出会い花（9）

△表紙の花▽

仙溪

花菖蒲

紫陽花

檜の穂先のような蕾が、ゆっくりとほころび、羽をひろげるように花が開いた。花をいける楽しみは、そんな瞬間にある。

白い花菖蒲のとなりには、外国育ちの赤みの強い紫陽花が、水をふくんで咲いている。紫陽花に花菖蒲。一見普通の組みあわせだが、とっておきの器にシンプルに出合わせると、眩しく輝きたした。いけばなは面白い。もの云わぬ花が、周囲に生のエネルギーを放つ。たった一本と一輪の出会いなのに。

花材 花菖蒲（菖蒲科）

紫陽花（紫陽花科）

花器 金彩ガラス花器

（ウルリカ・バリーン作）



花菖蒲二種

△ 4頁の花▽

仙溪

花菖蒲の開花は六月、北海道から九州まで、全国各地の花菖蒲園で色とりどりの花を水辺で咲かせる。江戸時代から品種が増えて、現在では二千種もあるそうだ。葉とともに勢いよくいけたい。

花材 花菖蒲二種(菖蒲科)

ライラック(木犀科)

花器 方形金三日月文花器

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2014年
7月号
No.613

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



花の御座す場所

△表紙の花▽ 仙溪

花のおわす場所をどうつくるか。そんなテーマで花をいけてみた。主役の花を自分に置きかえて、まわりに居心地のいい景色をつくる。見たことの無いような景色ができればなおいい。大自然は決して単調ではなく、千変万化だ。自分の記憶の引き出しを頼りに、いけばなに「自由」を得よう。

花材 オクロレウカの葉(菖蒲科)
アンズリウム二色(里芋科)

花器 ガラス水盤(岩田糸子作)



スポットライト 仙溪

表紙とこの頁のいけばなは、あえて中央に低く花をいけている。

群生の中でキラリと光る花、そんな印象のいけばなである。

いけばなにおいては、「間」が重要になるが、花形の中央に縦長の隙間をつくると、不思議な風の通り道が生まれる。

立花の花形に「二つ真」というのがある。「立花時勢粧」にも一作絵図が載せられているが、水面まで真っ直ぐに空いた隙間の緊張感が伝わってくる。



その解説は先に掲載するが、「隙間をどう生かすか」というテーマで花をいけてみるのは面白い。

目には見えないスポットライトが、舞台中央の花を浮かび上がらせている。

花材 縮太蘭しよまふし（蚊帳吊草科）

紫陽花（紫陽花科）

百合（百合科）

花器 カットガラス水盤



ブルーレースフラワー

△10頁の花▽ 仙溪

赤い葉脈のカラジウムが決め手。

花材 トルコ桔梗(竜胆科)

ブルーレースフラワー

(芹科)

カラジウム(里芋科)

花器 桃花壺(木村展之作)



アーティチョーク

△2頁の花▽ 仙溪

アーティチョークは地中海沿岸原産の多年草で、西洋では若い蕾が食用として売られている。

重量感のある、鮮やかな赤紫色の花はたとえ一輪でも存在感がある。ガラス器の中にガラスのコップを沈めた上に剣山を置いていけた。

花材 アーティチョーク(菊科)

カラー(里芋科)

カラジウム(里芋科)

花器 カットガラス花瓶



出合い花 (11)

仙溪

富士薊
ふじあざみ

ノンリーフの枯花

富士薊は富士山周辺の山地に見られる菊科・薊属の多年草。日本の薊の中では最も大きな花を咲かせる。珍しい貴重な花だが、花フジさんの山の畑で育ったとのこと。

花フジのとし子さんに、是非「出合い花」に使って！とのリクエストをいただいたので、その場でお相手を探すことに。ふと目にとまったのが、花フジのアキチャンが手に持ったノンリーフの枯花だった。

南アフリカ原産のストレリチアの仲間、ほとんど葉のない茎だけが長く伸びるのが特徴。耐寒性と耐乾性を併せ持つ。こちらも花は珍しく、それも枯花ということで、珍しいもの同士を出合わせてみた。

とし子さんのこだわりと、アキチャンのこだわり。手にした花にそのこだわりはすでに表れている。また、花を育てる人や集めてくる人の思いを感じていけるなら、花器の選択や花形を工夫して、自ずといいけぼなになる。

自分で身につけた自分自身のこだわりを持つ。とても大事なこと。

花材 富士薊 (菊科)

ノンリーフ (芭蕉科)

花器 掻き落とし花瓶



村里の風景 〱2頁の花〱 仙溪

桐の実とはにかく重たい。花器ごとひっくり返らないように、前後左右のバランスを考えていける。昔は女の子が生まれると、桐の苗木を五本植え嫁人に簞笥・琴・下駄を作ったとか。「桐の木は村の娘と同年」。里で馴染みの鶏頭と、里芋の葉をとりあわせた。

花材 桐の実(桐科) 鶏頭(苧科)

里芋の葉(里芋科)

花器 紺色釉花器



出合い花 (12)

仙溪

波布草 はぶそう

葉鶏頭 はげいとう

はぶ茶と呼ばれるお茶がある。

エビスグサの種子からつくられたお茶で、眼精疲労・胃弱・便秘に効果があるとされる健康茶のことで、エビスグサの種子は漢方でケツメイシと呼ばれる。

このはぶ茶はもともとエビスグサと同属(センナ属)のハブソウの種子からつくられていた。

波布草は北アメリカ南部から熱帯アメリカ原産の一年草。日本には江戸時代にハブなどの毒蛇や毒虫に咬まれたときの民間薬としてやってきた。

エビスグサとよく似るが、豆の莢が上向きにつくことと、葉の先が尖ることで見分けがつく。

そんな波布草の黄色い花と緑色の莢に、熱帯アジア原産のハゲイトウをとりあわせた。

来歴や原産地を知らずに、直感をたよりに選んだ花だったが、同じ熱い土地で育つ花同士、互いに通じ合うものがあるようだ。葉鶏頭も元になるヒユは若い葉と茎が食用になる。人と植物の関わり。その歴史をもっと知りたくなった。

花材 波布草 (豆科)

葉鶏頭 (苺科)

花器 灰釉一輪挿



自然の煌めき

〈3頁の花〉 仙溪

薄と秋草3種の投入。薄は茎の中段で切って、穂の位置を低くしている。

薄の穂が出ると秋なんだなーと感じる心。秋刀魚や栗ごはんを食べても同じように感じられる。そんな感覚を持っていることに、有り難いと思う。

薄の穂にもいろんな色の違いがあることを、花をいけながら教わった。個人的には赤みの強い穂に惹かれる。

自然の煌めきに出会いたくて花をいけていると云ってもいい。花器を選び、とり合わせを考え、いけ方を工夫して新たな煌めきに出会う。

花材 薄（稻科）

秋明菊（金鳳花科）

二輪菊（菊科）

桔梗（桔梗科）

花器 耳付陶花瓶



おもむくまま 仙溪

3色のネリネをそれぞれ3本、4本、5本とり合わせて、合計12本つけた。心のおもむくままに、3つの色を不規則に配置してみた。ふんわりとした優しさが感じられる。

このいけ方ではなく色別に集めていけると、色彩をより強く感じるいけばなになる。同じ花材をいけてもいけ方次第で受ける印象が違ってくることを、いろんないけ方を試しながら、実感として身につけていたきたい。

相手に選んだ檜扇の実は、短く集めてみても、自然な枝の動きのため野趣的な雰囲気が残る。そのためネリネも野に咲くイメージでいけている。もっと沢山の実のかたまりをつくれたとしたら、ネリネの配置もより強いものにしただろう。

花をいける時、自然調か現代調か、どちらでいけるのかを決めていけるのは大切なことである。

ネリネの茎の線、花どうしの空間に注意していけすめる。本数が多いので難しいが、花が居心地良さそうな場所にいけるといい。ギョリュウで水際を隠した。

花材 ネリネ3色（彼岸花科）

南アフリカ原産

檜扇の実（菖蒲科）

東アジア原産

御柳（ギョリュウ科）

中国原産

花器 紺色釉陶鉢



出合い花 (13)

仙溪

草牡丹の実

バンド

草牡丹をはじめていけた。

金鳳花科の仲間花のあと白い毛がのびる。例えば同じ金鳳花科の翁草は、花後の白い綿毛を翁の白髪頭に例えてその名がある。

草牡丹は金鳳花科・仙人草属で、日本原産の半低木。下部が木質化して枯れ残る。名前にあるように、牡丹の葉に丸みを加えたような葉である。花は淡い紫色の釣り鐘状で、下向きに集まって咲き、先端が4つに割けて反り返る。

花は可憐だが、花のあとには写真のような個性的な姿になる。出合わせる相手も、個性的でしかも色鮮やかな花を選ぶことで、草牡丹の実の造形美を際立たせたい。美しいピンク色のバンドは絶妙な出合いを生んでくれた。

花材 草牡丹の実 (金鳳花科)

バンド (蘭科)

花器 陶花瓶「白珠」



赤い実のなる木

△2頁の花▽ 仙溪

秋から冬にかけて、赤い実をいけることが多い。稽古にもよく使うものに野茨や鈴薔薇、数山査子がある。少し高価なものでは七竈、飯桐、山歸来、ビバーナム。お正月の南天や千両、万年青も赤い実ができる。そしてさらに高価な赤い実の花材として梅擬がある。

日本の本州、四国、九州に分布する落葉低木で、葉と花が梅に似ていることからこの名前がある。

葉が自然に落ちる前に切るのを、出荷前に葉をすべて落とすのが大変らしい。実の大きい「大納言」も見事だが、父は作例のような小粒の実がまばらに付いた野趣のある枝のほうが風情があつて好きと云っていた。季節の菊を合わせると凛とした空気がたただよう。

花材 梅擬（繡の木科）

糸菊（菊科）

ピンポン菊（菊科）

花器 碧釉花瓶



出会い花（14） 仙溪

秋海棠

上臈杜鵑草

石清水のそばでしっとりと咲いている、そんなイメージでいけてみた。自分の中では上臈杜鵑草も秋海棠もそのような場所に生えている光景が目につかぬ。清水の周辺の空気は湿り気をおびて、葉はつねに潤っている。

秋海棠は中国原産の多年草。日本には江戸時代初期に渡来した帰化植物。ペゴニアの仲間特有の偏った形の葉をしている。

上臈杜鵑草は杜鵑草の仲間だが、花の形が全く違う。名前につけられた上臈は、仏教用語で年功を多く積んだ高僧のことをさすらしい。

ごつごつとした土っぽいやつに水を満たしていける。口の片側に寄せて水面が見えるように。こんな素朴な感じのいけばなが、意外と難しい。

花材 秋海棠（秋海棠科）

上臈杜鵑草（百令科）

花器 焼締花瓶

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2014年
12月号
No.618

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



出合い花 (15)

△表紙の花▽ 仙溪

アマリリス

レックス・ベゴニア

以前、インドから持ち帰った牛の置物の背中に、ガラスの酒杯をのせてつけたのが、ベゴニアをいけた最初だった。手作りの真鍮製の鞍で器を固定したのだが、苦勞の甲斐あって父がたいそう褒めてくれた。

牛にいったのはアイアンクロスというベゴニアだったが、この赤いアマリリスの相手にはカンカンという名前がついていた。葉の表面が銀色に光り、私の手のひら程の大きさがある。

アイアンクロスもカンカンも、インドからベトナムにかけて分布するベゴニア・レックスからの改良品種。アマリリスは中南米原産。赤と黒のガラス花器は北ドイツで父が買ったもの。この小作にも様々な物語が詰まっている。

花材 アマリリス (彼岸花科)

レックス・ベゴニア

「カンカン」 (秋海棠科)

花器 赤黒ガラス花器



初冬の風興

△12頁の花▽ 仙溪

秋の木瓜、咲き始めた水仙、寒菊の赤い葉。この三種のとり合わせは過去にもよくいけている。ただ丁寧にいけるだけで、初冬の風興が感じられる。どんな器にいけるかにもよるが。

花材 木瓜 (薔薇科)

水仙 (彼岸花科)

寒菊 (菊科)

花器 陶花器 (河井透作)



寒桜かんざくら（子福桜こふくざくら）

△2頁の花▽ 仙溪

なぜ冬に咲く桜があるのだろうか。
十月桜、冬桜、子福桜など、年に二
度咲くのはなぜだろう。

一説には日本の桜の先祖とされる
ヒマラヤザクラがもともと秋に咲く
ことから、先祖返りの現象と考えら
れている。

ヒマラヤザクラの咲くネパールは
緯度的には亜熱帯。冬の気温は東
京よりも高い。秋咲きであったもの
が、日本の厳しい寒さに耐えるため
に「休眠」することを身につけ、暖
かな春に咲くようになったそうだ。
百万年の歳月をかけて東へ東へと来
てくれたサクラ。その中に故郷を懐
かしんで秋に咲くものがあってもお
かしくない。

私達はそんな冬に咲く桜を見て勇
気づけられる。ひよっとすると、人
を励ますために咲いてくれているの
かもしれない。日本人にとって桜は
やはり特別な存在である。

花材 寒桜・子福桜（薔薇科）

菊三種（菊科）

花器 陶花瓶（宮下善爾作）



鳳凰の舞い降りる木

仙溪

子供の頃は祖父母と住んでいたこともあり、正月には親戚が大勢やってきた。父や伯父たちは「おいちよかぶ」や「はなふた」で遊んでいた記憶がある。花札の絵柄には季節の花や動物が描かれているが、その中の一つに「桐に鳳凰」というのがある。



鳳凰は中国に伝わる四つの霊獣（四霊）、すなわち麒麟、鳳凰、霊亀、応龍の一つで、平安のシンボルとされている。ちなみに麒麟は信義、霊亀は吉兆を予知し、応龍は変幻を表す。

平安を表す鳳凰は霊泉のみを呑み、竹の実のみを食べ、梧桐の木にしか留まらない。この梧桐はアオギリのことだが、古代の日本でいつしかキリに置きかえられたらしい。アオギリの花は白くて繊細、キリの花は紫色で力強く上に立つ。

作例で桐のつばみにとり合わせた菊は、「シェイク」という名の新品種で、ドーナツのような不思議な形をしている。ピンクのピンポン菊とともに鳳凰を連想するに相応しい玄妙な美しさを感じていけてみた。伸びやかな葉の広がりを生かして、十分な奥行きをつくってつけていけている。皆さんの平安を祈って。

花材 桐（胡麻の葉草科） 菊三種（菊科）
花器 黒色釉水盤



出合い花 (16)

仙溪

千両

シクラメン

いけばなの素晴らしいところの一つは、季節の輝きを身近に楽しめることだ。出合い花をいけるようになって、あらためて小さな花の輝きに気付くことが多くなった。

写真のシクラメンには「シューティング・スター」という名前がつけられている。珍しい品種なので値段もそれなりのものだったが、鉢は陶器の深鉢に入れてダイニングに飾って楽しみ、時々花と葉を切っけて二重に楽しんでいる。

大輪で花茎も長いので、小さな器ならそのままいけることができるけれど、新春の出合い花でもあるので、竹ひごと小枝を使って、器から立ち上がるようにしてみた。どのようにしてあるかはご想像ください。

シクラメンは桜草科・シクラメン属の多年草で、花期は秋から春。地中海沿岸の涼しい雨期に咲く花だ。名前は「螺旋」に由来するが、これは受粉後の花茎がぜんまいのようにくるくると丸くなることから。花弁は蝶が舞っているようにも見える。

千両は庭から小枝を一枝切っていけた。千両科・千両属の常緑小低木で東アジアからインドに分布する。赤い実が喜ばれ、また縁起がいい名前なので正月の大切な花材になっている。

日本の冬を彩る和洋の組みあわせ。



牡丹と雪柳

仙溪

「この深い紺色の器には、薄紅色が鮮やかな、この牡丹がいいと思うの。雪柳と二種でどうか」と、副家元が花屋でそこまで決めてくられていた。今回は花器ありきで、合う花を考えるという決め方。私がいけることになった。

いけながらとても自然な組みあわせだと思った。雪柳を一方に集めて、牡丹をそっと挿しただけだが、静と動、軽重の対比を楽しみながらいけた。

花材 牡丹（牡丹科）

雪柳（薔薇科）

花器 線刻陶花瓶（竹内真三郎作）



春の声

△9頁の花▽ 仙溪

枯葉の間から春の花たちが顔を出しはじめる。頭上の木々に葉が茂るまでに、葉を伸ばし花を咲かせる。温もりはそこまで来ている。春の声に耳を澄ませよう。

花材 鶯神楽 (忍冬科)

喇叭水仙 (彼岸花科)

スイートピー (豆科)

花器 金彩舟形陶花器

京都駅新春のいけばな

写真④ 仙溪

駅前広場に年末から7日間飾ったいけばな。赤い薔薇はサムライという品種の特級品で、和歌山の生産者のもの。作り手の愛がつまっている。

花材 臘梅 (臘梅科)

老松 (松科)

薔薇 (薔薇科)

千両 (千両科)

花器 彩泥陶花器 (宮下善爾作)



④



器から花を選ぶ

△11頁の花▽ 仙溪

この花も、4ページの花も、自宅での新年会で部屋の設えとしていた花で、どちらもはじめに花器が決まっいて、花器に合う花を考えていけている。いつも「テキスト」の花は、花をはじめに選んでから花器を考えることが多いのだが、花器が決まっているというのも花選びの勉強になると思う。

緑として使ったブプレウラムは、和名をツキヌキサイコ(突抜紫胡)という。芹科・三島紫胡属(ブプレウラム属)の一年草で、ヨーロッパ原産。優しい緑色と、ユニークな姿が初春の清々しさを感じさせてくれた。

花材 カトレア(蘭科)

シンビジウム(蘭科)

ブプレウラム(芹科)

花器 耳付陶花瓶(竹内真三郎作)



山茱萸さんしゅゆの投入

△10頁の花▽ 仙溪

枝を二種に花一種のとり合わせ。
春の花木は葉がないので、椿を添えて水際に繁みをつくることがある。添える花は菊、アイリス、透し百合、鉄砲百合など、和の雰囲気合うものが多い。

花材 山茱萸（水木科）

椿（椿科）

菊（菊科）

花器 赤茶釉陶花瓶



波紋の器

△11頁の花▽ 仙溪

広々とした麦畑。春の風で穂が波打つ。この器の表面の模様も、目には見えない風を、目に見える形にしたかのような流れた。

宮永東山氏の器は、幾何学的な面と面が組み合わさってできている。その面の表にもまた幾何学模様の連続がぐるりと一周する。硬い質感と柔らかなフォルム。不思議な器だ。

まだ冷たさを含んだ春一番の風に目を覚ました花たち。そんなテーマでいけてみた。アルストロメリアを低くいけて、野の花のように見せている。

花材 青麦（稲科）

矢車菊（菊科）

アルストロメリア（彼岸花科）

花器 五面青白磁壺 宮永東山作



出会い花 (17) 仙溪

チューリップ

ガーベラ

朝は私がコーヒーをいれる。愛用のマグカップは、仙齋&素子からのプレゼントで、櫻子は赤色、私は青色だ。かれこれ20年間お世話になっている。

シルクハットの男性が三日月に腰掛けて、赤いハートを持つ絵は、いかにも父が好みそう。書齋にいても、この絵のように心は自由に飛び回っていたのだと思う。

出会い花で一度いけてみたかったのが、チューリップとガーベラだ。どちらも種類が豊富なので、いろんな組み合わせが楽しめる。いける器は、お気に入りのマグカップにどうぞ。

花材 チューリップ (百合科)

ガーベラ (菊科)

花器 マグカップ & プレート

レモンだより

干支にちなんで。メ〜エ。



ウロコ文様の花瓶

△2頁の花▽ 仙溪

使いにくい花器というのがある。でもとり合わせによっては独特の雰囲気を出してくれる花器。この鱗文様の花瓶もその一つで、高さが44センチもある。

家に飾っていたシンピジウムの鉢植。長く伸びた葉は光沢があり魅力的だ。思い切って花3本と葉10枚を切りとり、グロリオサを合わせて鱗文様の花瓶にいけてみた。花器の派手さに対して、花の強さとシンピジウムの葉の広がり、ほどよくバランスをとってくれた。

花材 シンピジウム(蘭科)

グロリオサ(百合科)

花器 鱗文様陶花瓶



檀香梅

仙溪

春の花木の中で、枝を切った時に仄かに良い香りがするものがある。辛夷などの木蓮科の仲間と、青文字などの楠科の仲間がそうだ。楠科の黒文字を削って、和菓子を食べるとききの楊枝に使われるのも、材に香りがあるためだ。

檀香梅も楠科・黒文字属の小高木で、木に香りがすることから、ビヤクダンの漢名である檀香の字があてられている。

関東以西の暖地の山地に分布し、3月下旬から4月に葉の出る前に開花するので、山の中でよく目立つ。

鉛色の花器に檀香梅をいけ、鮮やかな赤椿で水際をひきしめ、さて花を何にしようか。

早春の和の草花は、落ち葉の間から顔を出す小さな花がほとんどで、背の高い草花は限られている。貝母や黒百合は、芍薬などが出るまでの間の貴重な和花だ。

そんな思いを察してか、近年、黒百合の切り花が出回るようになってきた。おそらく京都だからということもあるかもしれないが、有難いことと感謝している。

花材 檀香梅 (楠科)

椿 (椿科)

黒百合 (百合科)

花器 陶扁壺 (林平八郎作)

出逢い花（18） 仙溪

プロテアアイビー

薔薇

プロテアといえば、キング・プロテアのように、大きくて重量のある花をイメージするが、作例のような華奢な仲間もあったのだ。花屋ではプロテア・アイビーと呼ばれている。



プロテアの名前はギリシャ神話の神プロテウスからつけられている。変身する能力をもつ海神だが、南アフリカから熱帯アフリカに百十五種類のプロテアの仲間が分布しているとのことなので、このような小型種があっても不思議ではない。

い感じである。この優しさを更に膨らませるような花は、と考えて深紅の薔薇を出逢わせることにした。先日、相田みつをさんの特集したテレビ番組で、

「感動が人間を動かし、出逢いが人間を変えてゆくんだなあ」という言葉があった。私達が花をとり合わせるのは、客観的には「出逢い」だけけど、花にとってはどうか、いけた花とその花を見る人との関係はどうかなどと考えると、「出逢い」の字を使うのがいいのではないかと思う。

常日頃、温かな愛を感じるいけばなでありたいと願っている。愛情をもって大切にいけると、花はそれこたえてくれる。あらたな出逢いを。



アルストロメリア4色

△3頁の花▽ 仙溪

はじめてアルストロメリアを見たときの印象は「鬼のパンツ」だった。花弁の縞々模様は虎を連想させる。

昆虫はこの模様を目印にして蜜を吸いに来る。このような模様を蜜標みつひょうと云うぞうだ。ここに蜜がありますよというサインの役目だが、言い換えれば蜜屋の看板。客の昆虫に蜜を提供し、かわりに花粉を運んでもらう約束ができています。

作例は、アルストロメリアをカラーの足元に低く集めて、水辺のサツキのような感じにしてみました。

花材 カラー（里芋科）

オクローワカ葉（菖蒲科）

アルストロメリア（百合科）

花器 紺色釉陶鉢（フランス製）



出逢い花 (19)

仙溪

雪餅草

美女撫子

雪「おいらの頭とあなたの頭と、色がよく似てますねえ」

美「あたしの方がいい色だわ。でもあなたの白い縦縞はいいかしてる」

雪「いやー嬉しいなあ、自分でも気

に入ってたんだじつは。おいらの仲間みんなよく似てるもんだから、ちよつと個性的にしとかないとね」

美「首のあたりはピンストライプね、オシャレだわ」

今月の出逢い花は雪餅草の相手を探すうちに、この珍しい撫子に出逢った。土っぽいや器に立てると、二

人(二本)で岩風呂につかっているようで、勝手に会話を想像してみた。

雪餅草は三重、奈良、四国に分布する里芋科・天南星属の多年草で、肉穂花序の先が白く膨らんで、餅をのせているように見える。切り花にしても水揚げがいい。

この撫子の品種名はブレアンサ

ス・クイーン。美女撫子(別名髭撫子)の園芸品種である。美女撫子はヨーロッパ原産だが、アメリカを経由で日本にきたためアメリカ撫子とも呼ぶそうだ。なんともややこしい。最近よく見かける緑の苔玉のような手毬草も美女撫子の改良品種。

見知らぬ男女の混浴のようにも見えてくる。格好つけつつ緊張する雪

餅草と、のんびり寛ぐ美女撫子。花たちの会話を想像するのも楽しい。

花材 雪餅草(里芋科)

美女撫子「ブレアンサス・クイーン」(撫子科)

花器 焼締花瓶

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2015年
7月号
No.625

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



出逢い花 (20)

レオントキール・オバレイ

△表紙の花▽ 仙溪

レオントキールとは「ライオンの手」という意味だそうだ。この花の蕾を写真で見ましたが、確かにライオンの手に見える。

南米原産でアルストロメリアの仲間だが、地面を這うか、もしくは蔓で育つ。作例のレオントキールは湾曲した太い茎の先に、深紅の花が球状に集まって咲いていた。

さて、何といけようか。実ができたばかりの山帰来は、明るい緑色の葉が初々しい。見た瞬間に出逢わせたくなった。

今回も敢えて水際が見えるようにいけてみたが、不思議な一体感が生まれてくれた。そしてそれぞれの個性がはつきりと見て取れる。互いに1本ずつの出逢い花ならではの面白さだと思う。

花材 レオントキール・オバレイ

(百合科・彼岸花科・アルス

トロメリア科)

山帰来 (百合科)

花器 濃青色陶花瓶 (谷口良三作)



京都いけばなプレゼンター
シヨン2015
やまと絵・琳派の草花をい
ける花会

会期 6月6日(土)～7日(日)

会場 京都芸術センター

出品 桑原仙溪

花材 篠竹 黄花九輪草

百合 額紫陽花「紅」

下野 大花鞞草

黄蓮の実



竹取物語

仙溪

ピンクのカンパニユラがあまりに可愛かったので、庭の篠竹しのたけで囲むようにいけて、かぐや姫みたいたなあと一人悦よろこびに入っている。光が透けて見えるようなピュアな花である。蛍袋へいぶくろに感じる野の風情とは違う、はつらつとした美しさ。青いガラス花器にいけると、宇宙間で咲いているようだ。その雰囲気をごわさないように、篠竹のいけ方を工夫している。

花材 カンパニユラ(桔梗科)

篠竹(稲科)

花器 ガラス花器



ギョリュウ

△3頁の花▽ 仙溪

ギョリュウは中国原産の落葉小高木で、檉柳または御柳と書く。春と秋に桃色の小さな花を枝先に沢山咲かせ、そのあとの実が裂けると白い綿毛で種が風に飛んでいく。乾燥地でも育つそうだ。

漢の武帝の宮殿にも栽培されていたそうで、そう聞くと妖艶な雰囲気にも見えてくる。ギョリュウが雲で、洋種山牛蒡が龍に見えてきた。

花材 ギョリュウ(科)

洋種山牛蒡(科)

トルコ桔梗(竜胆科)

花器 コスタボタ赤色ガラス花瓶



出逢い花 (21) 仙溪

棕櫚竹

エビデンドラム

家の茶室の前庭に棕櫚竹ししゆろちくが植わっている。竹と名がつくが竹の仲間ではなく、椰子の仲間。中国南部からラオス、タイの原産で、耐寒性が比較的強いので、日本の庭にも植えられたり、室内用の鉢植にされている。

棕櫚竹の仲間に観音竹もあるが、葉の広いものを観音竹、細いものを棕櫚竹と呼んで区別しているようである。

午後の僅かな時間、棕櫚竹のうしろの塀に影が映るときがある。涼しげな葉影が風でキラキラと揺れる。

さて棕櫚竹の傷みの無い葉を一枚、どんな花を合わそうか。日本の夏草ではしっくりこない。やはり南国の花が似合うだろう。でもアンズリウムはよく使うし、ということで見つけたのが小振りのエビデンドラム。花屋の棚で「私はどうですか?」と声をかけてくれたので、大事に連れて帰った。

さてお次は器。以前、南の島で感じた木陰の風の心地よさを思い浮かべて、白い器にしぼる。完成度の高い形よりも、自由さを感じる形。と考えて、この花器を選んだ。胴が少し窪んでいて、点線と実線で輪が描かれ、中心に十字の絵柄。私には環礁かんしょうの中で泳ぐ海亀に見えてきた。

花材 棕櫚竹 (椰子科)

エビデンドラム (蘭科)

花器 白釉陶扇壺 (八木一夫作)



七竈と藤袴

自然の色彩のなんと美しいことか。紅葉花材を手にするよろこびは、この季節ならではのものだ。黄、橙、赤が重なり合い、広がって行く。色の切れ間に、藤袴を香らせた。

ふじはかま
仙溪

花材 七竈 (薔薇科)
藤袴 (菊科)

花器 紺色釉陶花瓶



蔓梅擬と鶏頭 つるうめもどき けいとう

〈11頁の花〉 仙溪

器の装飾はシンプルなものを好んで使っている。例えば白黒とか。そして模様があるとすると、自然をモチーフにしつつ、抽象的なデザインの方が花をいけやすい。

雨上がりの庭。蜘蛛の糸に水滴がいつぱいつぱいしていることがある。作例の花器のデザインはまさにそんな感じだ。自然の輝きを感じる器はいけばなの趣を深めてくれる。

花材 蔓梅擬（錦木科）

鶏頭二色（苧科）

女郎花（女郎花科）

花器 白黒陶花瓶（近藤豊作）



出逢い花 (22)

仙溪

山芍薬の実 (牡丹科)

唐松草 (金鳳花科)

どちらも山の宝ともいふべき植物。強烈な印象の山芍薬の実に、粉雪のような繊細さを感じる唐松草。谷川の水流のような造形の花器に挿すと、奥山へ通じる秘密の扉が開いて、向こうから微風が吹いてきた。

出逢い花 (23)

＜3頁の花＞ 仙溪

糸芭蕉の枯葉 (芭蕉科)

アスコセンダ (蘭科)

植物が枯れた姿も味わい深い。
たまたま花屋で、いい感じに枯れ

た糸芭蕉の葉を見つけたので、深紅の蘭と出逢い花にしてみました。

この赤い蘭の名前はアスコセンダ。洋蘭に詳しい方はご存知と思うが、私ははじめて名前を知った。アスコセンダという蘭は、バンダとアスコセントラムの交配で生まれた蘭で、多くの品種があるらしい。小型

のバンダというところだが、花数が多いので、東南アジアでは大変人気があり、庭の木にふら下げて育てているそうだ。

枯れた花材にはみずみずしさを加えるように相手を選ぶといい。そうすることでお互いの存在感が際立つ。

さて、器をどうしたものか。南国を連想させてくれるような、それでいて枯葉のフォルムと響き合うような器はないものか。と、ぶつぶつ云いながら探す。漸く一つ引っ張り出してきた。





基本花型にいける

主材 檜扇の実(菖蒲科)

副材 薔薇(薔薇科)

ピンクッション(ヤマモガ

シ科)

花器 陶コンボート

盛花の基本花型には立体と斜体があり、主材の姿が立ち上る場合は立体型に、横へひろがる場合は斜体型にいける。

主材に選んだ檜扇の実は立体・斜体どちらにもいけられる花材だが、一本しかない場合は立体型が理想的。

立体副主型





パンパスとプロテア 仙溪
 南米のパンパスと南アフリカのプロテアを出逢わせた。どちらも未知の大地に根を下ろす、野生の強さを感じる。

インカのような模様が刻まれた花器にいけると、太古の地球の鼓動が聞こえてきそうだ。

花材 パンパス・グラス（稲科）

キング・プロテア（ヤマモ

ガシ科）

煙の木の葉（漆科）

花器 飴色釉花器

◆横から見た、いけばなの奥行き。



レモンだより

「人間って花を切ったり挿したり、不思議な生き物だにゃ〜」





基本花型にいける

主材 紫式部むらさきしきぶ (紫蘇科)

※熊葛科から移動

副材 竜胆りんとん (竜胆科)

木苺きいちじょう (薔薇科)

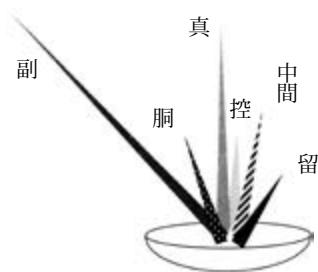
花器 陶水盤

紫式部には枝が直立するものと横へ伸びるものがあるので、その性質にあわせて花型を考える。作例の枝は横へしなるような枝振りだったので、斜体型を選んだ。

一本の枝から十本以上の長い小枝が出ていて、そのままでは大きすぎるため、小枝を切り離していている。

紫式部の実には茂った葉を合わせた。秋色に色付きはじめた木苺(構苺)はよく映る。白色と青紫色のしほりの竜胆で、彩りを深めた。

斜体副主型





神戸ビエンナーレ2015
いけばな未来展(写真③)
第6期 10月14日(水)~18日(日)
会場 元町高架下商店街
5人合作



出逢い花 (24) 仙溪

野茨の実 (薔薇科)

鶏頭 (苧科)

赤い実に赤い花を出逢わせて、黒い器に付けてみた。

撮影のあと、床の間に飾ったが、水辺の黒い杭に留まる鳥の絵の軸とぴったり合っていた。いい出逢いが生まれたときは、素直に嬉しい。

花器 黒釉陶花器

陰陽五行

現在使われなくなった旧暦(太陰太陽暦)に興味を持つと、陰陽五行思想にゆきついた。日本文化に携わる者として、そんなものもっと早くに知っておけ、とおしかりを受けそうだ。

今、吉野裕子著「陰陽五行と日本の民俗」を読んでいるところだ。まだ最初の数ページだが、とても難解でも非常に面白い。古代の中国で生まれた哲学だが、天地のはじまりも陰と陽で説明でき、木・火・土・金・水の五元素(五気)の作用と循環すなわち五行によって、万物が生成され、自然界が構成されている、というもの。

要するに陰陽五行の法則を知っていると、自然のことがストンと理解できるのではないか。そっだとする、修める価値は非常に高い。

基本花型にいける

主材 若松（松科）

副材 水仙（彼岸花科）

薔薇（薔薇科）

花器 陶コンポート（宇野仁松作）



若松を主材にした正月花の作例。
花屋には12月初旬の松市のあと、
正月用の松が並ぶ。色々な松が売ら
れるが、生花にせよ盛花にせよ、一
番身近な松は若松である。

小枝の出た節から上は一年で伸び
た部分で、強い生命力を感じる。
作例のとり合わせは、花器の大き
さにあわせて大きくも小さくもいけ
られる。小さな花器なら、若松一本

に水仙2本と薔薇1本でもいけられ
る。またそれぞれの本数を増やせば
大きな花にできる。
薔薇の代わりに干両をとり合わせ
てもよい。



梅擬 菊
うめもじきき

△ 9頁の花▽ 仙溪

花屋で洋種梅擬として赤と黄色の梅擬が売られていた。枝にびっしりついた実は大きくて色鮮やかだ。格调高い感じというよりは、大らかで潑刺とした印象を受ける。

とり合わせには梅擬と同系色の菊をいろいろ選んで遊んでみた。金茶色の糸菊と二輪菊、濃赤色の金糸罌菊、黄色とレンガ色のポンポン菊。撮影したのは11月初旬の菊たちである。

花材 梅擬2種(繡の木科)

菊5種(菊科)

花器 梅花皮釉水盤(木村盛伸作)

◆横から見た、いけばなの奥行き。



琳派に習う

仙溪

左の写真は四条通のウィンドーを飾る「琳派400年にいける・いけばな展」に私が出品した花だ。
天井の高いウィンドーだったので、青竹を器にして紅白の実を上下にいけることを考え、デニム生地をバツクに吊して赤と白を印象的に



見せる工夫をした。ウィンドーではガラスに風景が写り込むので、持ち帰って写真に撮った。

「琳派」を辞書で見ると、江戸時代における絵画を主とする工芸、書などの装飾芸術の流派で、本阿弥光悦と俵屋宗達を祖として尾形光琳が大成し、酒井抱一へと発展した。絵

画は技法、表現ともに伝統的なやまと絵を基盤とし、画面の豊かな装飾性が特色。とある。

今年の本阿弥光悦が徳川家康から京都鷹峯の地を拝領して四百年にあたる。

琳派の人気の秘密は何だろう。伝統の技と品格に磨きをかけて、新し

い着想と技法を駆使し、時代が望む新たな「美」をつくらうとした情熱が心を打つのだろうか。

「琳派」の技法やデザインを現代に生かすことも意義深いことと思うけれど、試行錯誤しながら新たな時代をつくる情熱こそ、この節目に見習わなければと思っている。

花材

南京櫨なんきんはせ（燈台草科）

白玉椿しらたま（椿科）

繻の木ぬのき（繻の木科）

数椿かずばら（椿科）

花器

青竹



出逢い花 (25) 仙溪

无患子 (无患子科)

菽椿 (椿科)

无患子の枝をいただいた。丸い実がたわわについている。実には黒くて丸い種が一つ入っていて、半透明の果皮の内側で、ころころと動くのがわかる。作例の左下の実を切っておいたので見ていただけたらと思う。黒い種は堅くてよく跳ねるので、正月の羽根つきの羽根の重しにされる。病気を運んでくる蚊を食べてくれるトンボにみたてた羽根には、子供が病気を患わないようにとの願いがこめられている。

この貴重な无患子の枝が品良く引き立つ器として、漆器を選んだ。枝を挿すと、朱色の宝袋からぼんぼんと珠が飛び出しているように見える。艶やかさと瑞々しい生命力を感じさせてくれる菽椿は、飛び跳ねて遊ぶ子供達を見守るお母さん。

花器 朱塗花器

◆横から見た、いけばなの奥行き。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2016年
1月号
No.631

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



水仙に寒菊

の花▽ 仙溪

△表紙

父はよく水仙一色の立花に、寒菊の前置を好んで加えていた。寒さで紅葉した葉色の上品な美しさ、寒中に咲く健気な黄色い花が、水仙の相手に相応しいと感じていたのだらう。精緻に編まれた花籠に寒木瓜と共に水仙と寒菊をいけた。寒菊は下品にいけたらあかんと母が云っていたのを思い出す。花の持つ品格を引き出したい。

岸花科)

寒菊(菊科)

花器 花籠(公長斎小菅)

花材 寒木瓜(薔薇科) 水仙(彼



基本花型にいける

△9頁の花▽ 仙溪

主材 ユーカリ(フトモモ科)

副材 ストック(油菜科)

スプレー菊(菊科)

花器 粉引陶水盤(伊藤典哲作)

ユーカリのシルバークレーの葉色には鮮やかな色の花がよく似合う。スプレー菊のワインレッドとストックの淡いピンクが、ユーカリを背景にしてモダンに鮮やかに見える。

花型は斜体副主型を選び、ユーカリの長い枝が副の位置に伸びて。真副、胴にユーカリが広がる感じにしている。

ユーカリの次にストック、スプレー菊の順に入れていく。その時じゃまになる小枝は切っておき、最後に水ぎわや奥行きに加える。ストックの足元にも小枝をさして温かな感じにしておくといい。



紫葉アカシア

△10頁の花▽ 仙溪

枝先の葉が紫色になるアカシアが、花以外の時季に切り枝で売られるようになった。微妙な色合いが写真では分かりにくいですが、金属的な深い輝きは冬のいけばなに独特の深みを与えてくれる。

花材 紫葉アカシア（豆科）

アイリス（彼岸花科）

薔薇（薔薇科）

花器 洋陶スープ鍋

横から見た、いけばなの奥行き。





出逢い花 (26)

仙溪

桐 (桐科)

薔薇 (薔薇科)

黄な粉をまぶしたように見える暖かそうな桐の薔が好きた。春には高貴な紫色の花がこの中から生まれ出てくるのだから、自然のなんと不思議なことだろう。この薔たちの子守役に深紅の薔薇を添えた。

花器 金箔散らし漆花器



黒芽柳とアマリリス

△2頁の花▽ 仙溪

花材 黒芽柳(柳科)

アマリリス(彼岸花科)

ミリオクラダス(百合科)

花型 盛花

花器 陶花器

黒芽柳は猫柳の突然変異で生まれてと考えられている。
明るい洋花との相性がいい。

横から見た奥行き





ミモザとアネモネ

△2頁の花▽ 仙溪

花材 ミモザ(豆科)

アネモネ(金鳳花科)

花器 ブルーガラス花瓶

アネモネの鮮やかな花色が好きだ。特に赤色。アネモネを眺めていると、アートの世界に誘われるような感覚をおぼえる。それは絵の具のようにくつきりとした花色のせいなのか、花弁が美の女神の衣（ドレス）のように見えるためか、うまく云えないが不思議な魅力をもっている。

風の花という意味を持つアネモネは、春の太陽のようなミモザと合わせると、なんともいえない表情になる。

ミモザ(正確にはフサアカシア)はオーストラリア原産だが、南仏ではミモザ祭があるくらい特に愛されている。そんなミモザとアネモネは、まるでフランス印象派絵画のような組みあわせだと思っ。

横から見た奥行き





二つ並べる

△4頁の花▽ 仙溪

花材 雪柳(薔薇科)

チューリップ(百合科)

菜の花(油菜科)

花器 陶水盤(伊藤典哲作)

稽古でいけた花を二つ並べてみた。それぞれ小さめにいけているが、置く間隔を工夫すれば、この調子で幾つでも増やして飾れそうだ。雪柳には自由に広がる動きがあるので、このような楽しみ方もできるのだらう。

横から見た奥行き



桃とアナスタシア

△表紙の花▽ 櫻子

花材 桃(薔薇科)

菊 品種名アナスタシア

(菊科)

花器 飴色釉陶壺



出逢い花 (27)

仙溪

猫柳 (柳科)

チューリップ (百合科)

テーマは「春の光」。

八重咲きの個性的なチューリップを見つけたので、春を感じる枝との出逢いをいけようと決めた。

花屋には桜、連翹など、春の花木が並んでいたが、花穂のふくらんだ猫柳の一枝が目が止まった。

「出逢い花」をいける時に自分で決めていることがある。2種類の花材を選ぶのに、それぞれ必ず1本と1本の出逢いでいけること。なので、これと思う花や枝を吟味して選んで買わせてもらっている。

この猫柳は長い枝の先で写真のように枝分かれしていた部分を切っつけていける。短くいけることで、綿毛の柔らかな光を身近に感じられて、より愛着がわく。チューリップも花と葉を切り分けて、小さく小さくいけている。

春の柔らかな光を感じる器は何にしようか。小さな枝と花をより輝かせてくれる器。チューリップの個性的な美しさと釣り合うモダンなデザインの器。そうだ、あれがあった。

ガラスの小鉢に丸剣山で花をいけて置くと、美しいお皿も花器になる。あとほうまく剣山を隠せるかどうか

花器 現代織部陶皿 (柳原睦夫作)

ガラス小鉢

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2016年
4月号
No.634

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



出逢い花 (28)

△表紙の花▽

仙溪

木蓮 (木蓮科)

鈴蘭 (百合科)

とある美術館のミュージアムショップにあった小鉢?。「出逢い花」に使おうと買い求めていたので、その器に似合う花を花屋で探すことになった。

この木蓮の高さは29cm。大きな枝の脇枝を切ってもらったものだ。鈴蘭は12cmととても小さく、根付きで売られていた。

器の水玉模様と鈴蘭の可愛らしさ、木蓮の色と動きが一体となって、おどき話のような花になった。

花器 陶茶盤 (山口由次作)



枝の姿に添わせる

主材 小手毬こてまり (薔薇科)
 副材 薔薇2種 (薔薇科)
 花器 陶花瓶

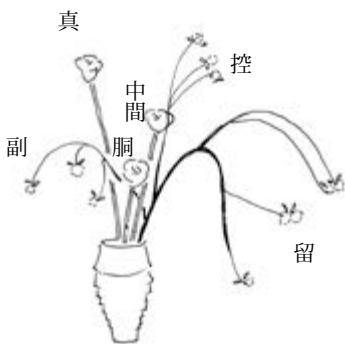
今年は奈良のお水取りが終わる頃、白木蓮、山茱萸、雪柳の花が一齐に咲き始めた。小手毬はそれらに少し遅れて咲き始める。

小手毬は中国原産の落葉低木。江戸時代のはじめには庭木などに利用されており、「立華時勢粧」にも名前が見られる。ちなみに雪柳も小米花の名前で書かれている。

手毬のように集まって咲く花が枝垂れる姿は独特の風情がある。その特徴を生かした花形を心がけている。

- ・ 上下に枝が分かれている時は二つに分けて使う。
 - ・ 上方に枝が集まっている時はそのまま使う。
 - ・ そのまま使うが、一部の枝を切って挿しなおす。
- 以上のような3通りのいけ方が考えられる。枝の姿にあわせていけ、添える花を臨機応変に挿し加えていく。

投入垂体留主型





七竈 ななかまど
芍薬 しゃくやく 撫子 なでしこ

△3頁の花▽ 仙溪

花材 七竈 (薔薇科)

芍薬 (牡丹科)

撫子 (撫子科)

花器 青白磁花瓶 (市川博一作)

みどりひとときわ美しい季節。新緑の枝物に季節の花を添えることが多い。爽やかな風を感じる花をいけた

横から見た奥行き





出逢い花 (29)

仙溪

木香薔薇 (薔薇科)
もっこうばら

紫蘭 (蘭科)
しらん

四月中頃から五月初旬にかけて、街中で思いがけず見事なモッコウバラに出くわすことがある。岡山天満屋での花展中にも、天から降りそそぐようなモッコウバラに、とある露地で出逢った。花展会場では庭で咲いた紫蘭をいけている人もあり、この出逢い花をいけた後だったので、確かに同じ頃の花なのだほっとしている。

いけばなとぐらぐら露地歩きは、こんなふうにつながつている。花をいける人にはそれぞれにそれぞれの出逢いと繋がりがあるんだと思う。だからいけばなは楽しい。

花器 素焼小壺



横に生ずるは横に

主材 五月梅(梅花空木)

(紫陽花科以前は雪の下科)

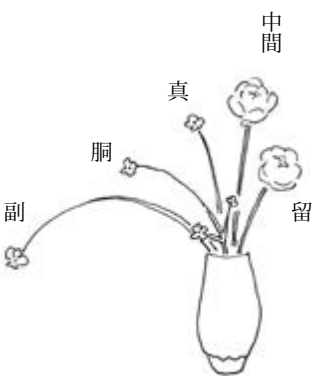
副材 芍薬2種(牡丹科)

花器 陶花瓶

328年前前に流祖が書いた「立花秘傳抄五」(立華時勢粧八卷の内の一ツ)の中に、「我が心草木にまかせて念慮なく、植に生ずるは横に、横に生ずるは横に遣う時は、草木自然の体顕わなるべし」という言葉がある。これは立花に限らず、生花、投入、盛花にも等しく当てはまる、言わばいけばなの基本中の基本理念である。

上の写真は、横へ長く伸びた五月梅の枝をそのまま生かして、大輪の芍薬2本を添わせたシンプルな投入。五月梅は足元を割り、皮を削っていける。芍薬の葉が自然にひろがるように、いけてから葉をさばく。花がいきいきして見えることがまず大切。これからの季節は切り口を時々切り直すこと。花器の内側のぬめりも拭き取って、新鮮な水でいけ直すと少しでも長く楽しめる。

投入垂体副主型



山帰来の根

仙溪

流展(岡山) 出品作

花材 山帰来(猿捕茨)の根

アンズリウム ミリオクラダス

花器 銀織部花器(柳原睦夫作)



この骨のようなものは猿捕茨の根を晒したもので、このように地中であって普段目にすることのないものも、いけばなではいけることがある。地中にあっても植物の造形の一部美しく使って他には無い雰囲気を出せるかどうか。宇宙的な花器で星雲のように。



山の風情

△2頁の花▽

仙溪

花材 猿捕茨さるとりいばら（百合科）

百合「セラダ」やまあじさい（百合科）

山紫陽花しんじゆげ（紫陽花科）

下野しもつけ（薔薇科）

花器 陶花瓶

この黄色の百合はセラダという名だが、一輪咲きに仕立てられて野の風情が感じられたので、山野草ととり合わせて投入にした。猿捕茨には棘があるが、この枝には無かった。南の方の浜猿捕茨は棘が無いので、掛け合わせてあるのかもしれない。品種改良された花材といっても、これらのような山の風情を感じる物が手に入るのは嬉しい。



出逢い花 (30)

仙溪

満天星 (躑躅科)
どうたんつし
つしじ

木槿 (葵科)
むくげ
あわい

花器 陶製鉢カバー (ベルギー)

湯呑みのように見えるけれど実は鉢カバー。植木鉢を部屋の中に飾りたいとき、プラスチックの容器のままでは味気ない。そんな時のカバーとして大小いろいろな形で売られていた。ベルギー製で、黒陶に鮮やかな色の釉薬がかけられ、貫入がアクセントになっている。

ミニ鉢植用の器を二つ購入した時から、水が入れられるなら、対で花をいけようと決めていた。どんな花を出逢わせようか、そんな気持ちにさせてもらえるのは、きつと器の力だと思う。食卓や窓辺に飾るような気楽な花が似合う器。一輪の花でもお洒落に飾れる、そんな器に最近が目が行ってしまう。

ドウダンツツジは大きな枝から小さな小さな小枝まで、器の大きさに合わせてどんな大きさにもいけられる重宝な枝だ。小さくいけると風車のような葉の姿がよくわかる。グレイの釉薬の方に翠をいけて、赤い方には底紅のムクゲを一本、器の口に乗るようにいけた。緑色の背景に置くと、白と赤が爽やかに重なる。



棕櫚竹^{しゅろちく}

仙溪

花材 棕櫚竹(椰子科)

アンズリウム(里芋科)

花器 陶花器(竹内眞三郎作)

庭の棕櫚竹をときどき間引いている。出逢い花でも一度、庭から切った葉を使ったことがあったが、今回は枝ごといけてみることにした。傷んだ葉は切り、勢いのある葉を残す。作例では3本の棕櫚竹を使っているが、厚みも広がりも充分にあり、なかなかの存在感がある。

棕櫚竹はヤシ科・カンノンチク属の常緑低木で、中国南部原産。日本には琉球を経て渡来し、三百年ほど前から栽培されてきた。葉は棕櫚に似て、幹は竹に似る。ただし竹のように中空ではなく、とても硬い。

この棕櫚竹の広がりには、大輪の赤いアンズリウムがよく似合う。赤黒い品種も混ぜると、色に深みが加わった。



別の器でビルのエントランスにかけたのを、左横から見たところ。



美^び白^{はく}という名の百合

仙溪

花材 丸葉の木(満作科)

鉄砲百合「美白」(百合科)

女郎花(女郎花科)

スプレー菊(菊科)

花器 布目陶花瓶(伊藤典哲作)

鉄砲百合は咲くと白い百合だと感じられるが、花屋に売られているのは蕾の状態なので、いけてしばらくの間は淡緑色がだんだん白に近づくのを眺めることになる。

蕾のうちから白さを楽しみたい。おそらくそんな思いから、この「美白」という名の鉄砲百合が生まれたのだろう。確かに蕾のうちから、はっとする美しさを感じる。緑の中でも不思議な存在感がある。ただ、咲いた時の自然な感動は半減するようにも感じた。

切り花の多くは過去の品種改良のお蔭で、より美しく、強く、大きくなってきた。近年は葉も大切にされ、また風情を残す改良も多く見受けられる。今後、どんな花たちに出逢えるだろう。

横から見た奥行き





出逢い花 (31)

仙溪

アナベル (紫陽花科)

鉄線 (金鳳花科)

花器 ベネチアンレースガラス花器

アナベルは北アメリカ東部原産のアメリカノリノキの園芸品種で、紫陽花の仲間である。開花時は白色で、やがて緑色に変化して枝に残る。作例のアナベルも開花後に緑色になったところという感じ。このアナベルに紫色の鉄線を出逢わせたが、それだけでは地味なので、器で爽やかな華やぎを加えようとして選んだのが、このレースガラスの花瓶だ。

少し乾燥してふわりとした感じのアナベルに、レース越しに見える水と、鉄線の花の潤いが瑞々しい。

祇園祭後祭巡行 7月24日(日)

今年には健一郎、順之助、私の三人で参加した。



老爺柿
ろうやがき

△ 4頁の花▽

仙溪

花材 老爺柿(柿の木科)

白菊大輪(菊科)

花器 黒釉陶花瓶

ロウヤガキは渋柿で食用には向いていない。原産地は中国。実の形からツクバネガキとも呼ばれる。

岡山の先生の庭には、見上げる高さにもロウヤガキが育っているそうだ。いけばなでは以前からマメガキ(豆柿)が使われることがあったが、近年このロウヤガキも見かけることが多くなってきた。

ロウヤガキは園芸学者の菊池秋雄が中国から持ち帰ったそうだ。京都植物園とも縁のある菊池先生は青森の出身で、父上は「青森りんごの始祖」と呼ばれる菊池楯衛。

菊池楯衛は津軽藩の武家に生まれたが、花や木が大好きで、明治となって以降、北海道でアメリカ人の農業技師から果樹栽培の技術を学び、青森がリンゴ栽培に適していると確信してからはリンゴ栽培一直線にすすんだ。それが今の「青森といえはりんご」に繋がっている。

ロウヤガキを調べていて横道に逸れたが、植物が大好きで、良い木を育てることに情熱をそそいだ人のお蔭で、現在美味しいリンゴを食べることができていることに、今更ながら感動している。



縹薄しますすき

仙溪

花材

縹薄しますすき（稲科）

鶏頭けいとう2色（莧科）

吾亦紅われもこう（薔薇科）

花器

黒赤ガラス花器

ススキは水揚げが難しく、すぐにカリカリに乾燥してしまいが、その中でも比較的よく水を揚げるものにシマススキがある。

白い縹模様が写真にはっきり写るよう前方へ数本集めてみた。前方へ張り出す胴主型の花型だが、作例では写真に納めることを考えて、葉が広がりすぎないように苦労した。広い空間にいける時にはおすすめである。

とり合わせたケイトウは頭が大きく、葉が見事なまでに茂っていた。8月初旬にいけたのでまたススキの穂が出ていないのが残念だが、ワレモコウを加えると、秋が感じられる。

横から見た奥行き





出逢い花 (32)

仙溪

ポトスイエロー (里芋科)
パイオペディルム

(蘭科)

花器 緑釉陶鉢

はじめに聞いたが、ポトスイエローと呼ばれる葉はとも大きい。詳しくはわからないが、おそらく熱帯や亜熱帯の植物だろう。頑丈な葉は、厳しい太陽の光や強い雨風にも負けない逞しさを感じる。

などに見ていたら、今回の出逢い花のイメージが浮かんできた。

お相手には同じく南国の花で、不思議な姿のパイオペディルムを選んだ。大小の葉と花の組みあわせ。普通のいけ方ではいけにくいけれど、出逢い花にするとちゃんと絵になってくれる。

逞しい葉の下に、ひよっこりと顔を出す森の妖精。器も森のみどりにして、植物の会話を聞き耳を立てる。

横から見た奥行き



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2016年
10月号
No.640

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



出逢い花 (33)

△表紙の花▽

仙溪

芭蕉の枯葉 (芭蕉科)

ダリア (菊科)

花器 天目釉「ふくら壺」

柳原睦夫作

不思議な形の実が口を開けたような器だ。写真では見えないが、三つの膨らみを持つ器で、どの角度から見ても異なった表情を持っている。風をはらんだようにくると巻いた芭蕉の枯葉。深い赤色のダリア。これらを器の口を見せるようにいけてみた。器の膨らみと枯葉の丸みが呼応する角度を探しながら。次にこの器にいける時は何がいいだろう。想像の翼をひろげて楽しんでる。

横から見た奥行き



初歩の盛花

◎枝1本と花2本のいけばな

花材 丸葉の木 (満作科)

スプレー菊2種 (菊科)

花器 かいらぎ釉水盤 (木村盛伸作)

ある程度のポリウムがある枝と、葉が美しくついた花のとり合わせなら、枝1本と花2本でも、シンプルないけばなの稽古になる。

たった3本をいけるだけだけれど、それぞれを、どんな角度に倒せばいいか、どんな長さに切ればいいのか、考えながらいけることで、いけぱなに大切なバランス感覚が養われる。

前後左右上下のバランス。枝の伸びと葉の繁みのバランスなどなど。シンプルなものほど、ものの働きを掴みやすい。

横から見た奥行き





梅擬

うめもどき

仙溪

花材 梅擬(繡の木科)

大輪菊「サンバママ」(菊科)

花器 陶水盤

そろそろウメモドキの出でくる季節である。小さな葉を丁寧に取り除くのは根気の要る作業で、他の花材にくらべても、特別に高価なものも頷ける。

葉が梅に似て、また梅の花を小さくしたような薄紫色の花が咲くので名付けられた。雌雄異株。花弁の数は4〜5個、ときには6個の時もあるそうだ。実には発芽抑制作用があつて、鳥が食べて糞と一緒に種が落ちたところで発芽するようにになっている。鳥に種を遠くへ運んでもらうための工夫だ。

そしていよいよキクの季節でもある。この季節にしかいけられない糸菊や嵯峨菊、肥後菊などに加えて、近年は洋菊あるいは洋風の菊が増えてきている。その産地の中でも特徴のあるのが飛騨と兵庫(三木と淡路島)だ。それぞれ飛騨ママ、兵庫サンバママの名前で呼ばれているが、作例の大輪菊もサンバママの一種である。

花だけでなく葉も美しく、生産者の情熱と愛情を感じる。独特の個性を活かせるとり合わせを考えたい。



出逢い花 (34)

仙溪

ビバーナムの実 (忍冬科)
秋桜 (菊科)

花器 陶花瓶 (清水卯一作)

ビバーナムの赤い実とコスモスを出逢わせてみた。しっとり艶やかな赤い実が不定型に集まって枝に留まっている。葉はすでに無いので、相手には葉のある花がいいが、多すぎても実が目立たなくなる。

コスモスは鉢植で買った。丈は短けれど、切り花のコスモスではこんなに葉がしっかりしていない。白花もあったが、あえてピンクのコスモスを合わせてみた。モノトーンの器に、赤の濃淡と葉の緑が鮮やかだ。

横から見た奥行き





メラレウカ

仙溪

花材 メラレウカ（フトモモ科）

リコリス（彼岸花科）

ダリア（菊科）

花器 陶コンポート

メラレウカはオーストラリアの樹木でユーカリと同じくフトモモ科。作例のように黄金色になるものや赤くなるものなど種類が多く、芳香があつてハーブとしても利用される。オレンジ色の器にたつぷりのメラレウカを集めて、リコリス、ダリアで色の濃淡を楽しんだ。

メラレウカの木。大阪花の文化園。



横から見た見た奥行き



京都市芸術文化協会創立35周年記念事業
京の文化絵巻Ⅰ
花鳥風月

会期 9月11日(日)

会場 ロームシアター京都

「鳥」の部 華道 桑原仙溪

邦楽、邦舞、洋楽、モダンダンス、能楽、狂言、書、今様、華道。総勢150人による舞台上に合わせ、今様の舞手に介添えをしていただき、雌雄の鳥をイメージした花をいけた。器は柳原睦夫氏の銀オリベ。花材は2.5mのカナリー椰子の新芽など。命の躍動を感じていただけたと思う。





赤い実と菊いろいろ

仙溪

花材 野茨のびさ（薔薇科）

白糸菊 黄飛驒マム

スプレー菊 小菊（菊科）

花器 陶花瓶

先月号で兵庫サンバマムと梅擬の盛花を掲載したので、今月は飛驒ひだマムを一本混ぜて野茨と投入にした。野茨を広げた間に、前方へ長く4種類の菊を出している。

飛驒マムには多くの品種があるので特徴を一言では言いにくいですが、ダリアのようなモダンさと、茎も葉も大切に育てられた和の姿の両方を兼ね備えた菊というところか。

菊は咲ききった後、水溜に浮かべて楽しんでいる。





出逢い花 (35)

仙溪

南瓜 (瓜科)
かぼちゃ

葉鶏頭 (鳶科)
はげいとう

花器 天目釉酒器

岡山の原田先生から今年も南瓜をいただいた。なんともいえない存在感があったので、出逢い花の片方の花材として使わせていただいた。

出逢わせたのは小さな鉢で売られていた葉鶏頭。葉鶏頭を切って酒器にいけ、南瓜の横に置くだけで絵になってくれる。でも折角なのでもう少し面白い出逢わせ方はないかと考え、南瓜の上に乗せてみた。

写真のようになったわけだが、自分ではこれでいいのかどうかよく分からない。分からないけれど、自然の恵みに対する感謝の気持ちをこめて、大切にいけた結果なので、写真に撮ることにした。

いただいた箱からこの南瓜が出てきたときに感じた神々しさよりも、どちらかと言えば剽軽な感じになってしまった。でもひよっとすると、南瓜の原産地、中南米の森の神様はこんなお姿かもなどと、想像して楽しんでいる。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2016年
12月号
No.642

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



アロエ「不夜城」

△表紙の花▽ 仙溪

花材 アロエ・不夜城(百合科)

アマリリス(彼岸花科)

枯紫陽花(紫陽花科)

花器 陶花瓶(宇野仁松作)

アロエの園芸品種の一つアロエ・ノビリスが不夜城と呼ばれている。キダチアロエが交配の親になっているそうだ。

キダチアロエはかつて「医者いらす」と呼ばれて、怪我や火傷の民間薬として重宝な植物であった。私も子供の頃、外でころんで擦り剥いた傷を治してもらったことがあるが、そんな利用法を知っている人も少なくなってきた。

作例のアロエは茎がぐにやりと曲がっていたのでその動きを生かした。鉢から切るのは勇気が要るので、ここ一番という時に、その価値に相応しい花材をとり合わせていきたい。

大輪深紅のアマリリスで温かみと優しさを加え、少し青みの残る枯紫陽花が両者のつなぎ役になってくれた。花器はどこか西洋的な雰囲気を感じる宇野仁松作の花瓶を選んだ。枯紫陽花とアロエの根の色が器と同一化して不思議な一体感を感じる花になった。



第31回国民文化祭・

あいち2016

華道フェスティバル

会期 11月1日(火)～6日(日)

会場 名古屋市民ギャラリー栄
(公財) 日本いけばな芸術協会・
役員招待出品 桑原仙溪

花材 サンスベリア・アルボレッツ

センス(竜舌蘭科)

アロエ・不夜城(百合科)

アンズリウム(里芋科)

アンズリウムの枯葉

花器 陶大壺(近藤豊作)

今号の表紙と裏表紙の花材を名古屋での花展に出品した。どちらも葉先が尖っているので扱いに難儀したが、近藤豊さんのどっしりした器がしっかりと受け止めてくれた。



桐と梅擬と寒菊

△2頁の花▽

仙溪

花材 桐(桐科)

梅擬(繡の木科)

寒菊(菊科)

花器 紅彩釉花器(宇野仁松作)

ざっくりとした季節の投入。

大きな口の器にたつぷりの水を入れ、あまり背が高くないように、奥行きのある花型に二種の枝を留めてゆく。桐も梅擬も葉が無いので葉の茂った花を添える。ここは敢えて寒菊を選び、黄色い蕾と赤い実を引き立てた。



サンスベリア・
アルボレッセンス

仙溪

花材 サンスベリア・アルボレッ
センス(竜舌蘭科)
アンズリウム(里芋科)
花器 陶大壺(近藤豊作)

この観葉植物はサンスベリアの仲間で、硬い緑色の葉の先端が鋭く尖っている。アルボレッセンスとは「木のような」とか「木の性質をもった」という意味だそうだ。いわゆる「木立サンスベリア」である。名古屋の花展で、同じ器に立ててくれた(8頁)ので合わせてご覧いただきたい。花茎の枯れたものがでていたので傷めないように大事に残して撮影した。朽ちた物の持つ自然味が加わると、植物の経てきた時間に思いを巡らせられる。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2017年
1月号
No.643

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



出逢い花 (27)

△表紙の花▽

仙溪

ピナス (松科)

パンジー (堇科)

花器 陶製にわとり 紫釉陶酒杯 ラファイア

24年前に両親が買ってきた陶の鶏。派手な色使いで装飾されているけれど、品があるので床飾りにもなる。同じ質感のぐい呑みをラファイア椰子の紐を使つて背負わせ、イタリアカき松(ピナス)の若木とパンジーをいけた。臘脂色のラファイアを束ねて、鶏と器の隙間を埋めている。

動物の置物に花を背負わせるのはこれが2度目になる。なぜこんなふうに入れたか自分でも分からないのだが、今回も気に入っている。外国の松の優しさ。パンジーの色と表情。一体となったフォルム。偶然が生んだいけばな。

命を漲らせて、鶏鳴がとどろく。

新しい年のはじまりを祝おう。



若松 木瓜 菊

△3頁の花▽ 仙溪

花材 若松(松科)

木瓜(薔薇科)

洋菊(菊科)

花器 標紋黒釉水盤

(矢野款一作)

若松のみどりは初春を言祝ぐの
になんと相応しいのだろう。こ
んなに生命力に溢れた枝をつくるこ
とができる日本の文化に、感謝せ
ずにはおられない。

松と相性のいい朱木瓜と、乙女
のような薄紅色の洋菊を合わせる
と、若松の凛々しさが際立った。





トータムポールのに

仙溪

花材 バーゼリア(ブルニア科)
 アンスリウム(里芋科)
 プロテア・コルダータ
 (ヤマモガシ科)

花器 鍵穴型陶花器

バーゼリアの小枝の表情が気に入ったので小さいければなにしてみた。濃赤色のアンスリウムと、足元には小さな葉物を一本。ハート形の葉をもつプロテア・コルダータは、南アフリカでは「愛の葉」と呼ばれるそうだ。長さが短く、腰が無いので扱いにくい花材だが、この小さいければなには丁度あっている。

バーゼリアも南アフリカの植物。副材としていけると地味な花材だが、足をつけることで高く立てると、主役になって存在感が増す。

3種類の花材を、積み重ねるように入れてみた。前から見ると、花器の形も含めてトータムポールのようだ。異国の花の精霊が、静かに語りかけてくる。

横から見た奥行き





牡丹と蘭

仙溪

花材 牡丹(牡丹科)

オンシジウム(蘭科)

花器 乾山写石垣文陶花器

(森俊山作)

尾形乾山は、寛文3年(1663)京都の富裕な呉服商の三男として生まれ、兄は画家の尾形光琳。野々村仁清に陶芸を学んだのち、元禄12年(1699)37歳のとき京都鳴滝に開窯した。50歳で二条丁子屋町に移住し多くの作品を手がけているが、兄の光琳は絵付で乾山を助け、兄弟合作の作品が数多く残されている。写真の花器は乾山の石垣文を写してつくられたもので、平面デザインを立体化するために面取り技法が使われている。

花器だけ見ていると個性が強すぎて花材に悩んでしまう。ところが牡丹を一枝挿してみると、穏やかな表情に変わり、大輪黄色のオンシジウムを添えることで、器の色彩が生き生きとした。器と花が出逢うことで生まれる美の不思議。

おそらく乾山の皿に描かれた石垣文様も、料理との出逢いで色んな表情に変化しただろう。斬新な意匠は300年前の人達を、あつと驚かせたに違いない。



桃の紅白

仙溪

△10頁の花▽

花材 桃白花(薔薇科)

ラッパ水仙(彼岸花科)

柘植(柘植科)

花器 銚色釉陶鉢

△11頁の花▽

花材 桃(薔薇科)

鉄砲百合(百合科)

スイートピー(豆科)

花器 碧釉陶花器(竹内眞三郎作)

紅白の桃の盛花と投入。

白花の桃の盛花は、洋花のラッパスイセンをいけているが、枯淡な桃の枝振りにあわせてツゲで足元をつくることで、静かな春の訪れを感じる自然調ないけばなになっている。

一方投入は、八重の桃色の花が潑刺と咲く桃の大枝に、薄桃色のスイートピーと純白のテップウユリを合わせて、勢いのある現代調のいけばなにした。

花器の選択も雰囲気に合わせている。品格と華やぎ。男雛と女雛になぞらえて見て頂くのも一興かと。



横から見た奥行き



出逢い花 (28) 仙溪

シーグレイプ (蓼科)

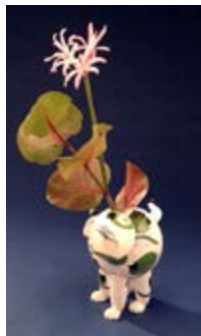
アメリカネス (彼岸花科)

花器 猫形ポット

(ピレロイ&ポツホ製)

21年前ドイツのケルンで「花ふたり旅」撮影のために購入した猫ポット。ネズミの蓋がついている。シーグレイプの丸い葉を見てこの器を思い出した。両親との思い出が詰まった大切な器。今後時々使ってみよう。アメリカネスはアマリスとネリネの交配種。

斜め上から見たところ





名脇役

仙溪

花材 白木瓜(薔薇科)

薔薇(薔薇科)

照り葉椿(椿科)

花器 陶花瓶

伸びやかな枝にくっきりと白い花、鋭い棘もボケの個性を際立たせる。大輪の赤バラと投入にいた。でも硬い枝と柔らかな花だけではちよつとぎくしゃくした感じがする。その間を繋ぐ何かが欲しくなる。この花をいけたのは2月下旬で、ちょうど照り葉のツバキが飴色に色付いていたのでとり合わせてみたら、しつくりと落ちついた。

いけばなのとり合わせを考える時、この照り葉ツバキのような味わい深い名脇役との出逢いは貴重である。主役を引き立てつつ、物語に厚みを与える存在。それを見いだすのもいけばなの楽しみ。

横から見た奥行き



京都東山花灯路2017

仙溪

花材 山茱萸（水木科）

百合（百合科）

花器 陶大壺（主催者所有）

東山花灯路・後期にかけたのはサンシュユと濃いピンクのユリ。野外で5日間、元気に美しく咲いてくれた。藁葺き屋根を背景にすると、山里の春を連想させる。いけさせていた大壺の表面は笹の刻印で埋め尽くされている。京の雅みやびを感じる。





出逢い花 (29)

仙溪

躑躅 (躑躅科)

つっし

おうごんいたやかえで

黄金板屋楓 (楓科)

花器 古陶壺

去年の4月に撮った写真。花展に出品したツツジの生花の残り枝が美しく花を咲かせたので、カエデ一本と出逢わせた。たった二本のいけばなだが、直角に曲がったツツジの横枝が面白く、赤い花と明るい緑の葉の対照が鮮やかだ。味わい深い枝であれば、このように大きな器に付けて、釣り合いのとれる相手を一本探してみるのも楽しい。

器と花と緑 器と枝と花。そういうシンプルないけばなの楽しみ方が、出逢い花には詰まっている。肩の力を抜いて、木や花のあるがままの姿を器に託す。そんな時にふと、見過ごしていた美しさに気付いたりするので。



裏白の木と芍薬

仙溪

花材 裏白の木(薔薇科)

芍薬(牡丹科)

河原撫子(撫子科)

花器 青瓷花瓶(清水卯一作)

花屋ではヤマナシの名前で出回るが、本当の名前はウラジロノキで、春から初夏の緑白色の若葉をいける。また希に秋の実もいけることがあるが、1センチほどの大きさで、リングを小さくしたような赤い果実である。

ウラジロノキとシヤクヤクは相性がいい。作例では茎を深く挿したくて、花が前方へ向いてしまったが、できれば上向きに使用したい。但し充分に水揚げをしておき、さつといける。いけた後も小まめに水切りしたい花材の一つだ。カワラナデシコで華やぎを加えた。



横から見た奥行き



プロテア・メリータイム

仙溪

花材 プロテア・メリータイム

(ヤマモガシ科)

薔薇(薔薇科)

ピットスポルム(扉科)

花器 ガラス花器

新しい花材を使った作例。プロテア・メリータイムは南アフリカ原産。ピットスポルムはニュージーランド原産。



横から見た奥行き



宝鐸草

△2頁の花▽

仙溪

花材 七竈ななかまど（薔薇科）

スイートメモリーほうちやくそウ（百合科）

宝鐸草ほうたつくそう（百合科）

花器 ガラス花瓶

庭のホウチャクソウが年々遅しく育っている。4月末頃の花の盛りに数本切って写真に撮った。

赤いガラス花器に、ナナカマドの若い翠とホウチャクソウの優しいみどり、百合のやや濃い緑が重なって清々しい。薄紅色の花色と花器の透明な赤が、みどりの濃淡を一層引き立ててくれている。

ホウチャクソウは花の後に実が膨らんでやがて黒く色付く。また違ったり合わせて楽しもうと思う。

横から見た奥行き





卯の花

△ 9頁の花▽ 仙溪

花材 卯の花（雪の下科）

芍薬（牡丹科）

花器 赤茶色釉陶壺

花屋ではウノハナ（卯の花）の名前で売られていたが、ウノハナはウツギ（空木）の別名。この小さな花はヒメウツギだろうか、はじめていける花材だ。ごま粒ほどの白い蕾が穂になって枝にびっしりついている。枝は猫の尻尾のようにしなやかに弧を描いて伸びている。枝の動きを生かして、空いた空間にシンブルに芍薬だけを覗かせた。白い小さな花の連なりと、馥郁とした桃色の花。面白い調和が生まれた。

横から見た奥行き





赤と白のユリ

△10頁の花▽

仙溪

花材 ハンギングヘレコニア

(芭蕉科)

百合2種(百合科)

花器 網目文陶花器

(竹内眞三郎作)

ワインレッド色と純白の大輪のユリ。少し前まではこんな色使いをしようと思ってもできなかった。こんな見事な花をつくる人がいることに感謝である。毛の生えたハンギングヘレコニアともよく合っている。器には敢えて色の無いものを選んで、花の色を際立たせた。



宮下先生の器

仙溪

花材 金鎖きんさ(豆科)

宿根スイートピー(豆科)

花器 彩泥陶罍さいでいとうい

(宮下善爾作)

器の底は菱形で、左右の角からは緩やかなS字を描いて立ち上がり、前後の角からは直線が垂直に昇ってゆく。どうすればこんな形がつけられるんだろう。幾層にも重なる彩泥のグラデーシオンは、彼方まで続く山の連なりを縦に切り取ったようだ。

この器を作られた宮下善爾氏が他界されて5年になる。宮下先生(と私達は呼んでいる)はもう居られなけれど、こうして先生の器に花をいけることはできる訳で、そうすると何だかすぐ傍に先生がいるような気がして、変な花でもいけようものなら、辛口の批評をされそうで緊張してしまう。

魂を込めて作られたものには、作り手の気が宿るのだろう。いい器には不思議な力がある。

今回、東京の花展で使っていたのだが、黄色いキングサリが見事によく合っていて評判がとても良かった。宮下先生もきつと喜んで下さるだろう。テキスト用に少しとり合わせを変えて、再びキングサリをいけて撮影した。

金色に輝く空から、仙人が雲に乗っておりてくる、そんな感じの花。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2017年
7月号
No.649

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



太陽がいつぱい

△表紙の花▽

仙溪

花材 ヘリコニア・プシッタコル

ム(里芋科)

向日葵(菊科)

ミリオクラダス(百合科)

花器 ガラス鉢

最近のヒマワリは俯^{うつむ}かないものが多く、前方へ出すことができる。ミリオクラダスでヒマワリを支えた。



横から見た奥行き





トリアシシヨウマ

△3頁の花▽ 仙溪

花材 鳥足升麻(雪の下科)

紫陽花(紫陽花科)

オクローウカの葉と実

(草薺科)

花器 カットガラス花器

トリアシシヨウマはユキノシタ科チダケサシ属の多年草。葉が萎れやすいが、水揚げに充分気をつければ、なんともいえない野性味のある花だ。

オクローウカは葉をよく使うけれど、春の花と、そのしばらく後で希に実も出てくる。ただし、茎が柔らかくて実が重いので、あまり長くは使えない。でも、こちらも野趣を感じる花材だ。

重厚なガラス花器に、鮮やかな濃いピンクの紫陽花と投入した。トリアシシヨウマがよい味を出している。



横から見た奥行き

夏櫨なつはげと檜扇ひおうぎほかの投入

△写真③▽

花材 夏櫨なつはげ（躑躅科）

檜扇ひおうぎ（菖蒲科）

為朝百合ためともゆり（百合科）

桔梗ききやう（桔梗科）

松明花たいまつぼな（紫蘇科）

草連玉くされだま（桜草科）

花器 陶花器（竹内眞三郎作）

祇園祭いけばな展で、大丸京都店にかけた花。ヒオウギは高さを出すために葉蘭で巻いたホルダーに挿している。朱塗りの敷板に白黒のモダンな器。厄除けの花と、色付き始めたナツハゼ。白、青紫、黄、赤の花で雅な祭のいけばな。





ルリタマアザミ

仙溪

花材 アナベル（紫陽花科）

瑠璃玉薊（菊科）

デルフィニウム・ペラドン

ナ（金鳳花科）

花器 白磁花器（福本双紅作）

ルリタマアザミはヨーロッパ原産のエキノプスという多年草の園芸品種だが、朝鮮半島や日本の九州などに分布するヒゴタイ（肥後縣、平江帶）もほぼ同じような花だ。瑠璃色で球形の花は独特の面白さがあるが、瑞々しさに欠けるので、扱いが難しい。

涼しげないけばなにしたくて、マットな表面に仕上げられた白磁の器に、同系色のデルフィニウム・ペラドンナとつけて、緑白色のアナベルで花と器を調和させた。花器のフォルムも軽やかで、青い帽子をかぶる女性のようにも見える。



横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2017年
9月号
No.651

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



青柿とあかまんま

△表紙の花▽ 仙溪

花材 犬蓼いぬた（蓼科）

青柿（柿科）

花器 掛分陶花瓶（竹内眞三郎作）

まだ青い柿の枝が売られていたので、イヌタデをとり合わせて、人里の趣おもむきにいけてみた。カキの葉は分厚く重いため、早くにだらしなく下がってくるが、光沢のある葉は美しく、少しの間でも葉と共に楽しみたい。

カキの葉はビタミンCが豊富で、ポリフェノールの一種であるタンニンが多く含まれ、抗菌・抗酸化作用に優れている。すし飯をカキの葉で包んだ柿の葉寿司は、すし飯を乾燥から防ぐ以外に保存性を高める効果があると言われている。

イヌタデはアカマンマとも呼んで親しまれる。タデのように料理には使われないが、素朴な里の花として、身近に生けて風情を楽しみたい。



横から見た奥行き



横から見た奥行き

姫檜扇ひめひおうぎ（姫檜扇水仙ひめひおうぎすいせん）の実
 ^ 3頁の花 ^ 仙溪

花材 小鬼百合こおにちゆり（百合科）
 姫檜扇の実ひめひおうぎのこぼれ（菖蒲科）

スプレー菊すぷれいぎく（菊科）

吾亦紅われもこう（薔薇科）

花器 竹手付籠

いけばな花材は、古くから変わら
 ずいけられてきたものもあるが、移
 りゆく時代と共に姿を消すものもあ
 る。しかしその一方で、新たに加わ
 るものもあって、そうした新鮮な出
 逢いによって、いけばなの楽しみも
 深まってゆくのだと思う。

ヒメヒオウギは南アフリカ原産の
 ヒオウギスイセンの園芸交配種で、
 園芸ではクロコスミアもしくはモン
 トブレチアと呼ばれ、人気がある。
 その実が切り花で売られていた。人
 の白歯みたいな形がユニークだ。細
 長い葉が涼しげについている。野の
 花をイメージして添える花を選び、
 籠にいけてみたが、風雅ないけばな
 になった。日本と南アフリカの自然
 の合作。



出逢い花 (30) 仙溪

唐胡麻 (燈台草科)

女郎花 (女郎花科)

花器 陶コンボート

紀元前四千年のエジプトの墓から、トウゴマの種子が見つかったという。オミナエシは秋の七草の一つ。東西文化の出逢い花というところか。



横から見た奥行き



菊の季節

△3頁の花▽ 仙溪

花材 雪柳(薔薇科)

菊2種(菊科)

南瓜(瓜科)

花器 銚色釉陶花瓶

今年も菊の季節がやってきた。朝夕が涼しく感じられた9月でも、飛騨マムなど、限られた菊しか手に入らなかったが、10月には糸菊をはじめ、嵯峨菊、肥後菊など、菊の季節ならではの品種が出そろおう。秋の紅葉ものや実ものなどとのとり合わせに、色、形、大きさ、咲き方の様々な種類の中から合わせる菊を選ぶのも楽しみである。

作例は昨年の11月はじめに撮影したもので、いけて数日経ち、菊が見事に大きくなったところ。糸菊などをいける場合は、どのくらいの大きさに咲くのか想像していきたい。

丁度いただいた南瓜と一緒に飾っていたので、撮影にも同じように置いて撮ったが、優しい色合いがよく似合っている。



羽ばたく

仙溪

花材 アレカ椰子(椰子科)

グラジオオラス(瞿蒲科)

モカラ(蘭科)

花器 鱗紋陶コンポート

9月はじめに稽古でいけた花。アレカヤシは夏の花材というイメージがあるが、作例のようにとり合わせる花色によって、秋のいけばなにもなる。

作例ではアレカヤシを背中合わせに立ててみたが、あたかも鳳凰が羽ばたくような造形美が生まれた。そこに赤いグラジオオラスを中央に、オレンジ色のモカラを低く集め、アレカヤシと調和するようにいけている。

アレカヤシには大小があるので、このような姿にいけない時は、大きめで、軸の丈夫なものを求めたい。



横から見た奥行き



オモチャメロン
ククミス

仙溪

花材 オンシジウム(蘭科)

木苺(薔薇科)

オモチャメロン(瓜科)

花器 陶花器(竹内眞三郎作)

このイガイガの実はアフリカ原産で瓜科・胡瓜属の蔓性植物、ククミスの一品種である。花屋には縞模様のあるものなど、数種類のククミスが、オモチャメロンの名前で売られていた。

一つの種類を2個買い求め、実の軸に針金をつけてキイチゴの茎にぶら下げると、自然な感じでいけばなに取り込める。

ククミスが目立つように、シンブルにオンシジウムだけを加えた。キイチゴが紅葉していれば秋らしいいけばなになるなど想像しながら、敷物で季節感を補った。



横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2017年
11月号
No.653

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



カラスウリありがとう

△表紙の花▽ 仙溪

花材 烏瓜(瓜科)

杜鵑草(百合科)

薄の穂(穂科)

花器 陶手付花器

カラスウリを葉がついたまま活けたのは初めてだ。これは丁度テキスト撮影に合わせてお弟子さんが届けしてくれたもの。長い蔓の切り口に水をあて、一本ずつビニールに入れて大切に持って来て下さった。さぞ蔓を外すのに苦労されたと思う。葉はすぐに萎れてしまったけれど、こうして写真に納めることができた。なんと贅沢なことだろう。いけばな冥利に尽きる思いだ。

その後、枯れた葉を取り去って、相手を変えながら、すでに一ヶ月以上いけて楽しんでる。写真では緑色だった実も真っ赤になってきた。カラスウリの種は大黒様の形なのだ。が、そろそろ取り出してみようかな。

横から見た奥行き



創立50周年記念

日本いけばな芸術四国展

テーマ「半世紀の夢を咲かせて」

会期 10月5日(木)～10日(火)
会場 サンポート高松 玉藻公園・披雲閣 栗林公園

桑原仙溪

ヒマラヤ杉
梅擬(マユハケオモト)
陶花器(近藤豊作)



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2017年
12月号
No.654

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



ロイヤルマツカム

△表紙の花▽ 仙溪

花材 躑躅(躑躅科)

水仙(彼岸花科)

小菊(菊科)

花器 陶花器

(ロイヤルマツカム窯)

仙齋&素子の「花ふたり旅」オランダ編で、「野道のお地蔵さんに供えた花のよう」と父が書いているが、牧場の柵に縄で括りつけていたのはこの花器である。デルフト陶器の工房の一つ、マツカム窯で作られたものは、現在ロイヤルマツカムと呼ばれている。

時々、稽古場の柵に飾っているが、和室の雰囲気にも程良く調和してくれる。日本の伊万里を真似て絵付けがなされた歴史を持つからかもしれない。マツカム窯の歴史は古く、1572年創業たそうだ。

はじめて和花をいけてみたが、優しく受け止めてくれた。初冬の仄かな緊張感が心地よい。



横から見た奥行き



ヒムロスギ

仙溪

花材 姫檜杉ひめのすぎ (檜科)

ガーベラ (菊科)

ストック (油菜科)

花器 陶花器 (前田安徳作)

クリスマスシーズンに出回るヒムロスギ。花屋ではサツマズギの名前がついているが正しい名前覚えておきたい。スギと名がつくがサワラの園芸品種で自然分布はない。漢字では姫檜杉あるいは檜檜杉。

灰色がかった葉のふわふわした優しい手触りが気に入っている。相手はアマリリスやガーベラなどのはっきりとした色と形の花がいい。そして赤い敷物。見つけた時に是非とも手に入れておきたい。

心温まるクリスマス！。



横から見た奥行き



ロウヤガキ

仙溪

花材 老翁柿ろうおやがき（柿の木科）

菊「色自慢」いろじまん（菊科）

スプレー菊すぷれいぎく（菊科）

花器 陶花瓶

ロウヤガキの立派な枝が売られていたので、菊と投入してみた。これでも小振りな枝を選んだのだが、花器がひつくりかえりそうなくらい重みがある。長く垂れる枝を上の方から出すために仕掛けを工夫している。

艶やかな花器の質感にロウヤガキの照りがよく似合う。橙色のスプレーギクが実の色に明るさを添え、赤紫色の新種の菊が全体の色彩に鮮やかさを加えてくれた。

ロウヤガキは中国原産で老鴉柿ろうあがきとも書く。別名を衝羽根柿つばねがき。このロウヤガキには鋭い棘があったが、いける際には注意したい。



横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2018年
1月号
No.655

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



清々しい翠 みどり

△表紙の花▽

仙溪

花材 枝若松(松科)

シンピジウム(蘭科)

千両(千両科)

花器 紫紅彩陶花器(幾左田昌宏作)

ワカマツ3本、ラン1本、センリョウ1本のお正月花。紫色の釉葉が美しい花器に、底に置いた剣山に松と蘭をさし、千両は投入でいけた。上品でおちついた雅を感じるいけばなになった。器の色と形で花の雰囲気がいふんと違ってくる。螺鈿らでんの入った敷板がうまく合ってくれた。



横から見た奥行き

寿松 ことぶきまつ

△2頁の花▽

仙溪

花材 寿松(松科)

エビデンドラム(蘭科)

白玉椿(椿科)

花器 耳付陶花瓶(宇野仁松作)

コトブキマツと名の付いた根付き松。短くて濃緑の丈夫な葉が密生している。こんもりした感じ、独特の風情を感じる。鮮やかな色の蘭を合わせると、特別感が増してくる。寿松はキリツと立てて、エビデンドラムはしなやかな動きを出した。西洋的な色と形の器が似合う。白玉椿はつなぎ役。



横から見た奥行き





三賢人のような 仙溪

花材 大王松(松科)

飯桐(飯桐科)

胡蝶蘭(蘭科)

花器 掛分陶花瓶(清水保孝作)

立派なダイオウシヨウを花器の底に入れた剣山を頼りに留め、イイギリを立て、コチヨウランを出した。単純な構成だが、それぞれの特徴が生かされたと思う。

簡単にいけてあるように見えるが、コチヨウランの茎が長くて丈夫でなければ、このようにはいけられない。そして松の重みを受け止めてくれるどっしりした器を選ぶことも大切だ。

ダイオウシヨウはアメリカ原産で特別に長い3本の葉が出る。日本のお正月にダイナミックな華やぎを添えてくれるが、どんなところで育った植物でもいける対象になる。調和する出逢いを生むのは難しいが、考え甲斐がある。

三つの花材が対等な感じにおさまって、三賢人のようだ。



横から見た奥行き



京都嵐山花灯路2017

会期 後期12月13日(水)～17日(日)

会場 二尊院山門前

出品 桑原仙溪

臘梅 アララギ

珊瑚水木 (写真②)



コデマリ

仙溪

花材 小手毬こてまり (薔薇科)

チューリップ (百合科)

玉羊歯たましだ

(玉羊歯科・蔓草土歯科)

花器 陶花瓶

コデマリとチューリップを投入にすると、上がる姿と下がる姿の対比が際立つ。チューリップの花色は2種以上にしたい。



横から見た奥行き



フユイチゴ

仙溪

花材 冬母ふゆいも（薔薇科）

漣油るいゆ（五加木科）

喇叭水仙らっぺいせん（彼岸花科）

花器 陶花瓶

フユイチゴは蔓性の常緑小低木で、地面を這うように枝をのばす。夏から秋に白い花が咲き、冬に実が赤く熟して食べられる。コシアブラの白い枯葉を合わせ、「テイタテイタ」という名前の小さなラップパスイセンを覗かせた。森の春の訪れ。

横から見た奥行き





果物とラン

△3頁の花▽ 仙溪

花材 シンピジウム(蘭科)

晩白柚(蜜柑科)

花器 手付陶水指

南国の蘭をいけて、横に果物を添えたと絵になつてくれる。果物は珍しい品種か、もしくは特別に色鮮やかなものを選びたい。大らかなシンピジウムには晩白柚がよく似合う。

横から見た奥行き





2種でいける

△4頁の花▽ 仙溪

花材 木瓜(薔薇科)

アイリス(菖蒲科)

花器 黒白陶扁壺

良い花材なら、2種の出逢いを生かすいけ方を考えていけてみよう。



横から見た奥行き



横から見た奥行き

黒芽柳と小豆柳
くろめやなぎ あずきやなぎ

△2頁の花▽ 仙溪

花材 黒芽柳(柳科)

小豆柳(柳科)

アネモネ(金縷花科)

花器 ガラス花器

2種の柳を混ぜていけるのもいいものだ。アネモネが良く似合う。



ヤマボウシ

仙溪

花材 山法師(やまぼうし) (水木科)

アリウム・ギガンチウム

(百合科)

擬宝珠(ぎぼし)の葉 (百合科)

花器 陶花器 (前田保則作)

昨年6月にアメリカのヨセミテ国立公園を訪れたとき、野生のハナミズキの純白の花に迎えられた。花の時期は過ぎていたが、葉が茂る中心ときわ大きく咲いた花は神々しかった。

ヤマボウシはハナミズキの近縁種で、日本の山の谷間に生える。中心の花を法師の頭に、白い総苞を頭巾に見立ててこの名がある。やはり神聖な雰囲気の花である。

ギガンチウムを人と見ると、花山に分け入る山法師というところか。



ヨセミテ公園のハナミズキ



横から見た奥行き

京都東山花灯路

「いけばなプロムナード」

前期 3月9日(金)～13日(火)

会場 春光院前

出品 桑原仙溪

青い惑星のような丸く大きな器に、赤花のカラモモ(唐桃)の太枝をいけた。以前、西吉野の花木の産地を見学した時に、低く横に手を広げるようにカラモモが育っていた。普通の桃と違って、枝がごつごつした感じである。いつもは瑞々しい葉をもつ花を合わせるのだが、今回は敢えて一種でいけてみた。唐桃一色というところか。





山茱萸とアマリリス

仙溪

花材 山茱萸（水木科）

アマリリス（彼岸花科）

花器 陶花器

上級者向けの稽古の見本にいった投入。何日か経って花が咲いたところを写真に撮った。蕾の時には無かった華やきが感じられる。

山茱萸は太くて力強い枝だったが、合わせたアマリリスも負けていない。原産地こそ東アジアと南アメリカで異なるが、どちらも春の花同士なので違和感はない。

アマリリスの花の茎は空洞なので、茎よりも長い割り竹を入れて支えにしている。

2種だけでいけるには、花器の口元をどう見せるかがポイントとなる。

横から見た奥行き





花器の選択

仙溪

花材 オクロレウカの葉(菖蒲科)

アイリス (菖蒲科)

宿根スイートピー (豆科)

花器 紺色釉陶鉢

紺色の鉢がうまく合ってくれた。この花器は父も好きでよく使っていたが、花の色彩を鮮やかに見せてくれる。また葉の緑も優しく感じられる気がする。器によって花の印象は違ってくる。

土っぽい自然な風合いの花器に比べると、花は素朴な自然の表情を見せてくれる。また、艶の有る釉薬の施された器に比べると、少し余所行ききの表情になる気がする。そしてその色によっても味わいが変わる。

自分が表現したいのは何か。どんな味わいのいけばなのかをはっきりさせて、それに合った器を選びたい。

紺色の器に黄色のアイリスが映える。宿根スイートピーは別の木の枝で支えていけている。

横から見た奥行き





イの様だった。ヒヨウタンボケの間から溢れる様に咲くフワフワのジバーナムが印象的ないけばなだった。

シヤガの葉

△2頁の花▽ 仙溪

花材 アガパンサス(ひがんぼな) (彼岸花科)

薔薇(ぼら) (薔薇科)

菖菘(しやが)の葉(あやめ) (菖蒲科)

花器 粉引陶花器 (伊藤典哲作)

シヤガの葉には独特の美しさがある。作例のようにシヤガの葉を伸び伸びとつけて、優しい雰囲気の花を添えると、その花の葉のように見えて自然な感じになる。

白花のアガパンサスと赤いバラだけでもいけられるけれど、そこにシヤガの葉が加わるとより生き生きとして見える。そんな効果を狙う時は、投入で前方へ張り出し、高さをおさえるようにすること。そうするとシヤガの弾む動きが生きてくる。



横から見た奥行き

ルピナス

△3頁の花▽ 仙溪

花材 ニューサイラン(竜舌蘭科)

ルピナス(豆科)

リュウココリーネ(百合科)

花器 赤ガラス花器(ウルリカ・

ハイドマン・ヴァーリン作)

ルピナスの仲間には南北アメリカ、地中海沿岸、南アフリカに200種以上が分布するマメ科の植物で、その姿からハウチワマメ(葉団扇豆)、ノボリフジ(昇り藤)などの和名がある。花穂が立派なラッセルルピナスという品種がよく花壇に植えられるが、切り花で華奢な品種のルピナ

スを見つけたので初めていけてみた。葉の水揚げはいいとは言えないが、青に赤がのぞく花色が美しい。不思議な絵のガラス器に個性的な花と葉を3種とりあわせていけると、何やらガラス器の絵たちが踊り始めそうな気配。花と器で物語が出来るが、そんないけばな。



横から見た奥行き



ウルリカさん

これは、両親と1993年にスウェーデンを訪れ、コスタボダ社の専属ガラス作家であるバリーン夫妻のお宅に招かれた時の写真だ。バリーン氏とウルリカさん、そして両親と、言葉はなくてもお互い表現者同士、自然に気持が通じ合っているのを傍に感じていた。バリーン氏のガラス作品は神秘的な美しさ。ウルリカさんの描く不思議な人や動物たちは、奇妙だけれど温かな愛に溢れている。彼女の器は、想像し表現することの大切さを教えてくれる。

交流の中で色々なエピソードを思い出す。そんなウルリカさんが先月亡くなられた。謹んで哀悼の気持ちを届けたい。





出逢い花 (32) 仙溪

ベル鉄線 (金鳳花科)

利休草 (百日科)

花器 手彫磁器 (南繁樹作)

この花は最初に花器を決めていた。幾何学的な手彫り模様が美しい磁器で、口を尖らせた白い果実のようだ。小さな口でもいけられる茎の細い花材を探しに花屋へ行った。

まず木立性のベルテッセンを見つけたが、出逢わせる相手が難しい。出はじめたばかりのリキュウソウにふと目が止まる。

リキュウソウもかなり茎が細い。本来の名前はジャクブ (百日)。中国原産の蔓性の多年草で薬用植物の一つである。夏でも元気に水揚げしてくれる丈夫な切り花として生産が増えてきているようだ。

リキュウソウの葉の茂みがベルテッセンを支えてくれる。よく見ると小さな花が咲いている。ベルテッセンと同じ4弁花だ。偶然の出逢い。



横から見た奥行き



キヤスケードタイプ

仙溪

花材 薔薇(薔薇科)

キヤスケード・シンビジウム

ム(蘭科)

アスパラガス・スプレング

リー(百合科)

花器 陶花瓶(加藤敏雄作)

この枝垂れた蘭は、キヤスケードタイプのシンビジウムで、途中で曲がった長い茎に10輪ほどの花が程良い間隔についている。なんとも優美な姿である。

キヤスケード(カスケード)とは階段状に連続する滝を意味し、滝状に垂れた姿を表す言葉になっている。花嫁が手に持つのはキヤスケード・ブーケ。懸崖菊もキヤスケードタイプと訳される。

蘭の色が引き立つように青い花器を選び、大輪咲きの赤バラを合わせ、スプレングリーで両者を繋げた。

横から見た奥行き





うけざきおやまれんげ
受咲大山蓮華

仙溪

花材 受咲大山蓮華 (木蓮科) もくれん

姫百合 (百合科)

花器 青白磁花瓶 (市川博一 作)

めったにいけられない花材にオオヤマレンゲがある。奈良県南部の太峰山たかねに自生し、香りの良い白い花を横向きもしくは下向きに咲かせる落葉低木。花の大きさは5〜10センチ。水揚げが難しく、お茶席で小さく一種いけにされる貴重な花だ。

もう少し大型の花が上向きに咲くのはウケザキオオヤマレンゲである。こちらは中国原産の落葉高木で、ホオノキ (朴木) とオオヤマレンゲの雑種だそうだが、稀にいけばな花材としてオオヤマレンゲの名前で売られている。

作例は太枝だったので長く保つてくれて、後ろに見える蕾も咲いてくれた。一種では寂しいので、姫百合をとり合わせ、深山の香りを楽しんだ。

横から見た奥行き





華鬘草けまんそう

仙溪

花材 クレマチス・エレガフミナ

(金鳳花科)

華鬘草けまんそう (罌粟科)

花器 銀彩陶花器 (森野泰明作)

ケマンソウは中国原産の多年草。花の形が団扇の形をした仏堂の荘嚴具、華鬘けまんに似ることから名前がついた。でも、別名のタイツリソウ(鯛釣草)の名前の方が馴染み深いかもしれない。

そして濃い紫色小輪のテッセンはクレマチス・エレガフミナ。繊細な茎の先に次々に花を咲かせる、エレガントな花だ。

銀色の滝のような、爽やかな瑞々しさを感じる森野さんの小品花器に、この2種の花を挿した。どちらも普段はあまり見かけない花同士。こういう粋な器が似合う。

横から見た見た奥行き



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2018年
7月号
No.661

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





ギガンチウム

△表紙の花▽ 仙溪

花材 アリウム・ギガンチウム

(百合科)

アンズリウム(里芋科)

モンステラ(里芋科)

花器 結晶釉深鉢(前田保則作)

よくあるとり合わせだが、器の高さを利用してモンステラを前面に出し、アンズリウムの茎を葉の後ろに隠すようにいけることで、花が浮いているようにいけてみた。紫の玉が水色の器に映える。器の丸い結晶模様が見え隠れする。

横から見た奥行き





京都いけばなプレゼン
テーション2018

△9頁上の花▽ 桑原仙溪

花材 太藪(蚊帳吊草科)

ゴールデンココ椰子

(椰子科)

アランセラ(蘭科)

糸芭蕉枯葉(芭蕉科)

モンステラ(里芋科)

花器 陶大水盤(ザールバーグ作)

△9頁下の花▽ 秋山慶淑

花材 ストレリチア(芭蕉科)

ニューサイラン(竜舌蘭科)

花器 白黒陶花器(竹内真三郎作)

「すこいゾ!いけばな 華道家によるフェスティバル」と題して、花展に加えて様々なイベントを行いました。大先生も若手も、いけばなの魅力を伝えたいという思いは同じ。そしてアクションによって自分達の経験値も上がる。ご来場の皆さんがいけばなを始めて下さいますように。



エレムルス

△2頁の花▽ 仙溪

花材 エレムルス(百合科)

ドラセナ・コンシンネ(竜
舌蘭科)

プロテア(ヤマモガシ科)

花器 陶花器

砂漠のキャンドルとも呼ばれるエレムルス。中央アジア西部原産で乾燥に強い。丈夫そうな葉と花を出合わせて、夏を元気に乗りきりたい。

横から見た奥行き





ニューサイラン2色

△3頁の花▽ 仙溪

花材 ニューサイラン2色

(竜舌蘭科)

ネオレゲリア

(ハイナツプル科)

花器 真鍮花器

チヨコレイト色のネオレゲリアと2色のニューサイラン。観葉植物だけでとり合わせた。それぞれの色や質感が、より印象的になる。金属花器がその印象を際立たせてくれる。

横から見た奥行き





羽毛鶏頭うもうけいとう

△ 4頁の花▽ 仙溪

花材 ユーカリ (フトモモ科)

羽毛鶏頭 (苺科)

ヒペリカム (弟切草科)

花器 陶コンポート

夏から秋の作例。ケイトウは種類が多い。トサカ、クルメ、ウモウ、ヤリ、ヒモ、それぞれ形状が異なり印象も違ってくる。

横から見た奥行き





紅花 べにばな

△10頁上の花▽ 仙溪

花材

木苺 きすち (薔薇科)

透かし百合 (百合科)

紅花 (菊科)

花器

陶花瓶 (伊藤典哲作)

ベニバナはエジプト原産で紅色染料として4〜5世紀に渡来した。先端の花を集めて利用するので、未摘花と呼ばれた。

スカシユリの黄色とよく似合う。

横から見た奥行き





祇園祭にいける

△10頁下の花▽ 仙溪

花材 七竈（薔薇科）

檜扇（菖蒲科）

鉄線2色（金鳳花科）

花器 焦茶色陶水盤

今年「京料理 田ごと本店」に
躍動感のある立派なヒオウギをいけ
た。ナナカマドの紅葉と白と紫の
テッセン。猛暑の中でも元氣な花で
お迎えを、の気持ちを込めて。



たいまつばな
松明花

仙溪

花材 山帰来 (百合科)

鶏頭 (苜蓿科)

松明花 (紫蘇科)

花器 陶花瓶

この赤い花は、タイマツバナ、モナルダ、ベルガモット、どの名前でも呼ぼうか迷ってしまう。あと、ヤグルマハツカとも呼ぶ。北アメリカ原産のシソ科の多年草で、ハーブティーなどに利用される。赤花の他に白、紫、ピンクなどの花色がある。去年も今年も、ちょうど祇園祭の頃にいけている。夏祭りの活気に、赤い炎のような花がよく似合うが、この伸びやかな姿は、特別に栽培されたものである。力のある花はいいものだ。

竹の根株のような花器にサンキライ、ケイトウ、タイマツバナをいけた。自然の伊吹に元気をもらえらる。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2018年
9月号
No.663

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



ギザギザの葉

△表紙の花▽ 仙溪

花材

飛竜羊歯ひりゅうじょうしだ (獅子頭科)ししがしら

鉄砲百合てつぱうりく「美白」びやく (百合科)

クルクマくるくま (生姜科)しょうが

花器 陶鉢 (市川博一作)

このギザギザの葉はヒリュウシダの名前で売られていたが、確かな事は分からない。とても繊細な造形だが丈夫で長く保つてくれた。葉の面を前に向けて繁みをつくり、ユリとクルクマを覗かせた。葉に合わせて幾何学模様の器を選んだ。

横から見た奥行き





ベルギーナッツ

△4頁の花▽ 仙溪

花材 ユーカリ・ベルギーナッツ

(フトモモ科)

トルコ桔梗2種 (竜胆科)

花器 陶花瓶

このユーカリの実にはベルギーナッツと呼ばれている。ドライの実として見たことはあるが、珍しく葉のついた生の切り枝で売られていた。面白い花材だが色が地味なので、紫と白のトルコキキョウをとり合わせ、ブルーの西洋的な花瓶にかけた。

ユーカリは小枝だが実はかなり重い。その重量感とバランスがとれるようにトルコキキョウをいけている。一重咲きを軽やかに高くして、八重咲きを花器の口元に集めるのがポイント。白花がよく効いてくれた。ユーカリは種類が多く、花も実も個性的だ。今後も新たなユーカリとの出逢いを楽しみにしている。

横から見た奥行き





菊の季節がやってきた

△3頁の花▽ 仙溪

花材 糸菊3種(菊科)

白菊(菊科)

スプレー菊4種(菊科)

花器 陶水盤

菊は中国で生まれ古く日本に渡ってきた花だが、その後さまざまな品種が日本で生まれ、今では世界各地で新品種が生まれている。冬に向かって多くの植物が眠りにつこうとする時に、色鮮やかな花を私達に見せてくれる菊。数種類の菊を集めて、菊の季節がやってきたことを喜びたい。



珊瑚樹 さんごじゆ

△ 4頁の花▽ 仙溪

花材 珊瑚樹(木犀科)

菊2種(菊科)

花器 陶花器(竹内眞三郎作)

サンゴジュはスイカズラ科、ガマズミ属の常緑高木で、日本から東南アジアにかけての温帯〜亜熱帯に自生する。燃えにくいため防火樹として庭木や生垣に用いられている。白い小花が集まって咲いたあとでできる赤い実を珊瑚に例えての名前。実は黒く熟して落下する。

常緑樹なので艶のある濃い緑の葉が密生している。綺麗な葉を残して少し整理し、赤い実が目立つようにした。かなり重みがあるので安定のいい花器に投げ入れ、純白と薄紅色の洋菊を加えて、明るく現代的な雰囲気にとめてみる。

横から見た奥行き





京都文化力プロジェクト
KYOTOアート6
芸術めぐり・いけばな展
会期 9月22日(出)〜24日(閉)
会場 市民交流プラザふくちやま
出品 桑原仙溪 (写真①)
いけばな、工芸、写真、書、彫刻
日本画の6つのジャンルの優れた作

品を紹介するイベント。
書道家の白井進先生がライブで
「風」の字を書かれ、その前に即興
で花をいけた。他流の先生方の花
にも心地よい風が吹いていた。



世界竹の日記念
竹に触れ、竹を知る
会期 9月17日(月)
会場 京都新聞文化ホール
插花 桑原仙溪 (写真②)
9月18日は世界竹の日だそうだ。
それを記念してイベントが開催さ

れ、親子竹籠づくり教室や「日本人
の暮らしと竹」をテーマにした講演
会、篠笛の演奏、竹の種類や竹製品
の紹介などがあつた。
水盤に孟宗竹を立て、紅葉した七
竈 赤と橙の鶏頭、鳥兜をいけた。



七竈 ななかまど

△11頁の花▽ 仙溪

花材 七竈(薔薇科)

竜胆(竜胆科)

スプレー菊(菊科)

花器 陶花器(宇野仁松作)

信州の高山では9月中頃からナナカマドが少しずつ色付き始める。緑色から赤色へ染まってゆき、色どりの錦の織物にたとえられるような錦秋を迎える。

そんな季節の色彩を、山へ行かずして味わうことが出来ることに感謝せずにはいられない。いけばなは目で味わうご馳走なんだから。

ナナカマドの優しい色付きに赤紫色の lindow をとり合わせて同系色の花瓶にいけ、スプレーギクの黄色で減り張りをつけた。

横から見た奥行き





出逢い花 (33) 仙溪

キングプロテア(ヤマモガシ科)
グレビレア(ヤマモガシ科)

花器 黒釉花器

前号では4種類のヤマモガシ科植物をいけているが、今回また違うヤマモガシ科の花を2種出逢わせてみた。

ヤマモガシ科の植物は南米、南アフリカ、インド、オーストラリア、ニューカレドニア、ニューギニアなどに分布している。これらはかつて Gondwana という大陸として繋がっていた地域だ。

この科にはプロテア、ハンクシア、マカダミアなど60属以上、約一千種の植物が含まれるそうだ。原産地域では身近な自然として親しまれ、文化の背景にもなっているのだろう。そんなことを考えながらいけた。

横から見た奥行き



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2018年
11月号
No.665

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



小鳥の耳

△表紙の花▽ 仙溪

花材 鴨上戸の実ひよどりじょうこ（茄なす子科）

ガガイモの花ガガイモ科

薄の穂すすも（稻科）

花器 銅花器

鳥の耳がついた銅器に二種類の蔓植物をいけた。写真に撮ると、赤い実を食べにやつてきた小鳥に見える。花をいけると物語が出来上がる。そんな器の一つだ。ハート形の葉はガガイモの葉で、小さな星型の花が咲いている。小鳥目線のいけばな。



横から見た奥行き



ピンク色の実

△3頁の花▽ 仙溪

花材 真弓の実まゆみ(錦木科にしきぎ)

菊2種きく(菊科)

花器 三角錐陶花器さんかくすい(倉下善爾作)

マユミの実をはじめて見た時、なんて可愛い色をした実なんだろうと思っただ。とても優しい薄紅色である。ピンクの二輪菊と金茶色の菊を合わせて季節を味わうことにした。



横から見た奥行き



京都市自治記念式典
オープニングパフォーマンス
会期 10月15日(月)
会場 京都ロームシアター
曾和鼓堂さんの小鼓とのセッションで舞台で花をいけた。(写真⑧)



広がりと集まり

△11頁の花▽ 仙溪

花材 錦木(にじぎ) (錦木科)

スプレー菊(きく) (菊科)

花器 陶花瓶 (市川博一作)

ニシキギの葉が緑色から赤色へ染まっている。敢えて面で見せて扇状に広げたところに深い赤色のキクを集めて挿した。ニシキギの葉が俯(うつむ)かないように気をつける。



横から見た奥行き



フエゴという名の菊

△2頁の花▽ 仙溪

花材 寒桜(薔薇科)

菊(菊科)

小菊(菊科)

花器 陶コンポート

この大輪菊の名前は「フエゴ」。赤と黄色のコンビネーションが見事だ。花も葉も強くて美しい。花付きのいい寒桜を合わせると、互いに補い合い引き立て合ってくれた。

横から見た奥行き





南天・水仙・寒菊

△3頁の花▽ 仙溪

花材 南天(目木科)

水仙(彼岸花科)

寒菊(菊科)

花器 青瓷壺(清水卯二作)

常緑で赤い実が美しいナンテンは冬のにけげなな特別感を与えてくれる。辛い時も、難を転じて福となす。



横から見た奥行き



ヤドリギ

仙溪

花材 宿り木 (ビャクダン科)

パンダ (蘭科)

菊 「アナスタシア」 (菊科)

花器 陶花器 (竹内眞三郎作)

冬になると葉を落とした高木に丸い繁みが絡みついていることがある。この不思議な景色の正体はヤドリギで、鳥がこの実を食べ、糞を木にこすりつたところに根を生やして寄生する。冬にも枯れない生命力から西洋では神聖視されて、ヤドリギのついた木には神が宿ると考えられた。悪いものから子供を守る魔除けにもなる。

恋人同士がヤドリギの寄生した木の下でキスをすると神の祝福を受けられるとも、敵同士が出会うと争いをやめるとも言われている。

新しい年の始まりに、良い年となることを願って、ブナの木についた大きなヤドリギを洋菊と蘭をとり合わせていけた。

横から見た見た奥行き





白梅の盛花

△2頁の花▽ 仙溪

花材 白梅(薔薇科)

アイリス(菖蒲科)

小菊(菊科)

花器 四彩塗方面取高坏(河井透作)

今月号には4作に白梅を使っている。この頁の盛花と10頁の立花は稽古用の比較的若い枝で、4頁の大作投入と11頁の生花は苔のついた花展用の古木だ。4つの梅のいけばなを見比べると、生花の梅が一番梅らしさが感じられる気がする。梅らしきのポイントは大い幹と細い枝の対比にあるようだ。

この白梅の盛花にも、太い梅の苔木を低く重ねて出していれば、さらに風情のある景色になっただろう。その木本来の「らしさ」はどのようによれば表現できるかを考えること。今回の4つの梅のいけばなから、改めて気付かされた。



横から見た奥行き



枝物 4 種

「ジャパンスピリッツ in 京都」

仙溪

花材 松（松科）

白梅（薔薇科）

南天（目木科）

椿・紅白（椿科）

花器 焼締陶花器（竹内眞三郎作）

場所 京都駅ビル グランビア前

この花器は板状にした土を丸めて細い筒を作り、それを並べてつないだもので作つてあるのでとても重い。大地のような、巨木のような、そんな印象の器だ。敢えて草花を使わずに枝物 4 種でまとめたが、大きな枝を器が軽々と受け止めてくれた。



嵐山花灯路 桑原仙溪 飯桐 枝垂柳 洋菊2種 栴



紅柘植（紅黄楊）

△4頁の花▽ 仙溪

花材 雪柳（薔薇科）

紅柘植（柘植科）

喇叭水仙（彼岸花科）

花器 溜塗木鉢

三重県鳥羽市菅島すがしまの南斜面に群生するベニツゲは、冬に紅葉する珍しい品種で市の天然記念物となっている。艶やかな厚みのある丸い葉が密生するツゲは、「立花時勢粧」でも「立花第一の景物」とされ、伊勢浅間に紅葉するツゲがありこれを女つげと云う、と書かれている。

紅葉といっても黄土色から赤茶色の地味な色なので、ユキヤナギの明るい白とラッパスイセンの黄色をとり合わせて春を感じる盛花にした。

横から見た奥行き





花桃 はなもも

仙溪

花材 桃 (薔薇科)

菊 (菊科)

花器 紫檀色釉花瓶

いけばな花材として生産されるのは矢口桃やぐちももという八重咲き品種が多い。産地では早くに枝を切って束にして水揚げをし、出荷する日に合わせ、遮光した20〜25℃の室(むろ)に約1週間置く「ふかし」を行う。空調や温度、湿度の管理が難しい。

「立花時勢粧」には「枝ぶり素直にしてはたらきなく・・・かわりたる花形も出来ざるものなれど」と書かれていて、桃を真にした立花には曲がりのある伊吹と優雅に枝垂れる山吹を加えている。

現代の盛花や投入では桃の素直さを生かしつつ、枝の勢いと花の優しい美しさを引き出したい。

桃と菊はどちらも中国生まれの日本育ちなので相性がいい。素直に両者を投入にした。

横から見た奥行き





シデコブシ

仙溪

花材 幣辛夷(木蓮科)

シンビジウム(蘭科)

花器 天目釉壺

普通のコブシよりも細長い花弁を注連しゆめ繩なはに吊す幣は(紙垂)に見立てた名前。白花の他に薄紅色の品種がある。コブシは6弁花だがシデコブシはもっと多くて花により枚数が違う。黄色の蘭とすつきり2種でいけて、春の訪れを感じる投入に。



横から見た奥行き



ピオットの陶器

△3頁の花▽ 仙溪

花材 オクロレウカ(菖蒲科)

鉄線4種(金鳳花科)

花器 緑釉陶鉢(フランス製)

この緑の陶鉢はフランス製。表紙の紺色の陶鉢も同じで、刻印から



調べるとピオットの陶器だとわかった。ピオットは南仏ニースとカンヌの間に位置する街で、古くから製陶で栄えたが、今はガラス工芸も加わっている。

この2つの陶鉢は父・仙齋が好んで使っていた。父がいきたい花をすんなり受け止めてくれる不思議な器だ。たつぷりとしたモダンないけなさがよく映る。

横から見た奥行き





シャルロット

仙溪

花材 虫狩(忍冬科)

ランンキユラス(金鳳花科)

花器 陶花瓶

洋菓子にシャルロットというのが
ある。女性の帽子に見立てたケーキ
で、パン、スポンジケーキ、ビスケッ
ト、クッキーなどを型の内側に貼り
付け、その中にフルーツのビュレや
カスタードなどを詰めて冷やしたも
のである。ランンキユラス・シャル
ロットもケーキのシャルロットのよ
うに、女性がときめく夢のような花
である。

沢山の花をつけた立派なムシカリ
を見つけたとき、ランンキユラス・
シャルロットと出会わせてみたいと
思った。山育ちの青年と都会育ちの
令嬢の組み合わせ。微妙な緊張感
がただよるのはつなぎ役の緑を加えそ
こねたからだろうか。

横から見た奥行き





シロバナハナズオウ

△10頁の花▽ 仙溪

花材

白花^{しろはな}花蘇芳^{はなすおう}（豆科）

芍薬^{しやくやく}（牡丹科）

鳴子百合^{なるこゆり}（百合科）

花器 市松文陶花瓶

ハナズオウは葉が出る前に赤味を帯びた紫色の花を枝いっぱいにつける。春のいけばな展でときどき使われているが、普段の稽古にはあまり出てこない。白花の品種にはあまりをとり合わせて投入にした。

スオウとハナズオウは同じマメ科ではあるが別の植物である。スオウからは黒みを帯びた赤色の染料が採れ、この色を蘇芳色^{そうほういろ}と呼んでいる。ハナズオウの花は枝に直接つくので、枝全体が赤紫色に染まってしまう。花色は蘇芳色というよりもスオウで明るめに染めた布の色に近い。スオウで染めた布を枝にまといているみたいな木ということだろう。

ハナズオウはマメ科・ハナズオウ属の落葉低木で中国原産。スオウはマメ科・ジャケツイバラ属の小高木でインド、マレー半島原産。スオウは古くに渡来しており奈良時代以降、貴族や僧侶の衣服を彩ってきた。もうすぐ行われる皇位継承の儀式でも、スオウで染めた衣を身につけられるかもしれない。



シヤクヤク

△11頁の花▽ 仙溪

花材 満天星（躑躅科）

芍薬2種（牡丹科）

花器 染付花瓶

春のいけばなにシヤクヤクは無く
てはならない存在になってきた。暑
さに弱く、水揚げもいとは言いが
たいが、大輪種も小輪種も丈夫で美
しい品種が出て来るようになった。
葉のしつかりした品種なら緑の枝も
のとシヤクヤク2種でいい。葉がた
よりなければナルコユリなどで緑を
補いたい。

シヤクヤクはボタン科・ボタン属
の多年草で中国北部、朝鮮北部原
産。日本へは古く生薬として渡来し
ている。英名はピオニーで、ギリシャ
神話の医の神ペオンに由来するが、
ギリシャ神話に登場する花がシヤク
ヤクだったかは定かでは無い。

ドウダンツツジと芍薬は相性がいい。

横から見た奥行き





五月梅 さつきばい
撫子 なでしこ

〱2頁の花〱 仙溪

花材 五月梅(雪の下科)

撫子(撫子科)

花器 青磁花瓶(加藤敏雄作)

サツキバイとナデシコを大らかに投入にした。青磁の花瓶にいけると5月の爽やかな風を感じる。サツキバイは水切りし、足元をよく割っておく。

横から見た奥行き





京都東山花灯路2019

仙溪

会期 前期3月8日～12日

会場 円山公園枝垂れ桜前

花材 連翹(木犀科)

雪柳(薔薇科)

エビデンドラム(蘭科)

花器 陶花器

力強いレンギョウの太枝は強風にも耐えて5日間精一杯咲いてくれた

第70回 華道京展

テーマ 「始まりは今、華道」

会期 4月4日(木)～9日(火)

会場 大丸ミュージアム(東京都)



【 流派席 前期展 】

桑原仙溪㊦

陶芸作品コラボ(家山美祈作) 山帰来の根 鉄線5種 赤色ガラス花器



【 流派席 後期展 】

桑原仙溪㊦

陶芸作品コラボ(家山美祈作) 晒木 チランドシア2種



落葉松と芍薬

仙溪

花材 落葉松 (松科)

芍薬 2種 (牡丹科)

花器 煤竹手付籠 (公長斎小菅)

カラマツの芽吹きを初めて見たとき、イソギンチャクのようなだと思っただ。なんとも愛らしい姿である。カラマツの生まれたての若葉を見守るように、濃赤色と薄紅色のシヤクヤクを添えた。飴色の籠が優しく受け止めてくれている。

横から見た奥行き





はなしょうぶ
花菖蒲

卯の花

△2頁の花▽ 仙溪

花材

花菖蒲 (菖蒲科)

卯の花 (雪の下科)

花器

手付花籃 (箕浦竹車作)

水盤でいけることが多いハナシヨ
ウブだが、籠に上品に納まってくれ
た。





オウゴンミズキ

△3頁の花▽ 仙溪

花材

おうごんぼとぎみずき
黄金葉土佐水木 (満作科)

しやくやくぼたん
芍薬 (牡丹科)

ミリオクラダス (百合科)

花器 面取陶花瓶

色彩は花色だけではない。葉色の
美しさもいけばなの大切な要素だ。





ギガンチウム

△2頁の花▽ 仙溪

花材 アリウム・ギガンチウム(百

合科)

グロリオサ(百合科)

アルストロメリア(・・科)

花器 ガラス花瓶(スウェーデン)

赤と白で紫の鮮やかさが増した。





京都美風

新しき次代 いけばな展

第4期

(写真③)

会期 5月18日(土)～24日(金)

会場 京都駅ビル2階広場

出品 桑原仙溪

花材 オクロレウカ (菖蒲科)

アンスリウム (里芋科)

ジャングルフッシュ (里芋科)

芋科)

花器 陶大水盤 (ザールバーグ

作)

新元号を祝し、京都駅でのイベントに花を添えさせてもらった。



日本ポーランド国交樹立

100周年記念現代美術展

オープニングセレモニー

会期 5月18日(土)

会場 二条城二の丸御殿唐門前

插花 桑原仙溪

花材 大手毬 (忍冬科)

グロリオサ (百合科)

花器 陶花瓶 (竹内眞三郎作)

日本とポーランドは国旗の色が同じだ。赤と白の花に両国の友好と祝賀をこめた。(写真④)



水生植物

仙溪

花材 太蘭 (蚊帳吊草科)

糸芭蕉 (芭蕉科)

アランセラ (蘭科)

花器 陶水盤

豊を編む材料となるイグサ科のイグサ (蘭草) も、そのイグサに似るカヤツリグサ科のフトイ (太蘭) も水生植物である。

水中や水辺に生える水生植物は、その生育環境により5つに分類されている。

湿地植物…ミズバショウ、イグサ、サワギキョウ、サギソウなど。

抽水植物…アシ、ガマ、ハス、フトイ、カキツバタ、ミスアオイなど。

浮葉植物…スイレン、アサザ、ヒシなど。

浮遊植物…ホテイアオイ、ウキクサなど。

沈水植物…バイカモ、クロモ、セキシヨウモなど。

イグサ以外にもフトイやガマは編んで筵や敷物に、アシは簾に利用されてきた。ハスの蓮根やヒシの実には食用に。水生植物と人の関わりは多岐にわたる。





ホワイトレースフラワー

仙溪

花材 ニューサイラン(竜舌蘭科)

薔薇(薔薇科)

レースフラワー(芹科)

花器 陶コンポット

ホワイトレースフラワーは地中海沿岸原産の初夏の花だ。日本のセリ科植物とよく似ている。夏のいけばなのアクセントに。





粉青沙器にいける

〈4頁の花〉 仙溪

花材 矢筈薄(稻科)

山紫陽花(紫陽花科)

花器 粉青沙器(崔龍熙作)

親の親の親がどんな人物だったのか、そんなルーツを調べて教えてくれるテレビ番組がある。ご先祖様の生きざまを知り、もっとも大切な事に改めて気付くのだ。

アートの世界でも自分のルーツとどのように関わるかは大きな問題だ。崔龍熙さんは京都の近藤高弘氏のもとで修行した後、今は自身のルーツである韓国の粉青沙器を研究されている。粉青沙器は李氏朝鮮時代前半に生まれた焼き物で、のちに白磁が作られたすと姿を消すが、日本では「三島」「刷毛目」「粉引」などと呼ばれて珍重され現在に至っている。崔さんは本来の制作技法にこだわることで、韓国の焼き物のルーツを辿り始めた。

彼の作品に季節の花をいけてみた。拙いけれど素材で初々しい花になった。





京都いけばなプレゼンテーション
2019
やっばりすごいゾー！いけばな
小品いけばな展

会期 6月7日(金)～10日(月)
会場 京都芸術センター

桑原仙溪 (写真⑤)

花材 乙女百合
おとめゆり

紅葉唐松
もみじからまつ

白花薔
しろばら

満天星の枯枝
まんたんのこし

花器 ガラスの鳥(フィンランド製)

ミニガラス花器(鈴木玄太作)

ガラスの鳥に小さな器を背負わせると
置物が花器になる。物語を想像して
もらえれば。



ガラス器にいける

△12頁の花▽ 仙溪

花材 トルコ桔梗(竜胆科)

斑入虎杖(蓼科)

花器 ガラス花瓶(ヨーラン作)

フイリイタドリの葉が涼しげだったので鉢植で求め、一重のトルコキキョウと2種でいけた。流水を形に留めたような器はスウェーデンのガラス作家によるもので、器の中に花の茎を極力見せないようにいけている。器の個性が生きたいければなを指したい。





十三世の花器

△2頁の花▽ 仙溪

花材

アンズスリウムの葉(里芋科)

紅の木の实(紅の木科)

オンシジウム(蘭科)

花器 陶花器

先々代が買い求めた花器の中では、かなり大きな部類の一つ。とても重いので花展に使うこともほとんどなかった。以前の「テキスト」に使われていないか調べてみたが、43年前に京都朝日会館で開催された13世家元の「桑原専溪個展」の一作として紹介されている(左頁の写真)。藤曼を器にからませてサボテン、熱帯の枯実を加え、口元にスターチスの枯花が挿されている。会場の中の異色ある作品だったと書かれている。今回はあまり気負わず初めての感触を味わった。ブロンズ色の葉が器の縞模様と調和している。ベニノキはメキシコ原産の常緑低木で、英名リップステイック・ツリー。実の中の赤い種子は食品の赤色染料(アナトー)や料理の味付け、口紅などに使われる。





風船唐綿の実

△3頁の花▽ 仙溪

花材

雪柳(薔薇科)

風船唐綿(夾竹桃科)

ガイモ科

トルコ桔梗(竜胆科)

花器

陶花器

フウセントウワタは南アフリカ原産の多年草で、白色の小花のあと突起のある袋状の実ができ、やがて実が割れると白いシルクのような毛の房をつけた種子が風にのって飛んで行く。キラキラと光る綿毛が無数に舞う光景が目につく。

切り花のフウセントウワタには少し葉が残っているものもあるが、繁みのあるものをとり合わせるのがい



テキスト 153号 (1976年3月) より。



い。色付きはじめたユキヤナギにフウセントウワタの実を混ぜて投入にした。紫色のトルコキキョウとは相性がいい。



柴栗の実

△ 9頁の花▽ 仙溪

花材

柴栗 (槲科)
竜胆 (竜胆科)

スプレー菊 (菊科)

花器 脚付方形陶水盤 (伊藤典哲作)

栗と人との関わりは遙か縄文時代に遡る。青森県の三内丸山遺跡から出土した栗をDNA鑑定したところ、栽培を繰り返していたことがわかった。栗は良質などんぶんに富み長期保存が可能。4〜5千年の栽培の歴史があるわけだ。

立華時勢粧には立花の花材解説で「栗の若ばえ」を下段に使うと書かれている。おそらく新芽から若葉が出はじめる春に使ったのだろう。栗の芽吹きはいけたことがないが、江戸時代には身近に採集できるちよつと気の利いた花材だったのか。

今ももっぱら栗の毬を楽しむ花材として夏から初秋に出回る。青い毬は小さく可愛い。保ちは悪いが季節を感じられるので毎年いけるのを楽しみにしている。





センダンの実

△12頁の花▽ 仙溪

花材 柗せんたん (柗せんたん科)

薔薇ばら (薔薇科)

ガーベラ (菊科)

花器 陶花器

鴨川の御池大橋東詰にセンダンの木がある。5〜6月に薄紫色の花が集まって咲いているが、高木なので気付く人は少ない。花のバニラに似た芳香も風で飛ばされて下を歩く人には届かないようだ。

そんなセンダンも秋から冬にクリーム色の実が鈴なりにぶらさがる姿は人目を引く。その実を見てはじめてセンダンがそこにあったことに気付く。

センダンは古名をアフチ、オフチと呼び、万葉集の歌からはこの実の種子で髪飾りをつくったことがわかる。

まだ青い実を器から簪かんざしのように出し、赤とピンクの花で華やぎを加えた。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2019年
10月号
No.676

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



籠にいける

△表紙の花▽ 仙溪

花材

雪柳 (薔薇科)
 吾亦紅 (薔薇科)
 鶏頭 (莧科)
 竜胆 (竜胆科)
 女郎花 (女郎花科)

花器

煤竹肩付籠

籠にいけるときは軽やかにいけて籠の軽さと調和するように気をつけたい。

重みのある花や太い枝ものは避けること。

素朴な風合いの籠には、野山から摘み取ってきたような風情の花。微風を感じるような枝を選ぶといい。

作例の籠は籠にしてはどっしりとしている。雪柳を低く前へ出して器の量感に見合う膨らみを作り、五種の秋草を一本ずつ加えている。雪柳の繊細な下がり枝で籠の強さが和らぎ、少ない本数でも器との視覚的なバランスがとれた。



伊勢菊

△9頁の花▽ 仙溪

花材

蔓梅擬 (錦木科)
 雪柳 (薔薇科)
 伊勢菊 (菊科)

花器

陶花瓶

イセギクは花卉が繊細なのに印象は強烈だ。一緒にいける相手もそこそこの強さがないと釣り合わない。





秋色を楽しむ

△2頁の花▽ 仙溪

花材 丸葉の木まるはのき (満作科)
鶏頭けいとう (鳶科)

花器 陶花器 (竹内眞三郎作)

秋色の大きなケイトウ。丈夫な茎を長く生かして立ち姿を見せれば風格が感じられる。あるいは立てずに思い切って短く前へ倒すことで花色を際立たせる生け方も面白い。

微妙に色の違うケイトウの赤色に、紅葉したマルバノキの葉色を重ねて秋色を楽しんだ。ススキの穂で季節感を深めている。

マルバノキは別名をベニマンサクと言ひ、晩秋に紐状の赤い五弁花を背中合わせに咲かせる。夏の緑の葉も清々しいが、カラフルな色彩に染まる秋はとりわけ美しい。鮮やかな自然の贈りものを存分に楽しませてもらった。

横から見た奥行き





ホオズキをかためる

△10頁の花▽ 仙溪

花材 酸漿(茄科)

カーネーション(撫子科)

花器 黒釉陶花器

ホオズキをかためてみた。ホオズキの軸を切り針金を刺したものを幾つも作っておき、束ねて棒にくくりつけている。白いカーネーションと対比させたいけげな。

朝の光の中で見ると、ホオズキの中に明かりが灯ったかのように優しく光っていた。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2019年
11月号
No.677

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



烏瓜の実

△表紙の花▽ 仙溪

花材 雪柳 (薔薇科)

栂 (松科)

烏瓜 (瓜科)

花器 陶花器 (市川博一作)

今年もカラスウリの実をいただいた。青い葉がついた状態で蔓を束ね、切り口に水を当てて一本ずつビニール袋に入れてある。庭の柿の木と楓にからみつくそうだが、蔓を切らないように解くのは大変だろう。

いただいたカラスウリはまず適当な木の枝を支えにして投入で楽しんで。半日は葉も瑞々しいが、翌日にはカリカリになっているので何か葉の繁った枝を加えたりしている。

写真は枯葉を取り去ったカラスウリの蔓をツガの枝にひっかけて実をぶら下げ、紅葉したユキヤナギだけを加えて、シンブルに赤い実を目立たせた。

古く唐から伝来した朱墨「唐朱」の原料鉱石が朱赤色で卵形のもものあり、それに似るので唐朱瓜。やがて烏瓜に。



祇園祭にいけるいけばな展

7/15〜17 住友不動産フード

ホール7階 (四条河原町)

桑原仙溪

夏櫛 檜扇 桔梗 松明花





出逢い花 (35)

仙溪

白山吹 (薔薇科)
しらやまふき

満天星 (躑躅科)
みんたんせい

花器 陶花瓶 (清水美菜子作)

どちらも枝一本ずつでいけている。ドウダンツツジは立派な枝の脇に出た小枝を切ってもらった。日頃から花屋と親しくしておく、こういう時に無理を聞いてもらえる。紅いドウダンツツジのとなりに鮮やかな黄色の葉が見えた。シロヤマブキの黄葉である。枝先に黒い実が光っている。これら二つを手に持っていた。すでに出逢い花ができていた。

シロヤマブキはバラ科シロヤマブキ属の落葉低木。葉が対生するのでヤマブキ属のヤマブキと見分けがつく(ヤマブキは互生)。またヤマブキの実は暗褐色になり、ヤエヤマブキには実がならないと覚えておこう。

横から見た奥行き





南天とピンポン菊

△2頁の花▽ 仙溪

花材 南天(目木科)

ピンポン菊(菊科)

花器 方形陶花瓶(宮下善爾作)

木枯らしに身を震わせる頃、南天の赤い実を見ると、なんとなく勇気づけられる。寒さもへっちゃらな濃緑の葉をきりつと広げた姿は粹である。白とピンクの手鞠のような菊を取り合わせると、新鮮な感覚のいけばなになった。



パンダと水仙？ 〓2頁の
花▽ 仙溪

花材 バンダ(らん)

さわかすら 実葛・美男葛(まつぎ)

水仙(彼岸花科)

花器 陶花器

水仙にパンダだけでは少し「？」だが、ビナンカズラが加わると不思議にしっくりとおさまってくれた。この3者のどれかが1つ欠けても何か物足りない。表紙から2頁にかけて、副家元は4種、私は3種、健一郎は2種、それぞれの器の選択も含めて、3作の対比が気に入っている。



姫南天と水仙

仙溪

花材 姫南天 (目木科)

水仙 (彼岸花科)

小菊 (菊科)

花器 陶花器 (小川欣二作)

ヒメナンテンは中国原産。ナンテンよりも葉が小さく締まっているので優しい印象を受ける。実がなりにくく、葉を楽しむ花材だ。



横から見た奥行き

水仙対決

仙溪

今月号は健一郎の発案で全作にスイセンを必ず使うことにした。それなら「立花時勢粧」の絵のような暴れたスイセンもいけてみたいねということでも特別にお願いして取り寄せてもらった。普段は出荷しないようなひねたスイセン。生産者もどんな花になるのか是非いた花を見てみたいとのこと。こちらの欲する自然の姿を同じように思い描いてもらえるまで、地道なりクエストを続けた。なんだか面白くなってきた。



京都嵐山花灯路2019
いけばなプロムナード
△9頁の花▽ 仙溪

会期 12月18日～22日
会場 二尊院門前

花材 ビロウ(椰子科)

グロリオサ(百合科)

コニファー・ブルーアイス

(檜科)

花器 陶花器(市川博一作)

檳榔の枯葉 仙溪

ビロウは椰子の仲間。東アジアの亜熱帯の海岸付近に自生する。葉が掌状に広がり、葉先は細かく裂けて垂れ下がる。枯れても撥水性があるため屋根や笠の材料にされる。沖縄ではクバと呼ばれ、今でもクバ笠が作られている。

また、ビロウは平安時代、大甕神聖視された植物で、上皇以下、四位以上の上級貴族が乗る車はこのビロウの葉を裂いて編んだもので覆った檳榔毛車であった。

さらに天皇の即位式の前に裸ぎ祓いのためにこもる百子帳という仮屋は頂上がビロウの葉で覆われる。ビロウの葉は風をおこすことができるので、邪気を払うと考えられていたのだらう。

そんな謂れがあるとは知らずに二尊院の門前にいけたのだが、なんとも相応しい選択だったと感じ入っている。



連翹と百合

仙溪

花材 連翹(木犀科)

透かし百合2種(百合科)

花器 陶花器

百合は本来夏の花だが、園芸品種がほぼ一年中花屋で売られるようになった現代では、夏以外であっても花色の選び方といけ方によって、良い取り合わせになることもある。

作例の2色のスカシユリもそれぞれにいい表情を見せてくれている。

園芸化された花には野の花のような風情はないけれど、深刺とした明るさがある。自然の景色を思わせるようないけばなには向かないが、現代的な雰囲気はいけばなで持ち味を生かしたい。

レンギョウとスカシユリが作る黄色の輝きの中で、もう一方のスカシユリの臙脂色と葉の緑色が際立つ。

横から見た見た奥行き



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2020年
3月号
No.681

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



辛夷こぶし アイリス 椿

△表紙の花▽ 仙溪

花材 辛夷もくれん (木蓮科)

アイリス (菖蒲科)

椿 (椿科)

花器 魚文陶花瓶

コブシの枝を切るとほのかに良い香りがした。何度も経験しているはずなのに毎回新鮮な驚きを感じる。そして手にした枝に愛着を覚える。そんなことも私が花をいける理由の一つなのだ。

横から見た奥行き





出逢い花 (36)

△3頁の花▽ 仙溪

かわつざくら
河津桜 (薔薇科)

たちばな
橘 (蜜柑科)

花器 織部徳利 (東田茂正作)

雛飾りの桜と橘のイメージ。タチバナは寒暖の別なく常に生い茂るの
で「長寿瑞祥」の願いをこめて。
サコンノサクノウコンノタチバナ。

横から見た奥行き





桃の古木

△11頁の花▽ 仙溪

花材 桃(薔薇科)

アイリス(菖蒲科)

椿(椿科)

花器 銅花器

切り花の桃は「矢口」という品種が主で、産地で何度も枝切りするうちに幹は太くごつごつとしてくる。珍しく幹ごと売られていたので重量のある銅器でいけた。長年、若枝を提供してくれた親幹への敬意を込めて、艶やかな葉の純白の八重椿を添えた。

横から見た奥行き





出逢い花 (37)

仙溪

三榎 (沈丁花科)

黒百合 (百合科)

花器 志野花入 (野中春清作)

人が魂を込めてものを作ると、作ったものに魂が宿る。そんなことを感じる年齢になってきた。中でもやきものは最終的に火によって命が吹き込まれる点で特別だと思っ

この小さな志野花人も何かを持っている。最初に見た時にそう感じたが、実際に花をいけてみてますます好きになった。玄関の掛花にして庭のフキノトウやツバキをいけて楽しんでるが、何気なく挿しただけでも雰囲気のある花になってくれる。

ミツマタは中国原産の落葉低木で和紙の原料となる。柿本人麻呂の歌に「三枝」の名で詠まれているのがミツマタだろうと言われている。三つに分かれた小枝に可愛い花が咲いている。クロユリを出逢わせると、互いの花色が際立った。

横から見た奥行き



2種類の白い花

△3頁の花▽ 仙溪

花材

虫狩むしかり（忍冬科）

芍薬しやくやく「皐月」さつき（牡丹科）

白花撫子はななご（撫子科）

花器

耳付陶花瓶

いけることで心が野山を駆け巡る。ムシカリもそんな枝の一つだ。山の清らかな空気が澆刺とした生命を感じる。シャクヤクやナデシコも出始めた。白い花が2種類になったが、かえって白色に思いが込められたように思う。





柔らかなみどり

△4頁の花▽ 仙溪

花材 裏白の木（薔薇科）

透し百合（百合科）

都忘れ（菊科）

花器 葉文陶花瓶（伊藤典哲作）

桜が散り、新緑の季節を迎えると、様々な緑が目を楽しませてくれる。ウラジロノキの葉の緑白色は柔らかで優しい。若葉の始めの頃にいけるので、シャクヤクやバラなど葉の茂った花と取り合わせたい。

淡いピンクのスカシユリと紫色のミヤコワスレを合わせた。撮影のあと百合の花が大きく咲くといささかバランスが悪くなったので、百合は短く生け直した。いけばなは臨機応変に楽しめばいい。

横から見た興行き





2種か3種か

△10頁の花▽ 仙溪

花材 七竈ななかまど (薔薇科)

薔薇 (薔薇科)

アネモネ (金鳳花科)

花器 結晶釉鉢 (前田保則作)

花展向きの太いナナカマドの枝。最初はバラと2種でいけようと思ったが、どうも物足りない。ナナカマドを小さく使えば2種でも良かったかもしれないが、立派な枝を生かそうとすると、バラだけではつり合わない。悩んだ末に赤い大輪のアネモネを添えることにした。あくまでも脇役としてのアネモネだ。意外と上手く効いてくれた。

横から見た奥行き





出逢い花 (38) 仙溪

あかばなやくるまぞう
赤花矢車草 (雪の下科)

べにしだ おしだ
紅羊歯 (雄羊歯科)

花器 雲紋竹花籃 (箕浦竹甫作)

深山の谷治いや林床の湿気のあるところに生えるヤグルマソウ。矢車に似た葉と白い小さな花が集まって咲く。その仲間のアカバナヤグルマソウは中国原産と思われる。ヤグルマソウの英名ロジャージャアと呼ばれることもあるようだ。葉は矢車型ではないが、こちらもしっかりとした森の湿り気を感じる。

この珍しい客人 (花だけど) を美しい籠で迎えて庭のシダでもてなす。居心地はいかがですか？

この籠は丹波篠山の雲紋竹で編まれている。竹の表面にあらわれる雲のような模様が生かされて、籠に繊細な品格を与えている。山野草の軽やかさに花籠がよく似合う。



横から見た奥行き



真っ赤なバラ

△4頁の花▽ 仙溪

花材 コアラファン(蚊帳吊草科)

薔薇(薔薇科)

アリウム・シューベルティ

(百貝科)

花器 ガラス花瓶

オーストラリア原産のコアラファンと中東原産のアリウム・シューベルティを赤いバラが繋ぐ。世界をつなぐ熱き心。





雲のように

△10頁の花▽ 仙溪

花材 茴香(芹科)

薔薇(薔薇科)

スモーク・グラス(楕科)

花器 ガラス花瓶

(スウェーデン製)

バラの名前はドルテエヴィータ。直訳は「甘い生活」だが、「幸せな日々」とも。優しい雲のようにふんわりいけた。





野山の風情

〈11頁の花〉 仙溪

花材 竹島百合（百合科）

鉄線（金鳳花科）

釣鐘鉄線（金鳳花科）

花器 陶花瓶（宇野三吾作）

タケシマユリは竹島で咲いていた百合なので名付けられた。領土問題になっている竹島ではなく、韓国の東140キロにある火山島で、韓国名をウルルンド（鬱陵島）という。今は韓国の領土で、野生植物の宝庫だそうだ。

タケシマユリには独特の個性がある。ラグビーボールのような蕾。鮮やかな色の肉厚の花弁。輪生する葉。一本でも絵になってくれる花だが、一本でそのままいけるには丈が長い。

とり合わせる相手に悩む花だが、野山の風情を感じる花材がよく似合う。枝ならナツハゼやユキヤナギ。花なら作例のようにテッセンを多種で合わせるのも意外によく合う。

花の相性は実際合わせてみないとわからない。





出逢い花 (39) 仙溪

笹百合 (百合科)

紫陽花 (紫陽花科)

花器 ガラス花瓶

(イストラエル製)

コロナウィルスの影響で各地の行事が中止になっている。京都では葵祭の行列も祇園祭の巡行もなくなった。6月の三枝祭りはあるだろうか。

奈良の三輪山に咲く笹百合を集めて罇と缶と呼ばれる酒樽を飾り、神前に供える疫病除けの祭典で、大神社の摂社、率川神社で行われる。平安時代の律令の注釈書『令義解』にも記されている歴史ある神事だ。おや、罇や缶という古代の酒樽に花を飾る？なにやらいけばなのルーツを感じるではないか。

私たちが花をいける背景には長い歴史がある。先人達が花へ託した思いを共有したい。

写真の青い大理石模様様のガラス花瓶。手からするとすべって落ちてしましそうなほど軽くて薄い。でも水を入れるとしっかり立つてくれるので、一輪挿しや出逢い花の器にぴったりだ。





蔓をいける

∧3頁の花∨ 仙溪

花材 熊柳(黒梅擬科)

薊(菊科)

京鹿の子(薔薇科)

撫子(撫子科)

鳴子百合(百合科)

花器 陶花器(木村展之作)

クマヤナギは日本の山地に生える落葉つる性木本で、クロガネカツラの別名がある。つるの先の房は、去年咲いた花のあとにできた実である。地味な花材なので明るい野の花を合わせた。

クマヤナギはぐにやぐにやでいけにくい。細めの背の高い花器がいけやすそうだが、あえて口の広い花器にいけてみた。

花器に写真のような仕掛けを入れておき、つるにも長い棒を固定していけている。バランスをとるのが難しいが、重みのあるつるを軽やかに見せることができた。





器と花の相性

〈10頁の花〉 仙溪

花材 宮城野萩 (豆科)

斑入りの笹 (稻科)

花器 陶偏壺 (吉川充作)

庭のハギを一風変わった器に付けてみると、とても良く合ってくれた。個性の強い器は、かえって野に咲く花と相性がいいのかもしれない。外見は怖そうでも、繊細な心の持ち主。そんなほのぼのとした良さが滲み出る。





玄関にいける

△12頁の花▽

仙溪

背景 富春軒の玄関

花材 野薔草のかんぞう（百合科）

紫陽花あじさい（紫陽花科）

花器 陶花器

オンライン展覧会にこの写真で参加させていただいた。展覧会場に来て頂けない分、会場ではできない見せ方ができるなら、オンライン展覧会をする意味もあると思う。



涼やかな器

△6頁の花▽ 仙溪

花材

葉団扇楓はらのかえぞ（楓科）

透かし百合（百合科）

ベル鉄線（金鳳花科）

花器 青白磁花瓶（市川博一作）

涼を感じる花材にはフトイ、アレカヤシなどのように、風が抜けていくようなものが多い浮かぶが、爽やかな緑の葉をみずみずしくいけるのもいい。

そして、涼しげな風を感じるようにしたい。

作例では、まず見るからに涼やかな器を選んでいる。青白磁の器は夏にこそ使いたい。淡い水色の表面は雪解け水を連想させる。明るい緑の葉が良く映える。

まずカエデの青葉を広げ、ベルテッセンを風を感じるように前へ出す。そこへ、鮮やかな黄色のスカシユリを覗かせた。スカシユリの強さが加わることで、カエデが軽やかに見える。



水面を見せる

△7頁の花▽ 仙溪

花材 姫檜扇水仙 (菖蒲科)

洋種山牛蒡 (山牛蒡科)

花器 陶深鉢 (ドマーニ製)

ヒメヒオウギスイセン (ヒメヒオウギとも呼んでいる) は南アフリカ原産の多年草。学名はクロコスミアで、明治の中頃に日本に入ったそうだが、性質が強いので各地で野生化しているらしい。

ちなみに同じく南アフリカ原産で、ワトソニアという植物がヒオウギスイセンと呼ばれているので混同しないようにしよう。

立派なヒメヒオウギスイセンが手に入ったので、ヨウシュヤマゴボウ (アメリカヤマゴボウとも呼ぶ) と2種でいけた。

この器は鉢カバーで、小さなバケツを置いた上に黒いフェルトを巻いた板を乗せ、その上に剣山を置いていけている。いけた後も剣山をフェルトで隠すと、水面を美しく見せられる。





為せる業なわざ

仙溪

花材 七竈ななかまど (番薇科)

風船葛ふうせんかずら (無患子科)

夏櫛なつはし (躑躅科)

花器 陶花瓶

フウセンカズラはムクロジ科の蔓性植物。熱帯の植物で、夏に小さな白い花を咲かせ、風船状の実が蔓からぶら下がって愛らしい。この実が熟すと中の種にはハート型の白い模様が見れる。

ムクロジ科のムクロジは以前にテキスト630号でいけている。黒い実は数珠や羽子板の羽にも使われ、果皮は石鹸になる植物なので名前を覚えておきたい。

さて、このフウセンカズラをいけるには蔓を掛ける枝が要る。ナツハゼにフウセンカズラを絡ませ、早くに紅葉したナナカマドを合わせた。

夏の緑と秋の紅。このような花材が花屋に売られているのは、日本の文化の為せる業だと感謝している。

横から見た奥行き





心の情景をいける

△2頁の花▽ 仙溪

花材 紐鶏頭(寛科)

鶏頭(寛科)

沢瀉(沢瀉科)

花器 十角青色ガラス水盤

以前、黄色くなったオモダカの葉に水
辺の草花をとりあわせていけたことがあ
る(テキスト2011年10月号)。その花
と文章を父・仙齋が褒めてくれた。キツ
ネの家族が楽しみに遊ぶ様子を想像して
いけたのだが、私にとって、何かをつか
んだ大切な1作となった。花と器で、借
り物でない自分の心の情景を形にできる。
そんないけばなが大好きだ。



同系色の組み合わせ

△12頁の花▽ 仙溪

花材 ビバーナムの実（忍冬科）

透かし百合（百合科）

花器 ガラス花瓶

（スウェーデン製）

テキスト2003年10月号に母（ホッホチャン）がビバーナムの赤い実をいけているが、その時の今にも落ちそうなく熟した艶やかな実を今も時々思い出す。プリッと熟れた実には葉が無かったので、紅葉したナナカマドをとり合わせていた。父・仙齋が自動車の切り絵を貼った山をつくって、秋山へモミジ狩りにゆく文章を添えている。ホッホチャンとケンチャンの会話から生まれた「花遊び」の一つだ。

今ではそのケンチャンが、ナツチャンと一緒に花遊びを引き継いで、2年前からインスタグラムに写真載せている。彼らと同世代の若者にも花に関心を持ってもらいたいとの思いで、毎回工夫を凝らしている。次はどんな風になるのか楽しみにしている。

上の作例は実の色とユリの色、ガラス花器の色の繋がりが色彩的効果を生んでいる。同系色の濃淡の組み合わせ。



鈴バラ

△5頁の花▽ 仙溪

花材 鈴薔薇の実(薔薇科)

薔薇(薔薇科)

スプレー薔薇(薔薇科)

花器 陶花瓶

「スズバラ」は流通名で、昭和52年から北海道深川市の特産品として栽培、出荷されている。

ロサ・セティゲラ(北米原産)

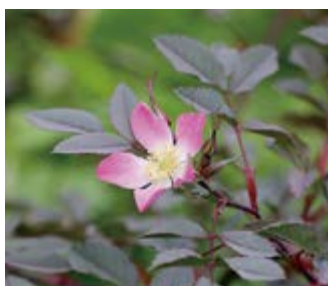
ロサ・グラウカ(ヨーロッパ原産)

であるらしい。

ロサ・セティゲラは北米のネイティブ・ローズで、「大草原の宝石」とか「大草原のつるバラ」と呼ばれる野生のバラである。

ロサ・グラウカの葉は紫がかった灰色で、カラーリーフとしてガーデニングに人気がある。バラの原種の一つで、山岳地帯のワイルド・ローズだ。

大きく艶やかな赤い実を見ていると、野生の逞しき、自然の雄太さを感じる。バラの実に2種類のバラを合わせた。



ロサ・グラウカ

出典：<https://www.hokkaido-life.info/rose20160618.html>



ロサ・セティゲラ

出典：<https://www.prairiemoon.com/rosa-setigera-illinois-rose-prairie-moon-nursery.html>



木大角豆

△ 6頁の花▽ 仙溪

花材 秋桜（菊科）

木大角豆（凌霄花科）

花器 陶コンポート

近所の公園にキササゲの木がある。初夏に淡黄色の花を穂状につけ、秋に大きな葉が散ったあと、キササゲのような細長い実が冬の間ぶら下がっている。この実が裂けると中から綿毛の生えた種が風で飛んで行く。中国原産の落葉高木で、日本には古くに渡来している。風揺れるコスモスの優しい花色が、キササゲに寄り添う。



キササゲの花

出典：<https://midori7614.exblog.jp/18171111/>



キササゲの実

出典：<https://blog.goo.ne.jp/koizumi-masato/e/0e7fefac6834ba77d85f79a71de44097>



掛け花

仙溪

花材 ベル鉄線2種

(金盞花科)

花器

志野しのはな花入

(野中春清作)

9月2日に撮った玄関の掛け花。上向きに咲くピンク色と下向きに咲く濃い青紫色の

ベルテツセン。

器は志野の小さな壺だが、品があり形も優れていて、花たちを水切りして、無造作にすっと口に挿すと、それだけで自然の息吹が感じられる。いけた花が生き生きとしてくる不思議な壺だ。





鍋にいける

仙溪

花材 パンパスグラス（稻科）

竹似草（芥子科）

ダリア2種（菊科）

花器 ホーロー鍋（ルクルーゼ）

使ったあと汚れを落とせるなら、食器や鍋にも花をいけられる。このオレンジ色の鍋は家族団欒の象徴だ。秋らしい穂を2種類に、鮮やかな色のダリアをいけると、和やかな会話が聞こえてきそう。

料理といけばなは共通点が多い。どちらも自然からの恵みを扱うこと。その鮮度が大切なこと。素材を生かす技術が必要なこと。器との調和が大切なこと。季節を味わい、心を豊かにしてくれること。他にも色々ありそう。

では違いは何だろう。料理のように人の胃袋を心地よく満たすことはできないが、いけばなはいけている時も、いけた後も、花との対話が楽しめる。これから花の保ちが良くなっていく。これからの花との対話を楽しみたい。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2020年
11月号
No.689

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



石榴 さくろ

△表紙の花▽ 櫻子

花材 石榴の実 (罌粟科)

菊 (菊科)

藜苳麻 (刺草科)

花器 陶花瓶

倉敷の叔母宅にてザクロの実を採らせていただいた。今年は沢山実がなつたので、持って帰っても良いとの事。お弟子さんに手伝ってもらい艶々の真っ赤な実が付いた重たい枝を切り落とした。大切に持ち帰って、花火の様に咲くキク、花が密に咲くヤブマオと取り合わせた。思いがけない花にも出会えて、心に残る1作。



ザクロの蕾と花と花のあと



ザクロの花





ツルウメモドキの実

△ 4頁の花▽ 仙溪

花材 蔓梅擬 (錦木科)

糸菊 (菊科)

上臈杜鵑草 (百合科)

花器 陶花瓶 (市川博一作)

いけた後でも刻々と変化する実も
の花材がある。ヒオウギやツルウメ
モドキの実は、しばらくすると弾け
て中から艶やかな種子が顔を出す
が、その自然の色のなんと美しいこ
とか。

ツルウメモドキとジョウロウホト
トギスの鮮やかな出会い。



ツルウメモドキの花。雌花④、と雄花⑤

出典： <https://plaza.rakuten.co.jp/okada1952/diary/201505120000/>





ローゼルの実

△ 5頁の花▽ 仙溪

花材 ローゼル(葵科)

菊2種(菊科)

花器 陶花器

ローゼルは赤い大きな蕾つぼみに見えるが、中には既に実ができています。珍しく枝先に葉と小さな蕾が残っていたので、多めに買い求めて秋色の菊を合わせていけてみた。葉の水揚げも良いので、今後も葉付きで出てるのを期待している。

今月号の実物花材には花の写真添えている。意外と知らない花の姿花を見てから実を見ると、実もの花材への愛着が増してくる。それぞれに個性的で貴重な実たちと出逢える楽しみ。秋のいけばなの醍醐味。



ローゼルの花

出典：<https://www.toukagen.com/?pid=126322305>



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2020年
12月号
No. 690

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



三毘（さんこん）

△表紙の花▽ 仙溪

花材 榛はしばみ（樺かばの木科）

菊 「フエゴターク」（菊科）

椿 「西王母」（椿科）

花器 陶コンポート

「三毘」とは三兄弟という意味があるらしい。

画題に「風月三毘」というのがあり、蓮、菊、蘭が描かれる。また煎茶道では秋に蓮根、菊、春蘭の葉株の盛物を画題物として床脇に飾る。

「風月三毘」を調べてみると、中国の清の時代の人物の名前、孟蘭、仲蓮、季菊から名付けられたとあったが、もし本当だとすると、自分の子供に、春の蘭、夏の蓮、秋の菊の字をそれぞれ付けるなんて、なんて風流な親だろう。ちょうどそれぞれの季節に生まれたのかな。

いけばなでは3種類の花材でいけることが多い。仲の良い三兄弟のように、互いに助け合い、それぞれも生き生きと見えるようにいけると、なんともいえない良さを感じる。

ハシバミは侘びた風情のある個人的な花材だが、色彩のある土っぽいや器を選び、金茶色の大輪菊で温かみを補い、椿の薄紅色の花と葉で艶やかさを加えると、いい雰囲気にな和してくれた。私なりの風月三毘。



風月三毘の軸と花。いけて十日目。



赤い実 黒い種

△6頁の花▽ 仙溪

花材 梅擬うめごしき(繡の木科)

枯向日葵かれひまわり(菊科)

糸菊3種(菊科)

花器 陶花器

ウメモドキの赤い実には、黒い種をびっしりつけた大輪の枯ヒマワリを合わせてみた。赤、ピンク、白のイトギクを加えると、それぞれの命が輝きだした。

枯ヒマワリはかなり重い。重めの剣山に太い支柱を立てておき、それに丈夫な針金でヒマワリの茎を固定している。



初冬の盛花

△7頁の花▽ 仙溪

花材

木瓜 (薔薇科)

水仙 (彼岸花科)

寒菊 (菊科)

花器 陶水盤 (清水美菜子作)

ボケは春の花だが秋にも咲く。秋から冬まで花を咲かせるので寒木瓜とも呼ばれ、冬に咲く水仙と時季が少し重なる。同じく「寒」のつくカンギクとの3種でとり合わせるると、いかにも初冬の風情が感じられる。私の好きなとり合わせだ。

でもボケもカンギクも少々値が張る。もう少しだけ感じた感じにするなら、スイセンにアカメヤナギとバラの組みあわせもオススメだ。

アカメヤナギの枝分かれ1本。

スイセン2本。

バラ1本。

レモンリーフ少々。

先日、中学校のいけばな体験授業でこのとり合わせで教えたが、バラの葉を大事に広げ、アカメヤナギの赤い側を自分の方へ向け、スイセンが気持ち良さそうな場所を考えながら、皆素敵な花をいけてくれた。

少ない本数でも組みあわせ次第で見応えのある花になるのだなあと、しみじみと感じられて、私自身とても貴重な体験になった。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021年
1月号
No.691

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



松をいける

△表紙の花▽ 仙溪

花材 枝若松えだわかまつ（松科）

水仙すいせん（彼岸花科）

薔薇ばいばい（薔薇科）

「タージマハル」

花器 陶深鉢（フランス製）

お正月には松をいける。

特に若松のなんと美しいことだろう。力強く、若々しく、清々しい。

いける前にはそれほど強くは感じないが、いけた後では印象が変わる。

とても生き生きと輝いて見えるのだ。水を充分に吸い上げ、葉に力を

ゆきわたらせるからだろう。或いは心地よい空間を得て、伸び伸びと本来の姿を見せてくれているのかも。

ほんとに美しいと思う。心からそう思う。こんな松を育ててくださって有り難うと言いたい。だからこそ、大切に扱って、心を込めていけたい

と思う。

このバラも特別に育てられたバラ

のようだ。たった2本でも松に負けていない。スイセンを加えて、私の

大好きなとり合わせにした。



新春の清々しさ

△4頁の花▽ 仙溪

花材 青文字あおふみ（楠科）

ミニ薔薇ミニばいばい（薔薇科）

アイリスあいらす（菖蒲科）

花器 青磁花瓶

アオモジの丸い蕾の中には数個の花が春を待っている。割ってみるとレモンのような香りがする。春には

モコモコと賑やかに咲き出すのだが、今はまだ静かな風情である。

アオモジの相手には瑞々しい華や

ぎが求められる。アイリスのクール

さとミニバラの優しさが程良く寄り添う。



蛇の目松

△5頁の花▽ 仙溪

花材 蛇の目松(松科)

カーネーション(撫子科)

花器 陶花瓶

このジャノメマツはクロマツの斑入りで、とても珍しい。よく見るジャノメマツはアカマツの斑入りで、葉の元が白(黄色)くて優しい印象の枝だが、クロマツのジャノメマツはとても力強い。単体でも存在感があるので、シンプルにカーネーションを合わせたのが、ピンクを加えたので優しい感じになった。赤色だけでも良かったかな。



京都嵐山花灯路

いけばなプロムナード

会期 12月11日(金)～20日(日)

会場 嵐山一帯

協力 京都いけばな協会

当流出品

前期展 12月11日(金)～15日(火)

桑原仙溪 二尊院門前

花材 飯桐 南天 菊

(写真①)

あえて赤い実を2種使うことで、温かみを感じてもらいたかった。寒さに耐えて花たちもよく応えてくれた。



瓔珞の花

〱 5頁の花 〱 仙溪

花材 土佐水木(満作科)
牡丹(牡丹科)

花器 龍耳瑠璃色釉陶花瓶

トサミズキの花は瓔珞のようだ。昨年(7月号)で紹介した観音菩薩の壁画(写真⑤)で天蓋からぶら下がったり、菩薩が身につけている煌びやかな飾りが瓔珞だ。インド貴族の装身具が仏教に取り入れられたものらしい。

そんなトサミズキの花に高貴な花と器を合わせた。鉢から切りたてのボタンを一輪。中国の花器にいけると、不思議な美しさを見せてくれた。



トサミズキの葉 (4月頃)

出展: http://www.zoezoe.biz/2010_syokubutu/ka_6_ma/199_mansaku/corylopsis/tosa_mizuki.html





伸びる空間

△6頁の花▽

仙溪

花材 小手毬こでまり（薔薇科）

薔薇ばら（薔薇科）

チューリップ（百合科）

花器 陶花瓶

チューリップは上に伸びる空間をあけておきたい。コデマリとバラは意識して前方へ出している。





集めて強める

△7頁の花▽

仙溪

花材

河柳(柳科)

喇叭水仙(彼岸花科)

トルコ桔梗(竜胆科)

花器 陶水盤(伊藤典哲作)

どんな雰囲気にしたいかを決めて、同じ種類の花材を分散させるか集めるかを考えればいい。





ジャパンスピリッツ in 京都

12月29日～1月5日 京都駅ビル

出品：桑原仙溪

花材：松2種 水仙 バラ2種

花器：陶水盤（ザールバーグ作）



桃と菊

△3頁の花▽ 仙溪

花材 桃(薔薇科)

菊2種(菊科)

花器 陶水盤

切り花の桃は「矢口」という品種が多い。加温して早く咲かせるには経験と勘が必要だそうだ。蕾の色が濃くて元気そうな枝を買い求めたい。

洗刺とした花色の桃が手に入ったので、大きめの水盤に菊と盛花にした。咲く季節は違うが、ともに中国から渡ってきた花同士。しつくりと合っている。菊と桃には同質の秘めた強さを感じるからだろうか。春と秋の花を合わせるのに抵抗はあるが、分かった上であえて出逢いを楽しんでる。

春に咲く菊の仲間だと、キンセンカ、シユンギク、マーガレット、ミヤコワスレ、ハルジオン、ヤグルマギク等々。でも桃と合わすにはみんな弱々しい。そうだ、大きく伸びた露の臺となら一度いけてみたい。





インドのイメージ

△5頁の花▽ 仙溪

花材 ドラセナ・コルデイリネ

(竜舌蘭科)

シンピジウム(蘭科)

花器 トルコ手付銅鍋

ドクラの牛(真鍮製)

以前、インドで買った真鍮の牛。蠟型鑄造でつくられた鑄物で、5千年の歴史があるそうだ。「ドクラ」と呼ばれる職人が村々を回りながら使わなくなった金属製品を溶かしては神像などに作り直していた。

蜜蝋でつくった原型を粘土で包み、焼いて蠟を溶かし出すと鑄型ができる。蜜蝋には仏教三聖樹のひとつサラノキの樹脂も使われると聞いた。細く伸ばした蜜蝋で原型の表面を美しく装飾しておく、細かな部分まで金属が流れ込んで針金細工のようになる。金属は型に全て流れ込むのですしりと重い。

コルデイリネはオーストラリア原産だが、インド的な雰囲気がある。シンピジウムにもインドの種が入っている。古い銅鍋にそれらを盛って、ドクラの牛を飾った。赤い敷物はインドの大地。見ていると活力が湧いてくる。





エピデンドラム

△6頁の花▽ 仙溪

花材 ユーカリ（フトモモ科）

エピデンドラム（蘭科）

花器 陶コンポート

エピデンドラムは中南米原産の蘭で、野生種は茎が数メートルになるらしい。春らしい色を選び、ユーカリを合わせた。





ザ・ニホン

△2頁の花▽ 仙溪

花材 啓翁桜けいおうざくら（薔薇科）

椿つばき（椿科）

花器 耳付陶花瓶

日本で器に花を挿す文化が根付きはじめた頃、すでに桜と椿を一緒にいけていたのだろうか。どちらも日本では古より春を教えてくれる木であった。ザ・ニホンと呼ぶに相応しい花木だ。そんなことを考えながらいけていると、まさに日本をいけているような、しみじみとした気分になってくる。

しかし、日本文化と呼ばれるものも他国の文化の影響を強く受けている。梅や桃、牡丹や芍薬、菊ですら古く中国から伝わった植物だし、このケイオウザクラも日本と中国の桜を親に持つ品種である。

様々な文化を受け入れ、育み、独自に発展してきたものが日本文化だと考えれば、いけばなが今後どのように変化してゆくのか楽しみになってくる。何を守り、何を变えるか。自分自身に問いながら。





出逢い花 (40) 仙溪

小手毬 (こでまり) (薔薇科)
芍薬 (しやくやく) (牡丹科)

花器 ガラス花瓶
(鈴木玄太作)

小手毬も芍薬も中国伝来の植物。シヤクヤクは中国で紀元前にすでに園芸植物としての記録があり、花の觀賞とともに根は漢方薬として利用され続けている。コデマリが中国でどのような歴史を持つのかわからないが、日本には江戸時代初期に伝わっていて「立花時勢粧」にも記載がある。

シヤクヤク1本とコデマリ1本をガラス花瓶に挿してみた。シヤクヤクの丸い花にコデマリの丸い花。あえて器にも丸い飾りのあるものを選んだが、互いに響き合う感じが気に入っている。





エジプトの器

△12頁の花▽ 仙溪

花材 ミモザ（豆科）
 ラナンキュラス（金鳳花科）
 花器 銀象嵌真鍮瓶（エジプト製）

古代エジプトでは王の棺をアカシアで作ったそうだ。アカシアは不死のシンボルとして神聖な木であった。アカシア（Acacia）の名はギリシャ語の「尖らす」に由来するそうで、アフリカのアカシアには棘のあるものが多い。

アカシアの仲間はおーストラリアにも多く、ギンヨウアカシアやフサアカシアが花材になっている。両親が「花ふたり旅」で使ったエジプトの器に、ギンヨウアカシアをいけた。アフリカのアカシアのように棘は無いが、黄色い花が金銀の器に豪華に映る。エジプトの神々も喜びそうだ。地中海沿岸原産のラナンキュラスを加えて、古代エジプトの華麗な文化に思いを馳せている。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021年
5月号
No.695

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



風を感じるように

△表紙の花▽ 仙溪

花材 菖蒲(菖蒲科)

山躑躅(躑躅科)

花器 朱塗コンポート

いけばなでは、立ち枝、横枝、下がり枝など、もとの姿を想像しながらいけることになるが、下へ下がる枝をいけるのはなかなか難しい。

コデマリのようにいったん立つてから下がる枝はいいのだが、下がり枝のみの場合は枝を撓めないといけられない。

ヤマツツジの下がり枝の途中に針金をそえて曲げてみた。茶色のフロールテープで仕掛けを隠し、その前にアヤメの葉を立てて目立たなくしている。

手間をかけたおかげで変わった花型ができた。扱いの難しい花材ほど、工夫して生かせると面白い花になる。

山からの清浄な風で邪気を吹き飛ばしてもらえるように、疫病退散の願いをこめて、赤い器にいけた。





アメリカの思い出

△12頁の花▽ 仙溪

花材 アメリカ手鞠下野てまりしもつげ (薔薇科)

石楠花いしなはな (躑躅科)

花器 花園岩花器

仙齋・素子の写真集『花ふたり旅』にも使われている石の器。花園岩を丸く削り、穴が彫られている。かなり重たいのだが、冬のワシントンで購入して撮影に使い、その後私がリュックに入れて家まで持って帰ってきた。

『花ふたり旅』ヨーロッパ撮影では、飛行機トラブルで予期せずシカゴ近郊で1泊したが、宿の前にシャクナゲが美しく咲いていたのをよく覚えている。6月初旬のことである。そしてこの作例。花屋でアメリカテマリシモツケ(オウゴンコデマリ)の面白い枝とシャクナゲを見つけた瞬間、自分の中の「アメリカ」が一つの形になった。シャクナゲの名前に石の字が入っていることも、きつと作用しているに違いない。





出逢い花 (41)

∧ 2頁の花 ∨ 仙溪

檜扇 (菖蒲科)
木槿 (葵科)

花器 染付花瓶

鉢植のヒオウギに庭のムクゲを添えた。染付の花瓶に爽やかに映える。





自然の動き

△6頁の花▽ 仙溪

花材 斑入り黄梅（おうばい、もくせい）（木犀科）

クレマチス「エレガフ

ミナ」（きんぼうげ）（金鳳花科）

斑入り甘野老（あまじこ）（百合科）

花器 鉄枠付赤ガラス花瓶

春に黄色い花を咲かせるオウバイは半蔓性の落葉低木で、ソケイの仲間なので、葉の感じがソケイによく似ている。

明るい斑入りのオウバイを枝姿が生かせるように背の高い花器にいけ、クレマチス・エレガフミナを絡ませた。

どちらにも自由な動きがあるので、花が行きたそうな方向に挿してゆく。

偶然生まれる新鮮な美しさ。

斑入りのアマドコロで明るさを加えた。





ボツグウッド 仙溪

花材 芭蕉の枯葉（芭蕉科）

エンシクリア・アデノ

カウラ（蘭科）

アロエ「不夜城」（アロ

エ科・ユリ科）

ボツグウッド

花器 陶花器（篠原雅士作）

アイルランドの泥炭層に埋もれていたオークの木片「ボツグウッド（埋もれ木）」。長い年月をかけて自然がつくった色艶には深い魅力がある。

華道創心流家元の作られる黒釉掛け流しの花器がこの木片に合うと思った。器にのせると木片が生き生きします。芭蕉の枯葉も違和感がない。あとは個人的な蘭の花があれば充分だ。蘭に葉が無かったので小さなアロエを覗かせた。

（いけばなプレゼンテーション
出品作）





染付花瓶

△2頁の花▽ 仙溪

花材

丸葉の木(満作科)
唐糸草(薔薇科)
瑠璃虎の尾
(胡麻の葉草科)

花器 染付花瓶

「染付」は、白色の胎土で成形した素地の上に酸化コバルトを主とした絵の具で模様を絵付けし、その上に透明釉をかけて高温焼成した陶磁器のことで、おもに磁器で、模様は藍色に発色する。この絵の具の材料を呉須と呼ぶ。江戸時代初期に中国から日本の伊万里に伝わった。

染付の器には写実的な絵柄もあるが、花をいけるには自由奔放な筆致の模様の方がいい。素早い絵付けの闊達さが、いけた花の瑞々しさをより増してくれるように思う。

薄紅色と瑠璃色の夏草に、大らかな丸い葉とどっしりした染付の器が涼感を加えてくれた。





テッポウユリ

△4頁の花▽ 仙溪

花材

木苺きいちじ（薔薇科）

鈴薔薇の実すずばら（薔薇科）

鉄砲百合てっぽう（百合科）

花器

焼締陶やきしめ花瓶

毎年、ユリの品種改良がおこなわれていて、新しい品種に出会う楽しみがあるのは有り難いことだが、昔から親しんできた品種が栽培されなくなってしまうのは淋しいことだ。ササユリや関西のタメトモユリのように栽培が難しいものに加えて、カノコユリもほとんど見なくなってきた。カノコユリは俯うつむく姿が敬遠されたのかもしれないが、そんな中でもテッポウユリが現役で頑張ってくれているのは嬉しい。ユリと言えばテッポウユリなのだ。強くて美しいテッポウユリを今後もずっといけ続けたい。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021年
9月号
No.699

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



ギンギツネ

△表紙の花▽ 仙溪

花材 葉鶏頭2種(莧科)

銀狐の枯花(稻科)

スモークグラス(稻科)

花器 陶花器

白い尻尾しつぽのような穂。花屋に
来た時は緑色だったのが、いつ
の間にか白くなったそう。ギ
ンギツネの名前がついていた。
調べるとアフリカ原産のペニセ
タム・ヴィロサムという品種で、
花穂が20センチ以上になりギツ
ネの尾のようなので日本ではギ
ンギツネと呼ばれている。作例
の花穂は10センチ前後だが、一
目見て枯れ色に心を奪われた。

同じイネ科のスモーク・グラ
スを合わせ、小型のハゲイトウ
を加えた。枯れ色の不思議な美
しさが表現できたのではと思う。





菊の盛花

△4頁の花▽ 仙溪

花材 糸菊2種(菊科)

スプレー菊2種(菊科)

花器 梅花皮釉陶水盤

(木村盛伸作)

「立花時勢粧」には菊一色の絵図が3点ある。「大中小の品種を彩りよく花形風流に指す」のを理想とするが難しいものだと言われている。(『テキスト672』)

「立花時勢粧」よりかなり前の「文阿弥花伝書」には「菊ばかりは立てず」と書かれている。何年の隔りがあるのか分からないが、流祖の時代には園芸文化の発展と共に、菊ばかりで立てることが可能なくらい多くの品種があつたと想像できる。

今はさらに外国生まれの菊も加わり色も形も様々だが、糸菊の繊細さを生かすには優しい雰囲気菊を合わせるべきである。





藪山査子

△6頁の花▽ 仙溪

花材 藪山査子やぶさんざし（酸堿科）
糸菊すげり（菊科）

花器 陶花器

10月11月頃、ヤブサンザシの実が赤く色づく。秋のいけばなに自然な味わいを与えてくれる大切な花材だ。秋色に染まった小ぶりの葉と色づきかけた実。ごつごつとした枝。細枝の先には次の年の芽ができている。束を解くと意外なほど枝の広がりがあったりして、毎回どんな枝姿なのかワクワクしながらいけている。

相手には菊がいい。花屋には様々な色や形の菊が仕入の度に入れ変わり並んでいる。今回は藤色の糸菊を選んでさっぱりと2種でいけた。





色づいた木苺

△9頁の花▽ 仙溪

花材 木苺の紅葉 (薔薇科)

槍鶏頭 (貫科)

スプレー菊 (菊科)

花器 陶花器

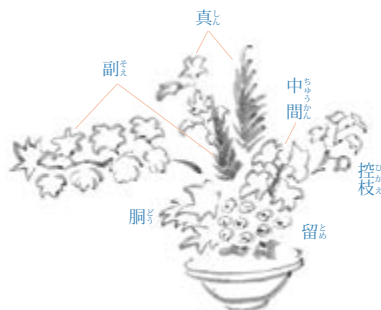
昨年10月末の宅配稽古の見本花。東京と名古屋の教室はコロナウィルスの影響で京都からそれぞれのお宅へ花を届けての自宅稽古が続いている。キイチゴの艶のある葉の色づきに季節を楽しんでいただけだ。

数年前から出回るようになったキイチゴの紅葉は、少し高つくが季節の味わいを感じられるし、花材の状態にもよるが良く保つてくれる。

季節を感じる花材はまさにご馳走だと思ふ。大切に育てられ、大事に届けられた花たち。器を考え、取り合わせを工夫し、丁寧に大切にいけてあげてほしい。花たちの良い表情を引き出せばそれで充分なのだ。

大切なのは良い花材との出会いをご馳走と感ずることだと思ふ。自分がそう思わないのに見える人に伝わるはずがない。

ご馳走に感謝である。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021年
11月号
No. 701

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



立花時勢粧333年

記念插花 115、12頁

会期 9月18日(土)～20日(月)

会場 鹿王院

插花 桑原仙溪 桑原櫻子

桑原健一郎

シンクロするアート

鹿王院の座敷、日本画家・藤井隆也氏の枯葉の襖絵に囲まれて、藤井氏の屏風の前に花をいける。へんに緊張せず不思議なほど心地よかった。襖絵の枯葉が優しく花を見守ってくれているような感覚。藤井氏がつくる独自の世界にいけばなが呼応する。花とシンクロするアート。

舞う 鹿王院本玄関

△表紙の花▽ 仙溪

花材 グロリオサ (百合科)

鶏頭 (苺科)

花器 陶花器 竹内眞三郎作

屏風 藤井隆也作

グロリオサも鶏頭も天竺(インド)ゆかりの植物なので、古刹にいけると何か意味ありげだ。グロリオサの蕾の形が屏風の絵と響き合う。緑陰の小径の先で、赤い花と黒い華が舞い踊る。



花一輪 鹿王院客殿

△12頁の花▽ 仙溪

花材 蓮すいれん (睡蓮科)

箱竜胆さきりんとく (竜胆科)

花器 黒釉鉢 (竹内眞三郎作)

あまり禅問答のような花をいけようとは思わないが、一輪の花を大切に作る気持ちは持っていたい。手にした花のどんな表情を見せたいのかによって、器を考え、取り合わせを工夫し、いける本数を決めるようにしている。

この屏風絵は表紙の屏風の裏側で、ここにはハスをと決めていた。枯れ行くハスの葉を一輪のリンドウが優しく見ている。



メリークリスマス

△3頁の花▽ 仙溪

花材 ブループアイス（檜科）

薔薇（薔薇科）

スプレー薔薇（薔薇科）

花器 陶花器

小雪（しょうせつ）を過ぎると風の冷たさに体がこわばる。でもクリスマスがやってくると思うとウキウキする。12月にいける花には温もりを感じたい。森の針葉樹に純白と深紅の花を添えると、清らかで温かな優しさが感じられる。





季節の輝き

△12頁の花▽ 仙溪

花材 衝羽根(白檀科)

からすり

鳥瓜(瓜科)

花器 陶花器

岡虎の尾(椴草科)

カラスウリの愛らしい実ほまさに季節の輝きだ。見ると思わず微笑んでしまう。葉はすぐに萎れるので撮影直前まで水に浸けておいた。オカトラノオの紅葉とツクバネを合わせると、とびきりのご馳走になった。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2022年
1月号
No. 703

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





自由な枝を伸ばす松とこの黒銀の器はどちらも風格と軽妙さを併せ持っている。両者の出逢いがつくる特別な雰囲気。いけばなの面白さはこういうところにこそあるのだと思う。赤いバラと白いランも絶妙なバランスに一役買っている。

花材 松(松科)
 薔薇(薔薇科)
 エビエンドラム(蘭科)
 花器 銀彩陶花器(森野泰明作)

新春を寿ぐ

△表紙の花▽ 仙溪



京都嵐山花灯路 桑原仙溪 (写真⑫)

12月10日(金)～14日(火) JR嵯峨嵐山駅前
 今回が最後の嵐山花灯路に多くの人が訪れていた。

花材：桐、ホーリー、すいりゅうひば垂柳檜葉、百合



春よ来い♪

△2頁の花▽ 仙溪

花材 路の臺ふきのとう
(菊科)

路の葉

椿2種 (椿科)

花器 銀滴抹茶碗 (近藤高弘作)

昨年3月初めに、春の訪れを感じながら庭の花を特別な器にいけた。毎日、心豊かに季節を味わっている。





正月花のいけなおし

△3頁の花▽ 仙溪

花材 枝若松(松科)

アイリス(菖蒲科)

スイートピー(豆科)

花器 陶花器

松、水仙、千両でいけていたのを、アイリス、スイートピーにいけ替えると、一足早い春を感じられる。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2022年
2月号
No.704

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



春の兆し

△表紙の花▽ 仙溪

花材 喇叭水仙（彼岸花科）

椿「白侘助」（椿科）

花器 鉛色釉陶花器

この花器の鉛色は雪融け水が
滴る岩肌のように。春の兆しを
感じる花が良く映る。括れた器
形に自然の息吹を感じる。





咲いた咲いた

△3頁の花▽ 仙溪

花材 青文字（楠科）

チューリップ2種（百合科）

花器 陶コンポート

チューリップの野生種は地中海沿岸から中央アジア、中国天山山脈、西シベリアの広い範囲に原生する。そんな異国の花が私達の暮らしを彩ってくれている。





有楽椿

△4頁の花▽ 仙溪

花材 啓翁桜(薔薇科)

アイリス(菖蒲科)

椿「有楽椿」(椿科)

花器 小紋柄陶花瓶

ウラクツバキの紫がかつた薄紅色は華やいだ印象。シャープな葉と仄かに香る小さな花に独特の存在感がある。ケイオウザクラ、アイリスと、小紋の器。織田信長の弟、有楽斎も気に入るだろうか。





素朴な味わい

△12頁の花▽ 仙溪

花材 照葉椿（椿科）

菜の花（油菜科）

花器 陶花器

素朴な味わいを作るのは難しい。地味すぎたり寂しすぎたりせず、シンプルなだけドキッと光る魅力がある花がいけられるようになりたい。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2022年
3月号
No.705

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



花が見る夢

△表紙の花▽ 仙溪

花材 小手毬（薔薇科）

ガーベラ（菊科）

花器 陶コンポート

（柳原睦夫作）

この柳原睦夫さんの器は見ていてワクワクする。ピンクと黄色の雲が紺色の空に浮かんでいる。模様からの連想で、コデマリを数本、白い雲がモクモクと湧き出るようにいけてみた。ガーベラで茜色を加えると夕暮れ時に赤く染まった空を思い出した。

花の表情は器によって変わる。コデマリの後ろに立てたガーベラは、雲に乗った夢を見ているような楽しげな顔をしている。





嫩葉（わかば）

△4頁の花▽ 仙溪

花材 金葉小手毬（薔薇科）

ガーベラ（菊科）

ストック（油菜科）

花器 陶コンポート

「嫩」という字には「わかい・やわらかい・みずみずしい」といった意味があるので「嫩葉」を「わかば」とか「ふたば」と読む。「嫩」の音読みは「どん・のん」である。あまり使う事のない漢字だが、知っておくと何だか物知りになった気分を味わえる字だ。

今年も若葉の季節がやってくる。私達が寒い寒いと言っている間にも、植物たちは葉を広げる準備を怠らない。寒さに耐えた先に、温かな光の季節が来ることを知っているのだ。

金葉小手毬の若葉にストックとガーベラが優しく寄り添う。





花の器

△7頁の花▽ 仙溪

花材 満天星（躑躅科）

石楠花（躑躅科）

花器 陶花器（竹内眞三郎作）

「立花時勢粧」に使われている器の種類は96種類もあり、それぞれ形も装飾も違うので見ていて飽きない。またそれが器の上の立花の雰囲気と絶妙に合っているところが凄い。

今、家にある器も様々で、いけない花に合う器を考えるのが楽しい。花が器を気に入って心地良さそうに見える、そんな基準で選んでいる。

この写真のドウダンツツジもシャクナゲもかなり大きな枝である。竹内眞三郎氏の黒い岩のような器は、どっしりとした安心感と、切り立った崖のような緊張感を併せ持つ。挿した枝の風格を引き出してくれる。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2022年
5月号
No. 707

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



白い花菖蒲

△表紙の花▽ 仙溪

花材 花菖蒲 (菖蒲科)

花水木 (水木科)

花器 陶花器 (清水卯一作)

紫色の印象が強いからだろうか、白いハナシヨウブには特別感がある。

ハナシヨウブは野生のノハナシヨウブの園芸種だが、ノハナシヨウブは赤紫から青紫が多く、白花は極めて珍しいそうだ。森の中で水辺に白い花が咲いていたら、さぞ神秘的な光景だろう。いつか出逢ってみたい。

ハナミズキは北アメリカ原産でアメリカを代表する花木だ。明治時代に日本からソメイヨシノが送られ、その返礼に日本へやってきた。近年街中に多く植えられるようになり、桜の散った後も目を楽しませてくれる。好みの壺で、花の出逢いを楽しんだ。



京都東山花灯路 2022

後期展 3月9日～13日 法観寺前

桑原仙溪 花：連翹 器：陶花器 (竹内眞三郎)



駅 de 華道、書道と茶道 3/12・13 京都駅前広場 展示 桑原仙溪ほか 体験イベントは中止



赤いスカビオサ

△4頁の花▽ 仙溪

花材 スカビオサ (忍冬科)

宿根スイートピー (豆

科)

夕霧草 (桔梗科)

花器 陶花器 (福本双紅作)

スカビオサは南ヨーロッパ、
 アフリカ、アジア原産で、日本
 のマツムシソウの仲間だ。マツ
 ムシソウは薄紫色の花が咲く日
 本の野草で山地の草原に育つ。
 花の後にできる球状の膨らみ
 が、僧侶が巡礼の時に持つ松虫
 鉦かねに似ているところからこの名
 がついたそうだ。

濃い赤色のスカビオサに白い
 宿根スイートピーがよく似合
 う。緑のユウギリソウは草原の
 代わり。紫の宿根スイートピー
 をアクセントに。

横から見た花の奥行





立派な円錐形

△6頁の花▽ 仙溪

花材

柏葉紫陽花(紫陽花科)
芍薬(牡丹科)

花器 陶花器

カシワバアジサイは北アメリカ原産。花が円錐状につく。鉢で育てているが毎年花を咲かせる遅い花だ。赤いシャクヤクと黒い器にシンプルに。





流木を使う

△2頁の花▽ 仙溪

花材

裏白の木 (ばら科)
躑躅 (躑躅科)

鉄線2色 (金鳳花科)

流木
流木

花器 銅立花瓶

流木に足をつけて器にさしておき、季節の木や花を加えて自然な景色をつくってみた。流木の重みにつりあった安定の良い銅器にいける。





クルクマ

△12頁の花▽ 仙溪

花材 クルクマ・シヤROOM

(生姜科)

透かし百合(百合科)

モンスセラ(里芋科)

花器 陶花器

クルクマは夏のいけばなに重宝する。インドやタイの熱帯の花なので暑さに強い。ハスの花のようなものからタテに長く積み重なったものまで種類も多い。花を守る白やピンクの包葉が美しい。子供を護るお母さんのような花だ。





㊦チョコレート色の蕾。
㊧ニューサイランの株。



ニューサイラン
△5頁の花▽ 仙溪
花材 ニューサイラン2種
(竜舌蘭科)
鉄砲百合(百合科)
トルコ桔梗(竜胆科)
花器 陶水盤(伊藤典哲作)
びわ湖大津館イングリッシュ
ガーデンでニューサイランの花
を見つけた。真っ直ぐに伸びて、
天に昇らんとする龍のようだ。
いける時も葉の勢いを生かした
い。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2022年
8月号
No. 710

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





檜扇と七竈

△表紙の花▽ 仙溪

花材

檜扇ひおうぎ（菖蒲科）
ななかまど

七竈ななかまど（薔薇科）

ベル鉄線てつせん（金鳳花科）

花器 陶花器（竹内眞三郎作）

ヒオウギは古より邪気を払いのける力があるとされ、ナナカマドは火災除け、落雷除けの木とされた。そんなことを知らなくとも、この2種の組みあわせには不思議な力が感じられる。白い器と赤い花が良く合っている。





源為朝

みなもとのためとも
 〆2頁の花〷 櫻子

花材 作百合(百合科)

唐糸草(薔薇科)

桔梗(桔梗科)

花器 陶花器(清水保孝作)

源為朝は平安時代末期の武將で、頼朝・義経兄弟の叔父にあたる。身長2mを超す豪傑で、九州・琉球・京都・伊豆諸島などに多くの伝説がある。

琉球のテップウユリ、伊豆諸島のサクユリ、そして京都ではヤマユリ(の変種?)がそれぞれ為朝百合と呼ばれている。

蓄で買ったタメトモユリは赤い斑点の無いサクユリだった。写真で見たことはあるがいけるのは初めて。源為朝の伊豆での勇姿を想像して楽しんでる。



サクユリ



ヤマユリ





夏の夜空

△4頁の花▽ 仙溪

花材 サンダーソニア

(百合科)

オーニソガラム

(百合科)

ネオレゲリア

(パイナップル科)

ピットスポラム

(海桐花科)

花器 陶コンポート

竹と紙で作られた小さな気球が夜空に昇って行く。天燈は昔の夜の通信手段だったものが、無病息災を祈る民族習慣となり今に伝わるそう。サンダーソニアは南アフリカ原産だが、花の姿からチャイニーズランタンリリーとも呼ばれる。

夏の夜空をイメージして、他に星の形をした花や葉を持つものを3種組みあわせていけてみた。



初歩の盛花
立体真主型

△5頁の花▽ 仙溪

花材 雪柳(薔薇科)

女郎花(女郎花科)

鶏頭(苧科)

花器 陶花器

細くて短いユキヤナギだったので、オミナエシを主材として高くいけ、ユキヤナギを添わせました。同じ取り合わせであっても、それぞれの姿に合わせた花型を考えていきたい。





花材／檜扇 グロリオサ 棕欄竹 著莪の斑入り葉 花器／染付鉢

第36回 祇園祭にいける
いけばな展 仙溪

今年には祇園祭巡行復活にあ
わせて、祇園祭いけばな展も
復活開催され、私は創作京履
物「伊と忠」さんを担当。店
舗の一角を大きく空けて下さ
り、のびのびといける事が出
来た。
店内には和装の履物やバッ
グが並び、職人さんの仕事も
間近で拝見することができ
る。



ブドウのような

△12頁の花▽ 仙溪

花材

洋種山牛蒡ようしゅやまごぼう (菖蒲科)あやめ

オンシジウム (蘭科)

レナンセラ (蘭科)

花器

ガラス花器 (クリシー)

セイヨウヤマゴボウは黒紫色に熟した実が潰れると服に色がつくので困る。けれども実が熟す前の枝は、野ブドウのように垂れ下がる実が面白く、白い小さな花もついていて、園芸植物には無い自然味がある。
アンティークのガラス花器に2種の蘭を添えていけると、エレガントないけばなになった。





リコリス

△4頁の花▽ 仙溪

花材 裏白の木の实(薔薇科)

リコリス(彼岸花科)

スプレー菊(菊科)

花器 採泥陶花器

(宮下善爾作)

リコリスは東アジアの暖地に分布する多年草。鮮やかな黄色の花弁が反りかえり、光を放っているような明るさがある。

黄色から赤に色づき始めた実とオレンジ色のキクを合わせて、色彩の繋がりを楽しんだ。

光る実

△5頁の花▽ 仙溪

花材 酸漿・鬼灯(茄子科)

女郎花(女郎花科)

木苺(薔薇科)

花器 陶花器(市川博一作)

仙齋・素子の「花ふたり旅」スウェーデン編にホオズキをいけた花がある。ガラスメーカー「コスタ・ボダ」を訪れ、近くの花屋で花を買い、コスタ・ボダのガラス花器に付けて写真を撮った。ホオズキは長い茎に実がついたまま乾燥した状態だったのを、色を強めるため束にして実の塊をつくった。

コスタ・ボダ社のゲストハウスの一室。部屋の照明を消し、テーブルに大きな黒いガラス花器を置き、ホオズキとエノコログサを母がいけるのを横で見ていると、窓から差す光でホオズキが輝きだした。枯れてカサカサだったホオズキが生き生きと蘇るのを目の当たりにして、いけばなの力に圧倒された。

この花を何と合わせ、どんな器にいけ、どういけるか、いけた花をどこにどう置くかで、花の個性がキラッと光ることを教わった。私の大切な思い出であ



る。

明かりが灯ったように見せたくて、黒い背景に黒い器で立派なホオズキをいけた。長く使ったがよく水を吸い上げている。緑をキイチゴで補い、オミナエシで光を広げた。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2022年
10月号
No.712

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



季節を味わう

△表紙の花▽ 仙溪

花材

野茨のいばら（薔薇科）

糸菊いとぎく（菊科）

木苺きいちご（薔薇科）

花器 陶水盤（市川博一作）

赤い実に紅葉した葉を合わせ
季節の花を覗かせる。この組み
あわせが気に入っている。いけ
あがった姿をあれこれと想像す
るのが楽しい。

その季節の自然の恵み、輝き
を感じる花をいけたい。





ホトトギス

△2頁の花▽ 仙溪

花材 杜鵑草ほしとぎす(百合科)

白花藤袴ふじはかま(菊科)

小菊こぎく(菊科)

花器 陶水盤

風が涼しく感じられる頃、ホトトギスの花が咲きはじめる。葉の脇に咲くものと、茎の先端に咲くものがあるが、後者なら伸びやかに軽やかに、葉と葉の隙間を見せていきたい。

赤と白の小花がホトトギスの花色に優しく寄り添っている。





実の色を集める

△3頁の花▽ 仙溪

花材 蔓梅擬(錦木科)

菊(菊科)

白花藤袴(菊科)

花器 陶水盤

ツルウメモドキの勢いを楽しんでつけた。前方に実を集め、緑の濃淡で実の色を際立たせた。





空色の器に

△5頁の花▽ 仙溪

花材 山菜蓼の実（水木科）

岡虎の尾（桜草科）

金水引（薔薇科）

花器 陶花器（木村盛伸作）

水が冷たく感じる季節。実が色づき、葉が秋色に染まってくる。小さないけばなでいいので、移ろう季節の輝きを部屋にいて眺めていたい。





コガネシダ

△3頁の花▽ 仙溪

花材

美男葛(松房科)
水仙(彼岸花科)

黄金羊歯(岩檜葉科)

花器 燻し赤花器

小さなシダが密生した鉢植を

土ごとビニールで包んでいけて
いる。黄金色というより、曙色
だろうか。優しい色の繁みから
季節の実と花を覗かせた。





2種の実

△4頁の花▽ 仙溪

花材 姫榿杉(檜科)

七籠の実(薔薇科)

梅檀の実(梅檀科)

花器 金属花器

ナナカマドとセンダンの実と常緑のヒムロスギ。実たちが主役のいけばな。





枯れヒマワリ

△12頁の花▽

花材

枯れ向日葵3種(菊科)

芭蕉の枯葉(芭蕉科)

薔薇2種(薔薇科)

木苺(薔薇科)

花器 陶花器(近藤豊作)

日本いけばな芸術展出品作

横田慶重 米山慶嘉

川瀬慶裕

指導 仙溪・櫻子

枯れヒマワリと呼ばれるけれど、無数の実りが詰まったその顔は艶やかで美しい。その美しさを知っている栽培家によって種が欠けてしまわぬように大切に梱包され、乾いた茎には添え木までされている。

そういえば、3月の流展で私がいけた桜はとても大きな枝で、束を解くと数百箇所的小枝が丁寧に紐で絞られていた。気の遠くなるような作業だ。この老桜をどれほど大切にしていたのだろうと想像しながら聞いていたら、いつのまにか桜の立花を立て終えていた。

いける花を届けてくれた人のことを思うことで、その花への思いはより深くなる。いけばなは外見的には花と器の世界だが、そこには多くの人の思いが加わっているのだ。



白文字 〆2頁の花V 仙溪

花材 白文字(橘科) 水仙(彼岸花科)

アスター(菊科)

花器 陶水盤

シロモジはハタウコンとも呼ばれ花はアオモジやクロモジに似る。枝はとても硬いため器の外で剣山にとめてからいけた。アスターは別名エゾギク。赤花の品種は水仙によく似合う。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2023年
2月号
No.716

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



花の出会いと

そのバランス

△表紙の花▽ 仙溪

花材 シンピジウム(蘭科)

葉牡丹(油菜科)

花器 フランス製陶鉢

いけばなの良し悪しは、花がいかに生き生きしているかによるところが大きい。そのように見えるためには個々の花を生かす技術を磨く一方で、花たちにその内なる魅力を発揮させるための出逢いを工夫することが鍵となる。

飴色のシンピジウムに白いハボタンを組みあわせて緑色の鉢にいけると、花たちが勢いよく輝きだした。

ここに別の花を加える必要はないし、それぞれの分量も丁度いいバランスだ。

暫くしてハボタンが大きくなったら、シンピジウムの葉を足すといい。





いけなおし

^ 12頁の花 ^ 仙溪

花材 白文字くすのぎ (楠科)

桜草さくらそう (桜草科)

花器 陶花器

先月号で水仙といけたシロモジが一ヶ月たっても元気なので、短くしてサクラソウといけなおしてみた。固かった花の蕾も膨らんで、数カ所咲き始めている。

さらに2週間が経ち、ほとんどの花が咲いてくれた(左の写真)。毎日私たちの暮らしと共にいてくれる。小さな花たちが健気で愛おしい。





枝の形にあわせる

△3頁の花▽ 仙溪

小手毬こてまり（薔薇科）

チューリップ（百合科）

陶花瓶（谷口良三作）

コデマリの足元にT字配りをして
おくと、チューリップがい
けやすくなる。コデマリの枝振
りは千差万別。上下二段に出
して、その姿に合わせてチュ
リップをいけてゆく。





サイズをあわせて

△4頁の花▽ 仙溪

木苺(薔薇科)

ヒヤシンス(キジカクシ科)

ストロベリーキャンドル(豆科)

陶花瓶(崔龍熙作)

足元に咲く小さな花を2種出
合わせて、芽吹き始めた枝を足
し、小ぶりの器にかけた。キ
チゴの若葉が広がり、花はどち
らもぐんぐん伸びてくる。ヒヤ
シンスの甘い香りも楽しめる。





頼もしい繁み

△5頁の花▽ 仙溪

雪柳(薔薇科)

アマリリス(彼岸花科)

金盞花(菊科)

陶コンポート

キンセンカはあまりいけてこ
なかつたが丁寧に扱うことで豊
かな緑と鮮やかな花色を楽しめ
る。時々全体を水で洗い、いけ
なおすと元気でいてくれる。

アマリリスとも仲が良さそう
だ。ユキヤナギの白い花が爽や
かに広がる。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2023年
4月号
No.718

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



柔らかな思考

△表紙の花▽ 仙溪

シンピジウム（蘭科）

薔薇（薔薇科）

エピデンドラム（蘭科）

陶花器（柳原睦夫作）

12月から飾っていた鉢植のシンピジウムを切っていけることにした。合わせる花を花屋で選び、家に戻って花を見ながら器をあれこれと考える。

先月号に書いたが、いけばなは微妙な違いや変化を感じとる感覚を養うことに効果がある。固定観念にとらわれず、頭の中を真っ白にして、花に合う器を思い浮かべてみたらこの花器が出てきた。いけてみると新鮮ないけばなになった。あつぱれ自分、と自画自賛している。柔らかな思考のお陰である。

皆さんも、花と花、花と器の新鮮な出逢いを生み出す喜びを味わってほしい。





かわいい花

△7頁の花▽ 仙溪

イオノシジウム(蘭科)

椿(椿科)

青白磁花器(市川博一作)

このかわいい蘭は「ももちゃん」という。オンシジウムとその近縁種イオノプシスの交配種だそう。イオノプシスはメキシコから南米に分布する。日当たりのよい場所を好む乾燥に強い極小型の着生蘭だが、一般にはほとんど流通していないそうだ。そんな珍しい蘭を親としてできた「ももちゃん」を家の椿と一緒にいけた。

いわば遠来の客人をもてなす感覚。椿の若葉が優しく迎える。器は南米と日本をつなぐ海のイメージ。ももちゃんと比べると椿の花が大きく見える。あえて椿は一輪だけにした。





優しい葉と花

△ 3頁の花 ▽ 仙溪

日向水木ひやうがみずき (満作科)

笹百合ささゆり (百合科)

鉄線てせん (金鳳花科)

八角染付花瓶

ミズキと名がついていてもミズキの仲間ではない。ミズキは白い4弁花が上向きに集まって咲くが、トサミズキやヒユウガミズキは淡黄色の小花が下向きに穂状にぶらさがって咲く。

ヒユウガミズキは別名イヨミズキ、ヒメミズキとも呼ばれ、花の後で小さな優しい葉を広げる。葉がしっかりとくるころ、山ではササユリが土の中から生まれ出る。

一緒にいけてみると、両方の優しさが合わさり、とても善い雰囲気生まれた。テッセンを加えると、ササユリのほのかな色が際立った。





梶の木

△2頁の花▽ 仙溪

梶の木(桑科)

透し百合(百合科)

トルソー形陶花器

カジノキはクワ科・コウゾ属の落葉高木。古代から神木として尊ばれ、神事の供え物の敷物に使われた。樹皮はコウゾと同様に製紙原料となる。

中国の「乞巧奠」という行事が奈良時代に日本に伝わった。牽牛・織女の二星が天の川を渡つて逢う陰暦7月7日に、手芸・裁縫などの技巧上達を祈る。この時、カジノキの葉に願いを書いて、七夕飾りの短冊として使われた。

今年も七夕には庭のカジノキをいけようと思う。去年と今年とで葉の形が変わったようだ。三叉槍のような形が邪気を払い除けてくれそうだ。





バランスをとりながら

△4頁の花▽ 仙溪

柏葉紫陽花(紫陽花科)

桔梗(桔梗科)

スプレー菊(菊科)

結晶釉花器(前田保則作)

花屋さんの庭で育ったカシワバアジサイ。花の重さのわりには茎が細い。背の高い器に投入にしようか迷ったが、深鉢に盛るように入れてみた。

器の底に剣山を置き、柱を4本立てて×形の仕掛けをし、その中心にもたれさせるのだが、花の重みと撓る茎との微妙なバランスを試しながらなんとかいけられた。器は鉢形だが、投入のようないけ方をしている。

個性的な花材をその枝の向くままにいく。そんないけ方が私には合っているようだ。もちろんこちらの思いも加わるが、花の気持ちを手を感じとりながら花と折り合いをつけている。





南米 パンパ平原

△3頁の花▽ 仙溪

パンパスグラス (稲科)

向日葵 (菊科)

舟型陶花器

パンパスグラスの故郷、パンパ平原は、アルゼンチンの首都・ブエノスアイレスを中心にした半径約600キロの半円形の地域。起伏のない広大な平地で、関東平野の約60倍の大きさがあるという。

そんなところで育つパンパスグラスは強靱で雄大。細くて硬いノコギリのような葉を持ち、大きな花穂が高く立ち昇る。

作例のパンパスグラスは花穂が既に出た状態だったので、大きな花穂を主役に立てて足元にヒマワリを集めた。濃い色のヒマワリを多めにいけると、花穂が輝いて見える。





深山の気

〆12頁の花〷 仙溪

檼(檼科)

夏櫨(躑躅科)

山紫陽花(紫陽花科)

陶花器

アジサイの季節が過ぎて梅雨も明けた頃、京都では祇園祭山鉾巡行が無事に執り行われた。古から厄除けの力を持つとされる檜扇(古名・烏扇)をいけて飾るのも古都の歳時記である。

そのあとは真夏の太陽が容赦なく照りつける。庭のムクゲも花数を減らして暑さに耐えている。床の間には清流や滝の絵を掛けて、奥山の涼風を感じたい。

イチイの幼木に色づいたナツハゼを重ねて、その足元にまだ色の残るヤマアジサイを覗かせた。真横へ長く伸びるヤマアジサイに出逢ったことからとり合わせを考えだが、深山の気を感じる花になった。



横から見た奥行



蓼科で8月24日撮影

七竈の赤い葉
 ^ 2頁の花 ^ 仙溪

七竈しちそう (薔薇科)
 秋明菊あきみぎく (金鳳花科)
 瑠璃虎の尾るりこのび (胡麻の葉草科)
 陶水盤

青葉に赤や黄に色づいた葉が混じっているのを「わくら葉」と呼ぶ。信州の森で撮った写真にも写っていた(左)。虫などによる自然現象だが、この仕組みを利用してナナカマドの切り枝を人工的に紅葉させることができる。作例の盛花は真夏にいたが、一週間以上元気だった。自然では実の方が葉よりも先に赤くなるので見分けがつく。



流木・晒木

△ 4 頁の花 ▽ 仙溪

胡蝶蘭 2 種 (蘭科)

棕櫚竹 (椰子科)

蠟梅の根塊

ガラス花器

この塊はロウバイの根と聞いている。何とも味わいのある形だが、ここまで特殊でなくても、流木や晒木を園芸店などで見つけたら、気に入った形のものを手に入れておくといい。作例の白い蘭は鉢植で買ってきて根を洗って根つきでいけている。剣山に立てた支えに括っているので剣山を隠すものがようになる。そこで流木などが役に立つ。自然でもコチョウランは木や岩に根を這わせて咲いているので、良い景色をつくってくれる。庭のシュロチクの若葉を加えて、黄色いガラス器にいった。南の島のイメージ。





涼をもとめて

△12頁の花▽ 仙溪

アレカ椰子(椰子科)

ヘリコニア・アンドロメダ

(芭蕉科)

クルクマ(生姜科)

ガラス花器

鳥の羽根を大きくしたようなアレカヤシの葉は、その隙間からそよ風が吹いてきそうだ。1本の姿もいいが、数本を前後に重ねるとダイナミックな造形空間が生まれる。じっくり考えるのもいいが、水際ぎりぎりに葉がくるよう無造作に立ててゆく。

相手には南国の花が良く似合う。それらをアレカヤシの葉と葉の間に配置してゆく。足元が見えるので、剣山を小石で隠し、たっぷりの水を入れると水際も見せ場になる。



ハランの枯葉

△2頁の花▽ 仙溪

ペニセタム・パール・マジエ

ステイ(稲科)

スプレー菊(菊科)

葉蘭の枯葉(百合科)

陶花瓶(宇野仁松作)

出逢いから生まれるいけばなを
楽しもう。

暑さが緩むと庭のムクゲが二度目の盛期を迎える。毎日萎れた花を拾い集めているが、しゃがんで見ると繁みに隠れていた枯葉色に気付いた。ハランの枯葉だ。採り集めるとなかなかいい感じである。捨てずにおいたところ、相手に似合いそうな花材にも巡り会えて、このいけばなになった。

黒い穂はアフリカ原産の多年草をもとにアメリカで作られた園芸品種。強烈な個性をハランの枯葉が受け止めてくれている。





サラシナシヨウマ

∧12頁の花∨ 仙溪

更科升麻・晒菜升麻

(金鳳花科)

山芍薬 (牡丹科)

大毛蓼 (蓼科)

流木

陶変形深鉢

中央アルプス登山の起点、千畳敷カールへはロープウェイで行ける。その日本一標高の高い駅に着くまで、様々な樹木の上を飛ぶように移動するのだが、木々の奥底に白い紐状のものが点々と見えた。サラシナシヨウマだ。8月末頃であった。かなりの高さからもそれと分かるほど印象深い白い花穂。切り花では長くはもたないが、しばしの間でもいけて、山の余韻を感じていたい。ヤマシヤクヤクとオケタデのそれぞれの赤色が白い花穂をより白く見せる。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2023年
11月号
No. 725

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



彼岸の記憶

△表紙の花▽ 仙溪

彼岸花 (彼岸花科)

薄 (稲科)

プロテア・コルダータ

(ヤマモガシ科)

飴色釉陶花器

彼岸の頃、奈良の葛城山にスギを見に行った。東に大和盆地、西に大阪平野が見渡せる山頂はスギの原。白い穂が風に舞い輝く。帰路は黄金色の稲穂と真っ赤な彼岸花を見ながら御所まで歩いた。大和朝廷ゆかりの地を訪れた印象をいけた。





稽古の花 ①

10月3日撮影 仙溪

梅花躑躅 (躑躅科)

菊2種 (菊科)

陶水盤

近年花の値段が上がっている。税抜き1300円で稽古花の参考にいけてみた。

但し地域によって花の値段は変わる。同じ地域でも花屋によっても違いがある。品揃えや品質が良い花屋では単価は高くなるかわりに、良いとり合わせが期待できる。

写真の花は秋の菊が出始める前に品薄で菊の値段が高騰していた頃、菊2本とバイカツツジは一本の半分量だが、季節を味わうには充分だ。ツツジの艶のある葉の色づきと、丸花スプレーギクの臘脂色えんじが秋を感じさせてくれる。良い状態の菊の葉はすべて大切にいらしている。





緑の温もり

仙溪

姫榊杉(檜科)

ダリア(菊科)

ストック(油菜科)

陶花器

年の終わりが近づくにつれ、赤い花と白い花の組み合わせが恋しくなる。この花は昨年12月6日撮影。赤いダリアと白いストックがその時の気分にぴったりに合っていた。しかし問題はそれらに合わせるもう一種の花材だ。近年増えて来たヒムロスギがそんな悩みをかき消してくれる。フワフワした葉はデリケートな花にも優しく寄り添ってくれる。温もりを感じる質感が、初冬の冷たさに心地よい。

ヒムロスギはサワラの園芸品種で、なぜかサツマスギの名で出回っていた。包まれて萎縮した枝を丁寧を広げると、本来の張りをとりもどして生き生きしてくる。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2023年
12月号
No.726

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



稽古の花 ②

△表紙の花▽

11月7日撮影 仙溪

梅擬「ウインターベリー」

(繻の木科)

薔薇 (薔薇科)

スプレー菊 (菊科)

陶花器

稽古花のとり合わせはできる限り花屋に行つてするようにしている。今の季節にこの花なら喜んでもらえるかな、というのが基準になる。前回と同じ花は避けている。「またこの花？」とならないように。多くの花や木の中から、ピカッと光を放っているものを選ぶ。葉の状態、互いの色合い。

今回はバラに一目惚れ。悩んだ末にこの3種になった。(税抜き1300円。)





白い実と白い花

仙溪

白梅擬 (繻の木科)
しろうめごい しろの木のき

水仙 (彼岸花科)
すいせん ひがんぼな

白椿 (椿科)
しろつばき

獅子耳銅立花瓶

小ぶりの立花瓶に格の高い花材3種を投入でいけた。白実のシロウメモドキはいける機会も希なので、その白色に敬意を示せるような相手を探していたところ、敢えて白い花をとり合わせてみてはどうかと閃いた。

以前、ドイツで白い花だけの庭を見たことを思い出した。様々な白い花が咲く庭は幻想的で、庭をつくった人の色へのこだわりを強く感じた。同色の濃淡の世界は、その色の世界へ誘われる感覚を与えてくれるのだと思う。

3種の白色をいける器の選択もなかなか難しい。色を感じさせない銅器を選んだ。

